

で、市中の肉屋を調べ、肉を買ふ分量の増した家を聞いては片ツ端から調べる。又パンの注文の殖へた家を調べるで、此際、印度人隠匿嫌疑で調べられた家が七十餘戸に及んだと言はれる。

警視廳では、頭山邸へは遠慮したものゝ、他の浪人黨の自宅には相當執拗に見張りを置いた。

池袋の畑の中の一ツ家に住んで居た宮崎滔天氏の處が一番に狙はれ、誰れか出入りする間に探査

の緒口を得られそうなものといふ警察眼から、夜中、刑事が垣根を破つて忍び込んだ。滔天氏は

可笑しくなつて、態ざと「泥棒々々！」と大聲に叫んだもので、刑事が慌てゝ逃げ出したなどい

ふ珍談もある。

英國大使館では、横濱邊の某探偵社を買収して二印度人の行方を極力搜索する。各所の料理

店、俣宿、たばこ店、郵便局、荷くも、人溜りのする處には、夫れく目安を置いて此の探偵社

が水も洩さぬ警戒をする。

其中、一度ボース氏は病氣に罹つた。従來、ボース氏と外界との交通連絡は、黒龍會の葛生氏

が主として之に當つたのであるが、隠れて居る者を公然と醫者は聘べない。こんな時には最も苦

心した。外廻りの苦心は葛生氏の受持であるが、内の手當ては一層困る。第一看護婦を雇ふ事は

危険至極である。そこで、當然の結果として、ボース氏の病臥時、中村屋の長女とし子さんが身

の廻りの世話をする事となつた。是迄ボース氏は已に二ヶ月餘りも中村屋に隠れて居たけれども此の娘さんの姿を見る機會は餘りなかつたらしい。今病氣が取持つて呉れた不思議な縁が始まつたのである。

甲斐々々しく何くれとなく自分の世話をして呉れるとし子さんの姿を見るにつけ、其の片言な英語でたどくしく物を言ひかけられる時のボース氏の胸は躍つた。春の日影麗らかに障子に差して居る病床の熱血青年は天女の見舞として毎日、とし子さんの來るのを待ちかねる身となつたのである。

日本政府の保護下に置かる

兎角して二月三月が過ぎて、我が外務省にも反省の時が來た。折角頼つて來た印度亡命客をむざ／＼英國に引渡すといふ事は國家の體面に關するといふ考へが、日増し外務省畑へ萌して來た。それに頭山翁一黨の頑強な態度には逆も齒が立つものでない事が能く解つて來た。同じ大隈内閣の閣員中にも、黒龍會員と同志關係にある河野廣中氏などあつて、外務省の弱腰を暗に攻撃する。然ういふ氣運からして遂に、石井外務大臣と、寺尾亨博士の會見となり、其結果は仰

一六八
氏と石井外相との談判となり、延ひて三河屋に於ける頭山石井會見といふ處迄漕ぎ付けて印度亡命客は、頭山翁が責任を負ふて預かるといふ事に落着した、此の経緯は已に内田良平氏の談の中に詳述した。

然うなると、日本政府の手で、ボース氏の身は保護するといふ約束が出来たので、浪人黨は初めて安心し、ボース氏も愁眉を開いたのである。是れが四月の事で、ボース氏も今は中村屋へ潜伏する要もなく、麻布の龍土町に一戸を借りて住んだ。其頃迄グプタ氏は大川氏の處に居つたのであるが、此時、彼れは米國へ渡つた。

併し、ボース氏の身が決して絶對安全になつたのではない。英國では飽迄彼れを見付け出して大使館へ引込んで来て、存分の仕末をするといふ肚で居る。ボース氏は狙はれて居る事は今も變りはない。唯だ、狙ふのは英國人で、日本の政府は之を保護する約束なのである。と言つて、護衛を付けて呉れるのでないから寝込みを襲はれるか、外出先きで捕へられるかして英人の手に落ちたら首は無いものである。風聲鶴涙に肝膽を寒からしむる気分は更らに變らないのである。龍土町に移つて見て、籠を出た鳥の様に朗らかな心になつた筈のボース氏の胸には却て、物淋しい堪へられない懊惱が積つた。中村屋のとし子さんの面影が寸時も彼れの眼から離れない。相馬

夫人は、此の熱血なる印度青年を我子の様に面倒見て呉れて、毎日の様に龍土町の家に見舞に来る。時にはとし子さんを同行して来る事もある。其中、犬養毅氏が一度、ボース氏を其の龍土町の寓に見舞ふと言ひ出した。ボース氏も一寸困つた。日本の有名な大政治家として憲政の神と諺はれた犬養氏を自分の寓居に御招待するには、どうしてよいか分別に餘つた。そこで、中村屋のお母さんに相談した。お母さんといふのはとし子さんの口吻から何時の間にかボース氏の口癖になつた黒光女史の稱呼である。

「それは結構です。私がとし子を連立つて来て犬養さんの御接待をしませう」と、お母さんが引受けて呉れた。

で、當日は、犬養氏が見え、中村屋母子が手傳ひに来て呉れて、一同打解けた親しみある會談に午後半日を楽しく語り暮した。同時に、ボース氏にしては、とし子さんの情思が一層深くなつたのである。

上總一の宮の一ト夏

其中、夏が来た。龍土町に永く居ると自然英國側の探偵の目にも留まらうといふもので、世間

一般皆な避暑に出かけるのだから、ポース氏もほとぼりをさます爲めにも都合がよいといふ事で八月に九十九里は一の宮へと轉地した。黒光女史母子も後から一の宮へ出かけて行つて同じ家中に起臥したのである。其年は雨が多かつた。一の宮の川水が増して、一度は洪水騒ぎが起つた。そこで、ポース氏等一行は、ある旅館の別荘を借りて住む事となつた。此の旅館へは頭山翁も訪ねて来て毎日、天下の形勢を談じたものである。

一夏は楽しく過ぎてポース氏は秋になつて東京へ歸つて來た。そして今度は麻布霞町に戸を借りて住んだ。そこに一年ばかり居て、今度は廣尾へ轉じた。ポース氏は、折り／＼頭山邸、犬養邸、内田良平氏の黒龍會、新宿の中村屋へなど、遊びに行つたのであるが、英國の探偵は矢張り嚴重であるので、日中は餘り出ない、多く夜中に人目を忍んで出かけた。すると、英國大使館から買収された探偵社では、東京市中の俣宿の俣夫を夫れ／＼買収して、印度人の行方を知らうと力めた。それが一度圖に當つて、ポース氏はまんまと畏にかゝる處であつた。

といふのは廣尾に居る時、何時も近處の俣宿の俣に乗つて夜分出かける事にして居たが、そこに、例の探偵社から買収された俣夫が一人居た。其の俣夫は、宿の娘に向ひ、「今夜の客は印度人だね、己れは密告してやらう」と、うっかり口を滑らしたものだ。其娘は、びつくりして、父親

に此事を告げる。それでポース氏は危険の身に迫つた事を知り、其夜から又新宿の中村屋へ身を隠した。

日印結婚

其中に、ポース氏と、とし子さんの相思の情が募つて、兩人は遂に結婚する事となつた。頭山翁は之に賛成されて、「印度と日本の契が出来るのぢや」と言つた。そして自身俣人役を取り、大正七年七月九日、日印結婚式は靈南坂の頭山邸で擧げられた。こうして、ポース氏の爲には、日本は第二の故郷となつたのである。

此の結婚の事が、英國大使館へ知れると、英人の焦燥は一段を加へた。早く彼れ反逆人を捕へて仕末しなくてはならぬとばかり極力捜査を嚴重にした。一日とし子さんが、實家、新宿の中村屋へ行つての歸り、近所の料理屋の二階から覗いて居た探偵社の手先が、早くも夫れを推して、探偵社へ密告した。探偵がとし子さんの後をつけた。電車から電車へと追つかけて、義經の八艘飛びもどきにとし子さんの歸宅する處を尾行して、其の假寓を知らうと力めたのである。其事が、中村屋へ知れて、葛生氏へとし子さんを途中から喰ひ止めて、一先づ葛生氏の宅に入る様

にと電話があつた。葛生氏は、停留所へとし子さんを迎へて、ポース氏の假寓へ歸つてはいけな
いと告げ自分の宅へ連れて來た。そして、ポース氏の宿所は遂に敵に知れず済んだのである。
此事あつて以來、ポース氏は一層警戒を嚴にした。そして、やがて谷中へ轉居した。そこで一子
を儲け、其後又一子を得て、二人の子の親となつた。

其間にも、英國の探偵の手にかゝつて數ば危険に遭遇したのであるが、一命を完うし得て、大
正十年となつた。世界戦争も終結し、英國がポース氏に對する探査も大分緩んで來た。それに、
日印結婚といふ事からして、日本政府がポース氏を保護するの厚い事も知れて、英國側でもモウ
無茶な事は出來ない羽目になつた。ポース氏夫妻も、ホツとして今は公然と新宿三丁目の中村屋
の近所に借家して、何處へも出歩く状態となつた。大正十一年になつて、印度に居るポース氏の
知友等は英國の印度總督に向つて外國亡命客を赦して歸國させる事を願ひ出でた。併し、ポー
ス他三名のラホール反亂の首領だけはどうしても赦さない。英國の領土に入れば、即刻死刑に處
するといふ。斯うなつては、ポース氏も立つ瀬がない、遂に日本に歸化する事に決した。それは
大正十二年七月二日の事であつた。英國側では、歸化と聞いて地だら踏んでくやしがつたとい
ふがモウ遅い。

斯うしてポース氏は日本人として青天白日の身となり、大手を振つて歩けるのである。

忠實なりし妻よ！

ポース氏は何時か語つた。

「私の妻とし子は、實に忠實で且つ勇敢で賢明であつた。私は或る處で、妻に向ひ、お前はどん
な事でも私の命する事なら其通りにしますか」と言つたら「それは屹度あなたの言ふ通りにしま
す」といふ。「それでは、今此の二階の欄干から下へ飛び下りて見なさい」といふと、彼女はしば
しぢつと考へて居ましたが、やがて目に涙を浮べて私の顔をちらと見るや、すつと起つて二階か
ら飛び下りやうとしたので、私はびつくりして引留めたのです。彼女は、忠順な妻として二子を
儲けて、私と幸福な家庭を作つたのですが、不幸にして先年、私を後に死亡しました。併し私は
彼女に對して満腔の感謝を捧げ、死向ほ生けるが如く思ひ、今は只だ殘された二兒の成長を唯一
の樂みとして居るのです」。

尙ほ、殘つた一つの質問は、ポース氏が日本へ逃げて來る迄の半生の經歷である。之に關して
ポース氏の語る處を綜合すると左の如きものである。

日本へ渡る迄

ポース氏が、ラホールに革命反亂を起したのは、大正四年二月廿一日の夜であつた。西曆千九百十五年のことである。

パンヂヤブ州の都、ラホールに秘密本部を置く印度革命運動の首領たるポース氏は此日の夜半を期し、北印度千九百哩に亘る地方の印度國民に一齊起つて英官憲を剿滅すべき命令を發したのである。惜しいかな、事將さに發せんとする間際に、英國側の間諜の知る處となり、其夜の十一時に英國官憲はラホール一帯の印度軍隊に武装解除を命ずると共に、英國の印度駐屯軍の動員令を下した。萬事休す、ポース氏等が數ヶ月に亘つて計畫した革命運動も全然失敗に歸したのである。

此の間にも、支度のよい印度兵は已に反旗を翻へして居た。ヘローズブルの印度軍隊五十名は約束の時刻即ち其夜の十二時に先立つて、九時頃には逸りに逸つて、反旗を高く翻へし、一齊喊聲を揚げて起つたのであるが、之は已に其事あるを牒知して之に備へた英軍の機關銃の的となつて掃射され、一人残らず惨死を遂げたのである。

かくして、其夜の明け放れる頃には、此の反亂軍の首謀者と目さるゝ者數百人が捕へられ、同時にラホールには戒嚴令が布かれた。捕へられた中には我が熱血兒ポース氏の姿は見られなかつたので、英國官憲は焦燥して極力捜査を續け、捕へたら直ちに死刑に處すると宣告し、同時に其の首に幾千ポンドの賞を懸けた。

ポース氏は本名、ラス・ビハリ・ポースと呼ぶので、此時廿九才の青年であつた。少年時代から幾多の艱難を経來つて、今や體力も智力も全盛の熱血青年である。事破れたからとて阿免々々英國人の手に捕へらるゝやうな間拔けな事はして居ない。其夜の九時には、ラホールの秘密本部を脱して海岸行きの汽車に身を投じて居た。同志は此の列車に乗る事をひどく危ぶんだのであるが、そこは直情徑行、一旦思ひ込んだ事は斷行する氣質のポース氏とて、一番危かるべき、一番安全な道を選んで此の海岸行き列車に乗り込んだのである。何故ならば、此際内地に留まる事は、國外に脱走するの機を逸する事で、つまりは囊中の鼠となり、最後には、必ず英國官憲の手に捕へらるゝ事となるのである。然うなると再擧の餘地もなく、必ず頭首處を異にする運命となる。故に彼れは、萬死に一生を得るの最も冒險と見らるゝ危道を選んで、海岸に出で、其處から他國へ亡命しやうと決心したのである。「唯だ一刻も早く海岸に出て、そこから船へ乗りたい」そ

れが、其際のボース氏の唯一の願望であつた。

虎口を脱れる

彼れは、變装して切符を買ひ求め、其の夜の最終列車へと身を投じたのである。風の音にも心を置く身の上。併し兎に角、此の列車へ間に合つたといふ事は、天の助けと喜んだのであるが、偶と車室内を見渡して彼れは、消魂した。

「失敗つた！」と五體顫動して呼吸が喘んだのである。

向側の座席に腰かけた一人の英國人——其の顔は、英國印度總督府の警視デリーである。寢ても覺めても恐しい、いやな顔。片時も忘れられぬ恐しい顔。其の顔が今、目の前に同じ車室内に居る。是は先年、英國の印度總督府森林官ハーリン卿が何者かに襲撃されて負傷した時、ボース氏が其の下手人と睨まれて逮捕された時、能く／＼見知つた顔で、此の瞬間、兩人の視線がひたと出會つたら、ボース氏の運命はそこに谷まるのであつた。

此の一瞬、ボース氏は、大地へ滑り込んだ思ひ、目がくらんだのであるが、モ一度向ふを見直した時、不思議にも、彼方のデリーは、顔を伏した儘身動きもしないのである。ボース氏は、

瞬きもせず、其の顔を見守つて、

「ハ、彼奴睡つて居るかな」と考へた。

兎に角、彼方は顔を伏して居て自分の姿を認めなかつた事は確かである。

「天佑！」とボース氏は心で叫んだ。遁られるは今である。電光石火の駆け引き。ボース氏はくると一廻轉、背を敵に向けて、いとも靜かに歩を運び、次ぎの車室へと入つた。これで、救はれたのである。次ぎ／＼と最後の車室へ遁れて頭から布をかぶり、狸寝入りをして運を天に任せ其の列車で海岸ベナレスへ達したのである。

ベナレスからカルカッタに向ふ。カルカッタに来て見ると、丁度都合の好い事に、其折、印度の詩聖タグル翁が日本へ行くといふ噂が賑つて居た。タグル翁は、日本郵船の讚岐丸で渡日する豫定と聞いたボース氏は、己れビー・イン・タグルと變名し、タグル翁の一族に屬する者であると詐稱して、日本行き切符を買ひ一人の部下に見送られて馬車で海岸へと駆け付けた。波止場へ着いたが、英國官憲の警戒も至つて、寛に見える、誰れも自分を怪む者もない。

愈よ船へ乗り込まうといふ場になつて、ボース氏は、ポケットに入れて居たピストルは部下に呉れてやつた。

「凡ては天の命だ。船中に入つてピストルは何の役に立つか。却て身體検査の際、怪まれる。是は、後に残るお前達にこそ役に立つ」

斯う言つて、ボース氏は、赤手空拳、一身を板一枚に任せた氣で海上に浮んだのである。船の事務長が、ボース氏を見て、

「あなたはタグール翁と關係がありますか」と問ふ。ボース氏は、貴公子然と出来る丈け立派な服装をして居たのである。

「親戚です。お伴をして日本に遊びに行くのです」

事務長は、タグール崇拜者と見えて、大いにボース氏を丁重に取扱つた。其中、警官や検査醫がやつて来た。事務長は、

「此の方はタグール翁の御親戚の方です」と好意の紹介をして丁重な物言ひをして呉れるものだから、彼等も怪しまない。

難なく船はカルカツタを出帆し、やがてベナンを経由して、新嘉坡に着いた。此處も難關と見たが、無事に通過して、遂に香港へ来た。此の關所さへ越せば、日本の樂土へ安着されるのである。

香港の災厄

香港は英國の領土も同じ事で、一切英國の官憲の支配下に置かる。此處から日本へ渡るには英國總領事の許可證が無くてはならぬ。處が、讃岐丸が香港に入つたのは丁度日曜日で、總領事は不在である。英人の警視が一人宿直をして、其下に印度人の書記が居た。

「日本へ渡る許可證を得たい」と申入れると、

「今日は日曜で、總領事が居ないからそれは出せない」と斷はる。

「こゝで愚圖々々して居ては大變、名代のやかましい總領事が居ないといふこそ幸、此際に是非とも許可證を手に入れたい」斯う考へてボース氏は、冷汗を流して辯じて見たが、彼方は應じて呉れない。ボース氏は氣が氣でない。

そこへ一人の印度商人が入つて来て、廣東へ行くからとて矢張り許可證を要求した。是が又埒が明かずに押問答して居ると、今度はマニラに行くといふ印度人が入つて来て又強談判だ。

三人の印度人は行く手は異ふが、用件は何れも旅行免狀である。期せずして三人は一所になつて強硬に談判した。印度人の書記が、根負けしたのと、同國人の好みといふやうな氣分で、遂う

許可證を作成して、無言の儘に英人警視の前へ差出した。警視もうるさくなつて居た處で、心にもなく溢々、夫れにサインして呉れた。

ボース氏は、自分の好運を思ふて、踏む足も軽く波止場へ引返して來ると、突然自分呼びかけた者がある、見ると印度人巡査である。

はつとして身構へたのであるが、巡査はこくして、ボース氏の肩に手をかけ、

「同志、故國の形勢はどうか？」

怪しい様子もなく、眞實印度の内情を知りたい念から讃岐丸の乗客と見て話しかけるらしい。併し、石に目あり滅多な事は言へない。

「同志、好意は謝する、併し、途上では憚る」

「いや尤もだ。では私は、任務を終へて晩に御馳走を持つて船中へ尋ねるから、ゆつくり話を聞かして呉れ」

其夜その巡査は印度料理を携へて船中へ訪ねて來た。ボース氏は、大いに國事を談じ、カルカッタを出て始めて同國人の厚い情に浴したのである。

其夜、讃岐丸は香港を發した。ボース氏は生れ代つた氣がした。モウ絶對安全である、六日目に神戸に着いて、ボース氏は日本の土を踏んだ。それは大正四年六月八日であつた。それから京都を見物して東京へ向つたのである。

歸化日本人として

ボース氏は自ら言ふ、

「私は運が強いのです、二十そこくから、幾度となく反英革命運動を起しては失敗し、爆弾で指を失つたり、嫌疑で捕へられたりしたのですが、其都度好運が伴つて居ました。此の日本へ渡る際の事も、ほんとうに運が強かつたと思ひます。私は此の天運に對して感謝すると共に、今や歸化日本人として、日本の爲に全分の努力をしやうと考へて居ます」(以上ボース氏談終り)

X X X X X X

三浦と大隈

寺内の内閣が出来る前に、大隈が二年ばかり内閣をやつたことがある。最初、柴四郎と、大竹貫一

とそれから、あの新聞をやつてゐる……黒岩周六といふのがやつて来て、
「大隈に今度内閣をやらせて見たい」といふ。

「それもよからう」と、私も賛成した。處が、柴などのいふことに「かうした問題では先づ山縣を承知させなくてはいかん。その山縣を承知するには、三浦梧樓に頼まなくてはいかん、その三浦を承知さすには頭山でなくてはいかん」と、かうぢや。

それから、私が三浦にその話をする、三浦は承知して山縣を説いた。それで大隈が内閣をやることになつたのぢやが、大隈は考への浅い男で、一旦自分の内閣が出来るとなると、モウほかのことは考へん。自分の都合の好いやうにばかりやる。犬養なども最初閣員の一人になるはずであつたのをモウ知らん顔で、入れんのぢや。三浦が怒つて、大隈内閣を叩きこはすといふ。次いで生れたのが寺内内閣ぢや。それから、間もなく年が替つて正月が来た。元日に大隈が三浦に會つて、「や、お目出たう」と、例の口でやつたものだ。三浦はぶつきら棒に、

「負けて何がお目出たいか」と怒鳴りつけたといふことぢや。

この寺内内閣になる前に、私は杉山（茂丸）を山縣の處へやつて、

「三浦内閣はどうか？」と山縣の意向を聞かせたのぢや。

すると、山縣は、

「三浦は幼少の折から、神童といはれたものぢやが、あの男はどうも見當が付かぬから困る」と答へたのぢや。恐ろしくて何を仕出來すか知れぬから、三浦は出せぬといふ山縣の肚ぢや。

山縣の見當の付く様な者なら出す要はないのぢや。

天下の山縣になり切れんのが惜しい

山縣は、しつかり者で、思慮周密、用心堅固な質のやうぢや。井上や伊藤とは、武人出身丈々に趣きが異り、勇氣も多少有つたやうぢや。人の面倒も見ると、人情に通じ、餘り酷い事はせんぢやつた。併し楷書の一角足らぬやうな處があつて惜しい。

つまり、己れを惜むといふ缺點があつたのぢや。長州の山縣にして、天下の山縣となり得なかつたのぢや。それが爲に私心ある如く見られたり、折角剛毅の質も、大いに損をして居た。

山縣は首でも取られると思ふたのぢやらう

山縣の晩年△△事件の際、杉山を代理にやつて山縣の肚を聞かせた。私は山縣と顔を合せた事はな

いのぢや。山縣は、私に首でも取られるかと思ふたのぢやらう。私のいふ事に承服してその意見を改め、責を負うて一切の官職を辭し、退隱したのぢや。

安達謙藏、白で碁を打て

安達(謙藏)は佐々(友房)の子分で、壯士頭をしてをつた。安達の前には熊谷直亮であつたが、彼が佐々から離れてから、安達になつたのぢや。朝鮮の閔妃事件以來、安達は名を知られたやうぢや。何時か、安達が私の處へ見えて、「政黨以外のあなた方も、十分に政治のことを監視して下さい、力を政治に用ひてもらひたい」といふから、私は、「近ごろの政黨は、皆んな黒を以て碁を打つてゐるやうぢやから、君等は白でやつてくれ」といつてやつた。

清浦はおとなしい

清浦(奎吾)とは、箱根の小室翠雲の別荘で會ふた。その席には柴四郎などもをつた。清浦と碁を打つた。最初清浦は、

「どうせ、駄目でせうが」といつて、先で來た。果して、駄目ぢやつた。今度は二目にしたが、皆な取つてやつた。清浦は、おとなしい人ぢや。いざとなると、逃げる方ぢや。

總理級の人々

加藤(高明)は、並んで腰をかけたことがある。その時彼方から叩頭をしてゐた。原(敬)は黙つて挨拶もせんぢやつた。若槻には昨年(昭和三年)江口定條の邸で會つた。彼方から名乗りをして挨拶を述べてをつた。その時濱口にも會ふた。

護憲三派運動と純正普選の時

護憲三派聯合の時は、三浦も熱海から出て来て口を利いたのぢやが、あの時は、床次が向ふに廻つて居つた。私も、それがよろしいといふ事で、大に賛成だし、相當援けてやつたのぢや。純正普選運動の時も、内田(良平氏)などが「是は到底駄目だ」と言ふ事であつたのぢやが、私は、

「成る成らぬは問題ぢやない。唯だ我々のは是れぢやといふ棒杵を立て、置けアよいのだ」といふと、
「それなら、やりませう」と内田がいふ。

五萬ばかり匿名で此の運動に金を出したものがあつた。名が出ては好くなかつたのぢやらう。
其時、和田彦次郎がやつて来た。……和田は品川（彌次郎）の門生ぢやつた男だ。

「あれは、先生のおやりになるので御座いますか」といふから、

「そうぢや、俺れ共がやるのぢや」といふと、

「それでは、身命を賭してもやります」といふて、議會では、随分やつたやうぢや。

私の握手の始め、熱海に三浦を見舞ふ

その普選の時ぢや。三浦が危篤ぢやといふて電話が来たので、私が行くと、

「やー、是は」と手を出した。私は人と手を握つた事もないのぢや、此時始めて握手をした。

三浦や、鳥尾は、同じ長州出身でも、大久保に使はれた伊藤、井上などと異つて、あれは木戸系
ぢやつた。私は、何時も三浦に向つて、

「己れが交はるのは、天下の三浦で、長州の三浦ではない。伊藤や山縣輩は、あれは長州の山縣ぢや」

というてやつた。

扱て、熱海へ来て三浦の病室へ入ると、死にかけてゐるはずの三浦が、目を大きく開いて、

「やー、能う来てくれた」といつて、かう手を差出す。

私はその手を取つたが、三浦は力ある聲で、

「己れもモウ快い」といふ。

直き癒るつもりでゐる。

私も「これは死なんもの」と思ふた。

次ぎの室へ来ると、三浦の子息が、氣を揉んで、

「親父が、餘り元氣を出し過ぎます」といふ。醫者も今が大變悪いのだといふ。

しかし、私は、あんな元氣なら大丈夫死にはしまいと思ふたから、その晩は古屋旅館へ泊つて、白
井哲夫と碁を打つた。翌る朝、九時ごろ、又三浦の處へ行つて見た。子息が出て来て、

「親父は大分元氣が出て持直したやうで御さいます」と語る。全く私の爲で元氣付いたやうな事をい
ふ。

そして、陛下から、お見舞として御下賜になつた御菓子を頭山さんに、代つて戴いて下さる様にと、

三浦がいうてゐるとの事ぢや。

病室へ入ると、三浦自身もその事をいうて、はつきりした聲で、私に代理として、御菓子を載いたいてくれといふのぢや。

私は、その元氣な様子を見て、

「モウ快くなるのぢや。氣安やすくして養生するがよい」というて別わかれた。これでは死なんと思おもうて東京へ歸かへつた。

其折そのをり、三浦は、

「私の病なんか醫者の教科書に載のつて居らん」と威張ひつて居つた。

果して、三浦は全快して夫れから一年も生きて居つた。

立雲號の由來

何時か、三浦が、立雲（頭山翁の號）とはどういふ意味かといふから、私は、

「俺は、ふりまらで、雲の上に立つてゐるやうな氣きであるのぢや」と答へてやつたら、

「やあそれは面白い」と三浦は大笑おほはらひであつた。

三浦は、一時佛學に凝こつて目白の雲照うんせうについて、頻しきりと研究をやつた。細かい字の御經おきやうなど讀んでをつた。そして、私も禪ぜんでもやつてるものと定めて、

「餘程おやりでせう」といふから「私は濱の家で禪學をやつてゐます。見にお出いでなさい」といふと、「ハ、ア、それア面白い」といつてゐた。

宗演と禪問答

禪學で思ひ出すが、私は早いころ、宗演と一度會あふた。私の方から遊びに行つた。村上といふ男に連つれられて行つた。宗演は私に、

「禪を誰方から學まなばれました」と云ふのぢや、私を坐ざ禪ぜんでもやつた者と思おもふたのぢやらう。

私は村上を指して、

「これから學まなびました」といつてやつたら、村上の奴やつめ妙な顔をしてをつた。その時宗演は、私の郷里の仙崖和尚の畫を私にくれた。しかし、彼れから禪ぜんを學まなぶといふやうな事ではなかつた。

東宮御外遊時、二荒伯の誓文

東宮殿下御外遊の時には、二荒が此家へ見えて「此上は手前共は死を以てお供致しますから」といふやうな事を言ふて來た。大正天皇御不例に渡らせ、太子遠く遊ばざるべき時と、我々は見たのである。我々の考ふるところでは、天子は、昭々として日月の如くあるべく、國民道德の根原として、重きを爲すべきもの、智識を世界に求むる爲には、侍臣之に任ずべき筈である。萬一の危険でも危険であるから、成るべくは、御自重御自愛あらん事を祈つたに他ならぬ。

杉浦は五重の塔

△△事件の際は、杉浦（重剛）が、その硬骨の本色を現はしたのぢや。杉浦は弱さうな男ぢやつたが、それで中々死ななかつた。人間の壽命は天なりで、達者な奴が長生きするかといふとさうもいかぬ。誰か杉浦を五重塔のやうな人間ぢや、といふたら、杉浦は、「五重塔はよい」といつて喜んだ。風にも堪へず、震災には一堪りもなかりさうで、それで決して倒れんのぢや。柔能く剛を制するの

ぢや、それが重剛といふ處が面白い。

杉浦は眞君子

杉浦とは三十年間の交りがあつた眞の知己ぢやつた。最初條約改正の時、東五軒町の會合で見知つたのぢや。谷、鳥尾、三浦などと共に大隈の改正案に反對して義を唱へたのぢや。今から見ると、擧國一致で反對を唱へたやうにも考へられるが、却々然うではない。極く少數の硬骨な手合ばかりが反對を唱へて呼號したのぢや、心細い形であつた。心に思ふても、公然反對ぢやと口外し得ないのが多かつたらう。

あの篤行な、杉浦が、率先反對を唱へる一人であつたとは、誠にそれ眞君子人の模範といふに足る。鍛錬された人間で、自ら處する事極めて謹嚴、人に對しては頗る寛大であつた。世間は得て他に對して酷であり勝ちなるものだ。杉浦には其缺點がなかつた。

俺れは田中と同じ年に死ぬと言はれた

翁、一日揮毫中、客が、古新聞の田中義一氏死亡時の寫眞を眺めて、

「この顔は、形が崩れてゐます、死相とでもいふのでせうか」
翁、一瞥して、

「占ひは當る者かな？ 私と田中が今年中に死ぬるといつたのぢや。田中は死んだが、私は死なんのぢや。まだ後二ヶ月はあるが」

(翁は自分の死期を占はれた事など平氣で語るのであつた。)

一遍で小便が出切るか？

最初、田中と會ふたのは十年前ぢや。二八會といふのへ、寺尾(享)と一所に行つた時、田中も居つた。酒杯をやり取りしたやうに覺えるが、別段親しいことにもならなかつた。

その後、紅葉館で、三浦(觀樹)の法事の時、また田中に出會つた。田中が總理になる前であつたらう。

然うぢや、「貴様は、小便が一遍で出切るか」と問ふたのはその折りぢや。(小便が一遍で出切らんやうでは、老衰最早激務に堪へぬから要職を見合せよといふ意)

それから、杉山(茂丸)の宅で座敷天ぶらを田中と一緒に食ふた事もある。

遷宮式に二日斷食

伊勢の遷宮式の参列も、皆んな夫れ／＼に肩書きがあるが、何にもないのは頭山ばかりぢやつた。

何にもない方が窮痛でなくてよい。人と較べられて、上だの下だのといはれなくてよい。無宿浪人頭山満かね。

遷宮式場では、石の上へ坐つて、雨に打たれるつもりであつたが、雨にも打たれず、石へも坐らなかつた。神主さん達は、石へ坐つたらうが。私は、二日間飯を食はんで、茶も少しばかりしか呑まなかつたので、参列中も便意を催さんで済んだ。それで、歩く段になると、何んともない。栗原(彦三郎)など、ふう／＼いつて、後を來たやうぢやつた。

何よりも放蕩を慎む事ぢや

人間の氣力といふやつは、何よりも、放蕩を慎む事ぢや。大がいその方の祟りで斃れるのぢや。長壽の秘訣は、女を慎む事ぢや。私は、三十五歳から五十歳まで、女の方の輸出は止めた。放蕩は十五年間で終結ぢやつた。

御慶事式場でネクタイの借り物

私は東宮殿下御慶事の時、民間から特旨の御参列を許されて、洋服を着て参つた。すると、三宅雪嶺が見て、

「や、頭山さんの洋服は、に、に、似合う」といふのぢや。

頭山の洋服姿は、餘程似合はんものと思ふて居たのぢやらう、吃りながら感心した處は面白かつた。處が、其時、そら、あの胸へ下げるものがあるね、……そのネクタイぢや、何時の間にか落ちて居たのぢや。すると式部官の東郷が、有り合せだといふて貸して呉れた。

三宅がそれを見て、

「そ、その方が、り、立派ぢや」と又賞めてくれた。馴れんものは間違ひばかり多くて困るのぢや。

震災の時

大震災の時には、私は御殿場に居つた。

それツといふと、母（養母）が私に、

「早く出なさい」と促すのぢやが、私は滅多に家は潰れぬと思ふて居るから坐つて見て居る。豆を煎るごとく、人間がびよん／＼はね上げられる。

母は獨りで、外へ出ようとするが、そんな豆煎りにかゝつて動けない。折角ぢやから、私は母を抱へるやうにして椽側から外へ出して竹林へ坐らせた。

之れで安心と思ふて私は又家へ入つて坐つた。其時、電燈が落ちて碎けたのか膝へ入つて、血が出る。母が、松葉を咬んで汁を附けるがよいと教へるから、其通りをやつて、汁を傷口へ押し込んだら血は止まつた。其れから、隣の寺尾（亨）が、中氣で臥つて居るのぢやから見舞つてやつた。モウ外へ抱へ出してあつたから、之も安心で又家へ入つた。

靈南坂の家が焼けた

あの震災で、私の靈南坂の家は焼け失せた。あの家は、最初、玄洋社の連中が、建て、呉れて、床柱なども立派なものを寄贈して呉れたり、よい家であつた。出来上つたら、みんなが集まつて、奉書へ書いたものを私へ差出して、此家を贈るといふので、そんな式をした。そこへ、山本権兵衛の處へ出入りの棟梁といふのが、来て居つたが、歸つてから山本に話した事に「あんな落成式といふのは生

れて始めて見ました。贈る方の人達は何か書いた奉書を高らかに読み上げて、丁寧な頭山さんへお渡しすると、頭山さんの方では、それを驚ぶかみにして、そばへ放り出したきり、御あいさつも何にもなしです。驚かされました」と言つたそうぢや。折角私の爲に皆んなが金を持寄つて建て、呉れたので、具合のよい家であつたに、焼けて惜しい事をした。私共が、御殿場に居つたので、碌に物も取出さず、二度と得られない物が皆な焼けた。

議員立候補の推薦状

議員の選挙には、其方からも此方からも推薦して呉れといふて来る。すると、同じ區から立つ反對の者を両方推薦したといふやうな事で、抗議の手紙をよこしたのがある。

「先生は反對の兩候補共に御推薦になつて居るは如何なる次第に候や」と若い者から眞剣で取詰められたのぢや。

又北陸の候補者の演説會に一寸顔を出して呉れとか、東京の候補者の演説會へ傍聴に来て呉れとか、推薦の文字を手紙へ書いたのを幟にして持つて歩くから書けのと、いろ／＼な注文ぢや。大抵は自分の名丈けを半切りへ書いて、前の方へ一尺も餘白を付けて送つてやる位の事ぢや。

先年古島一雄の立候補の時は、私も本當に推薦をしたのぢや。理想選挙で、三錢のうどん二ツ食ふのが我々の晝飯ぢやつた。古島の車夫丈けには、十五錢やつたさうぢや。

紙一枚ばかりの長い推薦の文句も書かせて刷物にして配つたのぢや。何處ぞに残つてあらう。飾り氣も何にもない、思ふ儘を言つて書かせたのぢや。……然うぢや、私が目を通して刷らせたので、頭山一代の名作文ぢやらう。

誕辰祝ひが大袈裟で聊か迷惑

一々昨年、七十三回の誕辰に、世田ヶ谷の國士館で、お祝をやつた事は、些と大げさになつて困つたのぢや。最初、國士館の柴田(徳次郎)が見えて、

「先生多年の御面倒を見て下された國士館も萬事整頓し、此頃は生徒さんも能く勉強をして居るから、今度、先生の御誕辰を機として、講堂で先生に祝賀の意を表し、生徒さん連の相撲でも御覽に入れたいが……」といふやうな事であつたから、其位の事ならよからうと思ふたのぢや。

それが、何時の間にか、話が大きくなり、葦津(耕太郎)などが出て、方々へ通知を出してあんな事になつたのぢや。私は、還曆も、誕生も祝ひなどした事は一度もなく、病氣でもして、看護婦でも

頼むと、全快の後其の婦共に心祝ひをしてやる。又他人の祝ひには何かしてやるが、自分の祝ひなどはしなかつたのぢや。

あの時は、支那からもまとまつた祝金が来て、祝詞も添へられた。好意は有難い事ぢやが氣の毒でもあつた。來年は七十七の祝もせんつもりぢやが、唯だ八十の時には、金婚式をやらうと思ふて居る。夫婦五十年はお目出度いのぢや。

此の床の間に在る、高砂の尉と媪の人形は、震災の時靈南坂の居宅の灰の中から拾ひ出したのぢや。破損もせず残つた。金など附いて居つたが、猛火に焼かれて、却て古色蒼然となつた處は、雅致を生じて、俺れ共夫婦の姿に見立てられやう。

水戸家の昇爵時宮相と會見

水戸の閑順侯が公爵に叙せられた。あれには田中光顯の骨折りもある。

最初、水戸藩に對しては、明治天皇陛下が、其の勤王の首唱たる點について、特に思召があつて其邸に行幸せられ、一首の御詠を賜はつた事實がある。時の宮内大臣は田中光顯で、當時已に公爵に叙せられるべき御内命があつた。

田中が宮相を辭して後、次ぎ／＼の宮内大臣に、其事を口傳へに意を含めて來たのが、今の一木が宮内大臣になつた時、前の宮内大臣から其事を受けつがなかつたといふので、其の御沙汰が出る模様もない。そこで、田中が一木に其事をいふが、一向埒が明かんといふ事で、私の處へ、一昨年(昭和四年)見えて話があつた。

然ういふ次第で、田中の胸中も察せられる。私も其氣になつて、一木に會ふて見た。話は簡單で十分間も坐つたらうか。議論も何もあつた事でない解つた話で、一木も確に承諾の様子であつた。

そこで、昨年の水戸地方に於ける大演習を機として其事が實現せられたやうな次第ぢや。元來、水戸光圀は、勤王論の首唱者で、水戸藩は歴代然うであつた。齊昭、東湖皆な其意を體して居つた。將軍若し皇室に對して不都合の所爲ある際には、大義親を滅するの覺悟を要する、將軍を刺して已れも自刃して罪を謝せよといふやうな光圀の遺訓もあつた様ぢや。水戸の學風が幕末の天下を風靡し、藤田東湖が尊攘の旗頭として一世を籠蓋したのもこんな處から來て居らう。慶喜も其意を體して、あんなに恭順を表したものと見える。

出雲大社へお詣り

今度、内田（良平）と出雲の大社へお参りをして来た。好い具合に、私のゐる時は快晴で、明月を見たり、暖かであつた。行く前は雨ばかり降つてをつたさうぢや。又歸つてからは大變寒くなつた。出雲では、字を二百枚ばかり書かされて、終には筆が手から滑り落ちたことぢや。出雲の大社はよい氣持のする處ぢや、落着いた氣分でよかつた。然うぢや、その土地には、それぞれ名物があるものぢや。何やかや珍らしいうまいものもあつた。鰻など殊によかつた。

大本教と立雲翁

出雲の吉倉といふ處に、私塾を開いてゐる者があつて、その塾に、名を付けて呉れといふのぢや。私は「興民義會」と書いて渡した。そして、立助とその男と私と三人で寫眞を撮つたのぢや。今ごろ、私塾も變なやうぢやが、しかし、こんな學問の切り賣りの世の中には、本當の師弟關係を結ぶ私塾も役立つぢやらう。

出雲大社参りの歸途、私は綾部へ行つた。大本教の王仁三郎にも會ふた。

二代教祖が、私の目が教祖をつくりだといふた。自分の親に會ふた氣がするから、按摩をさせて呉れというて、可なり長く私の身體を按んだ。

座客「先生が、女に似たといはれたのは、始めてせう。私も大本教教祖の婆さんは、遠見に顔を見覚えてをりますが、さういへば、目は先生とよく似てをられたやうに思ひます」

翁「私も自分の顔や目はよくわからんが、あの教祖といふのが寫眞で見ると、副島（種臣）に似てゐる。私が三十五の年ぢやつた、廣瀬千磨と山口といふ人相觀に會ふた時、そいつが「先生の目は副島さんによく似てをります」といつたことがある。

王仁三郎は、至極賢い、大きな處がある。尋常の者ではない。

「道の人か、仕事の人か？」といふのか……それは道を唱へて仕事をする者ぢや。相當の何かとある……山師のやうにいふ者も多いといふか？……それは、世間はいろ／＼の噂をするものぢや。ま、飯野よりも大分大きいといふのもある。自分の信仰を世界におし擴めて行くつもりだらう。

綾部では、一晩で入れ歯を造つた。最近ドイツの發明というて、ゴム床よりも薄く、軽く、それで三倍も硬いといふので、醫者が一夜で造つてくれた。四、五年前に、洋服を作つた時も、一夜でフロツクが出来た。かう物事が早速間に合ふと結構ぢや。その代り、私も今度、出雲で前にいふた通り、

三時間ばかりの間に二百枚字を書かされたのぢや。一日五六枚も書くのは楽しみやうでもあるが、此ごろのやうに毎日字書きを攻められては、へどが出さうになる。

私は無精者で、昔から手紙を書かない、他からの手紙へ返事も餘り書かないのぢや。

板垣伯の銅像

十二月八日（昭和四年）に日光へ行つた。板垣の銅像が建てられたので、その除幕式をやるから俺にも来てくれといふのぢや。銅像は板垣の若いころの姿ぢや。戊辰の際、日光の廟を官軍が焼いて了ふといふのを、板垣が焼かせんやうにしたといふ事で、その同郷人の土佐の連中で、日光に住んでゐる者が主として盡力して出来たのぢや。中々盛會であつた。私に一晩泊つて呉れと皆ないふたが、泊らずに歸つた。小雨も降つた。銅像は神橋の處へ建てられたので、よく目に附く。日光があつた儘に残つたのも、板垣のおかげぢやらう。

歸りに、日光驛で發車を待つ間に、驛長が紙と筆を出して、一枚字を書いて呉れといふ。それで一枚書いた。他の連中は、そんな手順をしてをらるので、残念がつてをつた。

喜樂の女將井上を凹ます

南洲庵の嬢も死んだな。氣の好い女であつた。まだ年でもなかつたに……中々俠氣もあつたやうぢや。

あんな料理屋、待合などの嬢共には、中々えらい者があつた。喜樂の女將、富貴樓のおくら、濱の家のはまは三人女に立てられたものぢや。

喜樂の女將といふのは氣の勝つた女で井上（馨）を凹ました話がある。

私が先年、大森の宿屋に二週間ばかりをつた折り、三助が私の脊を流しながら、先生様が以前お唄ひになつたあの唄を一ツ書いて下さいといふのぢや。それは二十年も前に私が聞き覚えて口吟んだのを三助の奴よく記憶してゐて、私に紙へ書いて呉れといふのぢや。私もやつと思ひ出して、書いてやつた。

その唄といふのは、喜樂の女將が謡つたといふのぢや。或時、どこかのお茶屋で、井上馨が、大勢の藝妓に取巻かれて大盡遊びをしてをつたといふのぢや。そこに喜樂の女將もをつた、……そのころ喜樂はまだ貧乏な時代ぢやつたといふことぢや。そこで女將は、

「御前、手前の息子も、今度學校を出ましたから、何處ぞへ勤めたいと申しますので、どうぞ宜しく
お願ひ致します」といふと、井上の奴、うんといつて置けばよいものを、

「いや、人の世話など出来ぬ」といふ。

喜樂の女將も、まだ若い時分ぢや、肚に据ゑかねたのぢやらう。

「あなたは貧乏人の世話は出来ない方でしたね。でも、あまり、金持の世話をするのも見つともよく
ありませんよ」といつたものだから座が白けてしまった。

すると、喜樂の女將は、行きなり、着物をぬぎ棄て、襦袢一枚で、

「妾、今夜は二つ踊つてやりませう」といつて、謡つたのが、その今の唄ぢや。

「横濱に船が百ばい入りや、橋百本ぼん／＼。とまる鳥は百羽バツバツパ」といふのぢや。それ
で大笑ひになつた。

座客「井上大盡顔色なしですな」

翁「井上はそんな男ぢやつた」

女は面倒見てやる事ぢや

女といへば、金持などには、女の財産を横領して身代を造つたなどいふ話がよくあるが、私は、そ
んな弱い女など喰物にする事はしなかつた。乞食女でも金はやるといふ方針ぢやつた。何處へ行つて
も、手を付けた妓には自分の名どころを紙片へ書いてやつて、子が出来たら、一ト月二ヶ月位の違ひ
は構はんからいうて来いとしたものぢや。人情といふものを解せんやうではいかぬ。

犬養總理は貫録たつぷり

犬養は、一人々々では打刀合はするものがないやうぢや。口も達者ぢや。却々遣り手ぢや。原や加
藤・田中などよりも前に總理をやるべき人間で、百何十人か引卒して居つた。それが、鋭い爲に除名
などされて、三十何人かで頑張つたり、それで、總理になれんぢやつた。貫録はたつぷりぢや大相撲
を取るのぢや。

議會のだらしなさ

議會のだらしないのは昔からで、

「あれを西郷に見せたら何んと言ひませう」と私が何時か副島にいふた事がある。

「何んとも言ひますまい。唯だ『叱ッ！』といふでせう」と副島は答へた。

杉浦は八ヶ月かで議員をやめた、中江も一時議員になつたが、間もなくやめたのぢや。杉浦は、

「あれは私共のかたる處ではございませぬ」と言ふて居た。中江は、

「議員といふ奴は、まるで、犬と猿の様ぢや、無血虫ぢや、味噌も糞も一處ぢや、居られん」と語つた。

神に仕へる者の仕合せ

今度、越後へ遊びに行つたのは、大竹貫一が来て、

「是非一度私の郷里の方へ遊びに来てもらひたい」といふから出かけたのぢや。

五十年も前に、東北漫遊の時、越後へ足を入れたきりぢや。變つた處ぢやない。其後の記憶もない位ぢや。其頃會ふた人間は一人もゐなかつた。山際七司の子が代議士になつて居た。モウ子の時代ぢや。

今度は「字は一切書かぬ事」といふ約束で行つたのぢや。

處が、歸りに信州に立寄つたら、諏訪の神主さんが何かに私の名をしるして呉れといふので、知人

名簿といふのかな、それへ一筆書いた。

其序に紙を出されて、敬神の二字を書いた。是が今度の旅行の憲法破りの一枚ぢや。

客「尊一枚です」

翁「神主さんは仕合せをしたのぢや。神に仕へる者は、其位の事があらう」

米國新聞記者の來訪記

何時か、……三年ばかり前に、米國人が二人、此家へ訪ねて來た事がある。話聞く丈けでははつきりせんから、親しく私に會うて見たいといふのであつた。そしてから、其時の事を自分の新聞に書いた。

「釋尊のやうな」と、私の事を言うてぢやそうな。

俺れには、英語は一ツも解らん。一度、加藤高明が、英語をいふのを聞いて、「エース」といふのを覺えた。汽車へ乗つて居ると、向ふ側で、加藤が、西洋の婦人から話かけられて、「エース〜」と何遍もいふのを聞いて覺えたのぢや。

「其時の米國人の新聞記事か？」

それは、誰れか譯したのもあつた……夫れぢや、讀んで見るがよい。……何に？「日本の強い人」といふ題か、其儘に譯したのぢやらう。

「最も嚴格な、規律及び組織的構成の國なる日本に、從來嘗て公職に就いた事がないが、併し最大の勢力を有つて居る一人の男がある。此の、殆んど傳説的の尊敬を拂はれて居る男は、頭山滿氏である。氏は所謂「浪人」で、直譯すれば、流浪する騎士、意譯すれば「愛國者」といふ意味である。

頭山氏は、弱者の保護者、哲學者であり、又愛國的自由的日本人の半世紀に渉る指導者であり、師匠であるところの幾千の使徒の棟梁である。東京の、彼れの住ひは、小さな部屋で、七十を越へた頭山氏が、「ユートナイテッド・プレス」の代表者を、床の上に敷いた小さい布團の上に足を組んで、坐りながら引見した。

此の老人は靜かに、人口増加問題に付いて話した。

「産兒制限の許さるべき事を余は信じない。天から與ふる福祉を妨げる爲に、人爲的手段を用ゐるといふ事は、天に對する罪惡である。吾人は唯だ吾國民を増加する事を得せしめる天に對し

て感謝すべきである。地上には人類の爲に餘地が尙ほ多くある。食糧問題は、決して克ちがたき障害を爲すものでない。農事の改良に依つて、吾人は食糧の生産を倍加し、若くは三倍とする事が出来る。併し、夫は或者が海外に移住してならぬ、と、いふ理由にならないのは勿論である。而して余は多くの國、例へば北米合衆國の如きが、日本人移民を排斥するといふ理由を、了解する事が出来ない。此の問題に對しては、凡ての國民が協力しなければならぬ。併し、此問題は、日米間の戦争を正當とする理由とはならないであらう。

若し、米國が吾人を排斥するならば、吾人は、吾人を歓迎する外の國へ行かんのみである。吾人は又、西歐文化を排斥しやうとは思はない。吾人の使命は、西歐の機械的、技術的經驗を應用して、吾人の舊文化から新たな精神上の文明を創造し、而して人類の幸福に寄與する事である。四海同胞の精神は、全世界に擴充されなければならぬ。此の方向に進みつゝある日本の將來は、十分見込みがある。吾人は徐々ではあるが、併し、確實に物質上及精神上の文明の向上を見つゝある。」

支那に關しても、孫逸仙の舊友であり、孫逸仙を數ば匿まつた頭山氏は、樂觀的である。氏は次の如く語つた。

「孫の教へが、今日では、支那の最も僻遠の地方に於ても了解されるやうになつた」と。
静かな、併し、確固たる聲で、其の意見を述べる老人は、一方の極端派の棟梁と言はんよりは、寧ろ先生或は哲學者といふ方が、適當の様に見える。只側らに在る二口の刀が、彼れに關して傳へられて居る、殺伐な物語を想起せしむる。彼れの思想を宣傳する爲に、彼が尙ほ若かつた時、友人と共同して新聞を始めやうと思つて、或る富豪に借財を申込んだ。其の富豪は擔保を要求した。「それは差入れませう」と頭山氏は言ふて、翌日小さい袋を持つて來た。其袋の中には、三本の指が入つて居た。夫は頭山氏及び其友人の指であつた。

「是が擔保だ」と彼れはいふた。そして金を受取つた。

外國との不平等條約の廢止は、四十年の長きに亘つて、日本の國權の爲に奮闘した頭山氏の功に負ふところが多い。支那に於ける國民運動に就ても、亦氏が重要な役目を受持つて居つた。支那の重要な人々に、多くの友人があつた。かくて彼れは、現代の東方の齋らした、凡ての最上の事の標的となつた。

X X X X X X
その指三本の事か、それは間違ひぢや、ひむきの引倒しの類ぢや、そんな事はせん。誰れか玄洋

社の若い者に、そんな事をする奴が居つた。それと取違へたのぢやらう。

早朝の明治神宮參拜

客「先生の明治神宮御參拜は、朝が早いので、參道邊の店では、戸を上げる頃、先生は御參拜が済んでお歸りになると申して驚いて居ます」

翁「何時か御參拜の歸途、雨に降られた。すると、一人の學生が傘を出して、私に差して行け」といふ。

「それでは君が濡れるではないか！」といふと、

「私など若い身で、雨など問題ぢやありません。先生の御老體は御大切にせんければいけません。我は、何處へだつて氣軽く飛び込めます」と言つて、是非といふから借りて歸つた事がある。

感心な學生で、先日も眞面目に清書した手紙をよこした。何か一枚書いてやつた。今時珍らしい誠實な男ぢや。

雲右衛門に素語り三席

雲右衛門が、私の處へ来た時、「此處で一席、語れ」といふと、

「三味線がなくて語れません」といふ。

「貴様の口で語るに、三味線が有つたつて無かつて同じ事ぢやないか、一席やれ」と責めた。遂う、やつた。

「立派にやれるぢやないか、モ一席やれ」で、又やる。「モ一席」で、遂う三席を三味線なしで語つた。「こんな苦しい目に遭ふた事はありません」と言うて歸つて行つた。

すると、私の靈南坂の家が出来て間もなく、

「今日は私が閑ですから、三味線を持つて伺ひませう」と電話が来た。

丁度私が外出しなければならぬので、

「此方は構はんが、今日は約束で出る、私が不在でよければ、来て語れ」と言うてやつたら來なかつた。

雲右衛門は茶屋遊びでは、御前様と言はれて、威張つたものぢや。我々からは金を貰はなかつた。

「先生方からは、別の方の御心配もして頂きますから、金などは御心配下さらんでも」といふ。肚の太いところがあつた。

何かの寄附に出て呉れといふと、素人方がおやりになつても無駄ですから、私の方で致しますと言うて、五百六百の金を持つて來た。

宮崎滔天の浪花節

宮崎滔天は、「三十三年の夢」を書いて、雲右衛門へ弟子入りした。雲の事を、師匠がくと言ふてであつた。最初、浪花ぶし語りにならうと思ふと言うて、神鞭の處へ挨拶に行つたら、神鞭は泣いて止めたといふ。犬養の處へ行つたら、考へて置くというて、後で長い手紙を書いて止めた。

そこで宮崎は私の處へ來た。私は「それは好い思ひ付きぢや、貴様には出來よう、やるが宜しい。賤業でも、自ら働いて生きて行く事が何より宜しいのぢや」というてやつたので、やつ遂に決心して雲右衛門の處へ出かけたのぢや。私が若い頃、郷里で、薪を賣つたり、箒を賣つたりした事を、宮崎が知つて居るので、大きに意を強うした事ぢやらう。

翁と遠山満との寫眞

此の寫眞は、遠山満といふやつぢやと翁は其寫眞を指して、淺草で、近藤勇を演つて居る處を觀に來て呉れといふので行つた。其時樂屋で撮影したのぢや。

アメリカで、とうやまみつるを呼物に方々興行して當てたのぢやそうぢやが、近頃歸つて來て、稍や危険を感じたらしい。そこで、注射の大橋へ泣き付いて、私の方へ取なしを頼んだものぢやらう。大橋は知つて居る仲ぢやから、私に、一度、彼れの芝居を觀てやつて下さいと再々言ふ。それで、淺草へ出かけたのぢや。

客「怪しからん、先生の名をかたる奴ぢやから仕末しやうと話した事でしたが、先生が『ま、許して置け』と言はれるもので、其儘にして置いたのです」

別客「あどけない子供の様な此の顔で、近藤勇が勤まりましたか？」

翁「相應演つて居つた。悪くはなかつたやうぢや。それに俺れの後へ立つて喜んだ顔だから、罪がないのぢや。何業をやつても構はん、御國の爲になるもの、世道人心に益するやうなものを演れと言ふてやつた」

木戸が差した兼定

杉山（茂丸）が、折り／＼私の處へよい刀を持つて來る。私がそれを金に困つて賣つたり質に入れたりして了ふ。杉山が來て愛想を盡かして、

「モウ貴方の處へは刀は持て來ません。無益なことぢや」といつて憤つて歸るが、程經ると、そんなことを忘れて、又刀を持つて來るのぢや。

「この三尺一寸五分の兼定も、杉山が持つて來たのぢや」と翁は床の間の刀架けの黒鞘を指して「これは木戸が差して歩いたものぢや、木戸は大男であつたらう」といつて翁は、それを反動も付けず、机の前へ坐つたまゝすうと抜いて見た。

座客「あなたは、よほど腕が長いやうです」

翁「然うぢや、劉玄德の腕も長かつたといふことぢや。」

私はあまり執着しない

私は、何にもあまり執着がない、無頓着ぢや。二度目の支那行きの時、昭和四年の春場所の相撲を

「二三日しか見ずに發つた。「心残りであらう」などういうてくれたのぢやが、私は、相撲も見なければ見ないで、何んとも思はんのぢや。碁も十時過ぎては打たぬ。」

相撲取りは常陸と太刀

客「先生多年相撲を御覽になつて、一番よいのは誰でした？」

翁「一番形の好いのは常陸山ぢやつた、一目置かせて打つ碁のごとあつた。他の者は、自分が一目置いて打つやうな相撲を取つた。」

強い事を言ふたら、太刀山は一番ぢやつたらう」

死んで生れ變れ

或る中將をした男が、切腹をするといふ處へ、私が出會はした事がある。不始末をして面目がないから、どうしても腹を切るといふのぢや。私はそれで、

「立派に腹を切れ、切つた氣持で生れ變れ、無い命と思つて働け。御國のために身命を捧げよ。それが、一等よろしい事ぢや」といふた。

すると、彼れは黙つて考へをつたが、

「私は、貴方には、大變叱られることゝ思つてをりましたら、難有い御教訓を受けて、今日から生れ變ります。一旦腹を切つて死んで、今生れ變りました」というて涙を流して喜んでをつた。

何か、役に立つ場合に、立派に死なせてやらうと思つてゐると、彼れはその後病氣で死んでしまつた。

革内將軍の遺物

翁、床の間に立てかけた、黒竹の杖を示して、

「これは、高島鞆之助の記念に贈られたのぢや。高島が愛用した杖ぢや、面白い竹ぢや。仙人が持つ物のやうぢや。髑髏の根附けやうの物が結び付けられてゐる處が面白い。高島の風骨が偲ばれるのぢや」

飛行機は愉快々々

久しぶりの天氣で、飛行機が飛んでゐる。人間が、空を飛ぶことばかりは出来まいと思ふたに、モ

二一八
ウこの通りぢや。何んでも考へられることは、出来ぬと言ふことは無いやうぢや。今に、福岡へも日
歸りが出来るのぢや。

昨年、所澤へ行つた。飛行場を觀に行つたのぢや。將校連大勢出て来て、字を書かされたりした。
飛行機が飛んでゐるから、私を乗せんかといふと、矢張り危険ですからというて乗せて呉れん
ぢや。

すると、そこに朝日新聞の飛行機がゐる。私はそれへ乗つて見た。好い氣持ちぢやつた。今度は將校
連が残念がつて、どうせ乗るのであつたら、自分の方へ乗つて貰へばよかつたといふ。私は、
「危険といへば、座敷にゐても危険はある」というて、それから又將校連の方へよばれて晝飯を食う
て歸つた。

美人天上より落つ

客「先生は過般、御郷里の福岡へお出の折り、長崎へも日歸りでお出でられた様子で、私の知人で、
佐賀に居る者が、其途中、列車内でお目にかゝつた事を通知して参りました。處が其通信の一節に、
先生が『美人天上より落つた』お話を承つたと書いてあります」

翁「そんな事を言つて来て居るかな。それは、確かに珍談なのぢや。私が未だ若い時ぢや、それ
を、丸々裸の若い女！ 頗るの美人が、私の首へ捲き付いたのぢや」

「どんな事でせうか、何處であつたのですか」
「日名兒の温泉ぢや。その風呂場で、私が好い氣持に浴槽の中に浸つて居ると、いきなり、頭から其
の美人が落ちて來たのぢや。人が居るとも知らず、段々を下りる際に滑つて轉んだのぢやらう。ひど
い勢でざぶんと入つて來て夢中で私の首へ捲き付いたのぢや。私も何が何んだか、敢て驚きはせん
が、頗る變な氣持ちぢや、女は大あはてに這ひ上つて逃げて行つた」

「惜しい事で」

「別段惜しい事とも思はん。私は其頃は聲が善かつたもので、其の宿屋の二階で毎日詩を吟じて居つ
たのぢや。すると、隣室に居るのが、今の天上から落ちた美人の連中で、母と番頭と三人、長崎の豪
家の者ぢやと聞いた。一夕、其の番頭が恐るゝ手を突いて、私の室へ來ていふ事に、手前共の方で、
一杯お酒を差上げたいので御座いますが、先生には、お出でられて、あの詩吟を一つうたつて戴く譯
には参りませんでせうかと、頗る丁寧な物言ひぢや……今なら出かけるのぢやが、其頃は私は大の堅
人ぢやて、「それはいかん」と斷つたのぢや。

客「まことに以て残り惜しいやうな」

翁「いや惜しいとも何んとも思はん、私の放蕩は、其後二十五歳の時が始めてぢや……」

これは役に立たん方ぢや

「勸進帳が出来たね」と翁は、或る人の持つて来た趣意書様の人名簿を披いて、今泉定介と署名されてあるのを見て、

「是は良い方ぢや、物識りで、辯舌もよく出来る、結構ぢや」と、更にその隣の署名を指して、

「これは役に立たん方ぢや」といふ。それは「頭山満」と、前日自身署名したのであつた。次の頁を

披くと「頭山立助」とある。「これも役に立たん方ぢや」と我が子の事をズバリ切つて棄てる調子に、座客一同啞然失笑。

七日の斷食——一食二十杯

私は若い折り、胃潰瘍になつた事がある。胃は丈夫な方で、前に仙人修業の時のやうに七日も食はずにゐても何んともなかつた。それで直ぐ大工の弟子をつかまへて相撲を取つた。それから、今度は

二十杯も食ふたのぢや。胃潰瘍ぢやといはれた時も「俺は死なんよ」といつてやつた。死ぬるやうな気がせんのぢやつた。

胃潰瘍を二度やつた

私は、二十五才の時と、三十才の時と、四十九才と、三度、かなり澤山の血を吐いた。肺癆咯血でない、胃潰瘍の血ぢや。「生きたのが不思議ぢや」と、醫者はいふた。

四十九才の時は、便の方へ血が出て、口からは出なかつた。

最初福岡で吐血の時は、熊谷といふ福岡一の醫者が、私の事を、或る葬式の場で、他の醫者に語つて、

「今度は頭山の番ぢやらう、長い事はない」と言つたとて、其醫者が来て私に話した。

「醫者などに俺れの身體が解るか」と言ふてやつた。

其中癒つて東京へ行かうとすると、停車場で熊谷と會ふた。俺れが、肥つて血色も好くなつて居るので、彼奴驚いて居つた。

二度目の時は、烈しいもので、食、咽喉を下らず、滋養灌腸などした。何を食うても受け付けん、

吐いて了ふ。

俺は非常手段をやつた。坐り直して鹽水を飲んで、金盥を前に置いて吐いた。腐つた血のやうなものが出る。幾度も繰返したら口中の感覚がなくなつた。

それから、梅干湯を呑んだらとまつた。之は脈があると思つて、今度は葛湯を呑んだ。それもとまる。次に大根を煮て食うた。それから癒つたのぢや。

神田に居る板垣といふ名醫に、後で、其時のさまを話したら、

「それは虎烈拉の食鹽注射を、直かに、咽喉からやらうといふんぢやから、利く筈です。併し人間に出来る事ぢやございません」と言うた。

顔が賣れると世間へ通る

うん、あの澁谷の電車終點の處へ出る老人か。あれは八十餘になるとか聞いたが、元氣者ぢやつた。子供達を世話して電車へ乗せてをつた。私の處へも見えて、掛け物が一枚欲しいから、字を一枚書いて呉れといふ。書いてやると、箱書きをして呉れといふから、それは自分で書くものでないからというて、杉山茂丸に書かせてやつた。老人も、あんなに顔が賣れると世間へ通るものぢや。

親に似ぬ子、似た子

立助(翁の第一子)は、あれは今様向きの人間ではない。親父に似んで、考へるやうに出来たのぢや。子供の時から、争ふといふ事はなかつた。玩具でも、他の子が取りに来ると、それをやつて、自分別々の玩具で遊んで居つた。

親父に似て喧嘩の好きなのが二人出来た。

(之は三男秀三氏、四男乙次郎氏の兩人をいふのであらう)

俺は欺かれん

世間では、俺れを氣狂ひのごと思ふと見えて、様々なのが舞ひ込む。牢から出たばかり、といふのや、食ふ事が出来ないといふやうなもの、氣がふれたやうな女だの、當節のいろ／＼な、術を行ふ連中……然うぢや、自強術、護身術、長命術、それから金儲け術、なんでも来る。

「何に? 詐術にかゝるか?」

否や、詐術にかゝつた事は滅多にない。昔の事を思へば、薪賣りや箒賣りをしたり、梅干一方で仙

二二四
人修業をやつたりした身ぢや。自分丈の慾をかく要はないので、人に致されるの、誘はれて欺かれるのといふやうな事もない筈ぢや。

紙幣は袂へ無造作に

私は、錢入れなど持たん男ぢや。紙幣など袂へ入れて置く。能く無くする。何んぼ遣つたか解らん。以前、宿屋住居の頃、其家の女中が客の物を盗つたのが露はれて、私の袂から紙幣を盗つた事迄警察で白状した。然もなければ、私は盗られた事も知らずに居つたのぢや。

石塔の頬かぶり

座客「安川（敬一郎男爵）さんだつて千圓と纏つた金を借りることが出来なかつたし、平岡さんなど金の貸す手は無かつたといひますが、先生は別ですな」

翁「其後東京へ出てから、高利貸の奴が私に、向ふからたゞで三千圓ばかり貸してくれた。金が費る話をしをたら、小林浪五郎といふ高利貸が、なんと思ふたか、

「私が三千圓御用立致ませう。利子は普通のことです宜しう御座います」というて直ぐ持つて來た。

私より少し年が多かつた。モウ死んだはずぢや。

私は、石塔が、頼被りして飯食うてゐると思ふと。どんなことがあらうと何んとも思はぬ。

何んの取柄もなく、飢ゑ死でもして居るべき處をかうして生きてゐるのが、不思議な位ぢや。悪運が強いとでもいふのぢやらう。金にも女にも、大して不自由もしなかつた。三千兩の金がないと困るといふ様な時には、餘り困らない中に、ひよいとその金が入る。千圓ばかり、一寸費るがと思ふと、モウ何處からかその金が廻つて來るといつた風であつた。

無精して居ると銅像が建つ

俺は昔からの無精者で、何一つ仕事をして居らん。そこへ行くと、金玉均といふやつは、才氣煥發で、俺れと直反對にできばきと事を運ぶ質ぢやつた。俺れのする事が餘程遅鈍に見えてもどかしかつたらしく、或時、

「君が少し動いて呉れると、仕事が捗取るがな」と嘆聲を發する。

「俺れはのろいのだらう、貴様から見たら。俺れから見ると、貴様の小器用がおかしいのぢや」と言ふたら、

「成程、そんな事ですか」と二人で笑つた。
餘り無精して居る中に、モウ銅像が建つちや、

ふりまらで大弓

四十五年も前ぢや、東京へ出て間もない頃、或る大弓場へ入つた事がある。
大勢居つた處へ、私はづか／＼入つて行つて、

「一番強い弓を出せ」といふたら、石門と名を入れたのを出した。石門をも射貫く、といふ意味なぢやらう。

私は矢を番へて、他の者が袴など着けて、勿體らしい事をして居る中へ、ふりまらで曳いたのぢやから、皆んな驚いて、手を止めて私の方を見て居る。

最初の矢が當るも當る、的の黒星の真中へ當つた。後は幾ら曳いても當らなかつた。それから、其の石門を我物にして、一本二圓ばかりの矢を買ふて、大分稽古をやつた。あれで通したら、相當に出て来る者になつたらうが、一夜、路次の溝の處で轉んで、右の親指を挫いた。それを誰れかにうんと引き伸ばさせたら、黒く腫れ上つて、四十日も掛つた。それで弓も名人になれずに終つた。

私の化物退治

或る媼さんが、化物が出るといふて、一度私に會ひたいといふのぢや、國士館の山田が知つた人間で「頭山先生でなくとも、私が附いて居れア、化物など來やしません」と山田がいふても聽かんぢやといふ。

何んでも妾の怨念が取付いて、夜になると飛び掛つて來るといふのぢや。杉浦や川面凡兒なども居るのぢやが、どうでも私でなければならぬといふのぢやさうな。其以前、私の處へ見えた事もあつて、「私は、今日自分の親に會ふた氣がしました」といふたさうぢや。私の方が十歳も年下なのぢや。然ういふ事からして、化物退治も是非私にといふのぢや。それから私は見舞つてやつて、

「化物などモウ出ません安心なさい」といふて歸つた。それきり化物が出なかつたといふのぢや。

俺れの書は頭山流ぢや

俺は手紙といふものは滅多に書かんぢやつた。字も書かん氣で居つたら、
「一筆でもよいから墨を付けて呉れ」と言はれるもので、最初は、ほんのしるしを附けたのぢや。夫

れが、だんく多くなつて、此頃は毎日三四十枚は書かされる。遂う皆んなが俺れを字書きにしてみました。

何時か、中村不折が、

「頭山先生は何流でございます、餘程お習ひになつたのでせう」といふのぢや。

「いや、頭山流ぢや、習ふといふ事はなかつた」と答へてやつた。

世間には、頭山流が多い様ぢや。

昔、荒尾が「貴方と山路（獨眼龍）の書は天下の二大悪筆です」と言ふたものぢや。

然う言へば、俺れは幼少の折り、習字が拙で、いけなかつた。それでも、習字の競争となると、何時も一等になるのぢや。それには、何か氣に入つた字を、前日にうんと手習ひをして、其場へ出ると、臆面のない處で威勢能く書いたのぢや。それで一等だ。

七夕祭の時などにも、字が拙で、先生が、私の父に氣の毒だと思ふて、頻りと、手を取つて呉れるのぢやが、矢張りいかぬ。それでも賞め言葉といふのもあるもので、其先生は、私の習字を「徂徠の風がある」と言つたのぢや。

此頃は、字を多く書くが、後からくと頼んで来て、まくり紙がこんなに澤山に溜まる。かせいで

も追ひ付く事でない。其代り手紙といふのは滅多に書かぬ。来る手紙は折角ぢやから讀むが、返事を
出さん方ぢや。昔は、金を借りる手紙と、妓への手紙、

「用があるから一寸來い」といふ色氣のない色文を折り／＼書いたものぢや。

客「濱の家の頃、何んたら言ふ強い妓が居つて、我輩參つて哥兄に仇討ちをしてもらつた事がある」

翁「あれはしたゝかな剛のものであつた。俺もお替り八杯位いけた時代ぢやから、仇討ちをやつた。

何にへかけても押しの強いのは俺の長所ぢや」

別客「正宗の牙えが恐しい事で」

別客「百鍊百磨の鈍刀の威力にはいつかな剛の奴も叶はんでせう」

翁「處が、其の報めで、昨今は、若い女の指壓療法といふやつで、うんとおされるのぢや。仇を討

たれて居るのぢやらう」

私の印は貰ひものばかり

私の落款か。印は、最初京都で、鰻屋が、何か字を書いて呉れといふ。未だ、私も字など書かぬ頃の事ぢやつたので、印も何にもない。すると、其の鰻屋が、大きな印を造つてよこした。それが一年

も物置きに入つて居るのを、後に出して使つた。五六寸も大きいのだつたが、何時の間にか、無くなつた。

其他の印も、私が注文して造つたのでない。皆な誰れか造つて来た。

「何んでもよいやうに」いふてやつたら、今有るやうな印があんなに澤山出来たのぢや。

私の若返り法

私は昨年きょねんの正月しょうがつは十五年ほど若返つたやうぢや。雑煮ざぶにを九つ食べた。十五年來何時いづれの正月しょうがつも雑煮は六つであつたのが、昨年は九つに復したのぢや。

然さうぢや、これも温灸おんきうの效かうかとも思ふ。百二十日間毎朝まいあさこの温灸をやると、大いに若返るといふことだ。毎朝彼方あつちから出かけて来てやつてくれるので、よく長續ながつづきがすることぢや、モウ六十日餘ちより續いたから、峠たうげを越したのぢや。

若返りわかがへや、六百六號ろくむそくごうの注射ちゅうしやとか、その他いろ／＼やるやうぢやが、六百六號といふのも危険なものと見えて、金杉英五郎かなすぎえいごろうが私わたしにはやつて呉くれんぢやつた。

「若しかして、悪い結果わるいけつこでも來ると、困こまるから」といふと、「それなら、一つ検査けんさをして上げませう」

と、血ちや小便せうべんなど調べたが、糖とうも梅毒はいびくも淋毒りんどくもなにもないといふので、六百六號の注射をする要ようはな

いといふのぢや。私は若いころだつて随分放蕩ずいぶんほうたうはやつた。しかし一寸感染ちよつとかんせんしたやうな氣味きみになつてもそこだけのこと、體軀からだへはうつらんのぢぢや。鼻はなくえになつたら困つた事ことぢやらうが、そんな事もなく、まア惡運あくうんの強いやつぢや。

モウ一度四十才から出直したい!

此この寫眞しゃしんは、私が四十才の時ときぢや、(寫眞を示して)栃木とちぎの方に有つたといふ小さいのを、黑龍會こくりゆうかいの若い者が引き伸ばしたのぢや。

客きやく「襦袢じゆはんの襟えりが、横縞よこじまで大層たいそういきに見えますが」

翁おきな「それは寢卷ねまきぢや。風邪かぜを引いて臥ふせつて居るところを、寫眞を撮とらして呉れといふから、面倒めんどう臭くさいで、其上そのうへ一枚重まいかさねて寫したのぢや。モ一度、其頃そのころから出直でなほしたいものぢや。……然さうぢや、濱はまの家やで、俺おれの全盛時代ぜんせいじだいぢや。

此頃このころのやうに、半年交代はんねんこうたいの内閣ないかくでは、其度そのどびに解散かいさん、選舉せんぎよぢや。大臣だいじんや、次官じくわんの顔かほを揃そろへる丈だけで、

何にも仕事が出来なからう。三浦が三黨首會合を企てたのも、其意味から來た事で、同じ政府が、何年か永續しなくては善政が行はれん。

客「斯うなると、政權慾のない或種の政府監視團が出来て、政府以上の威力を有ち、自分は決して政局に當らんといふ事にして、睨らんで行く事が必要でせう」

翁「然うぢや、自分が政局に當つてはいかん、誠實以て正邪を見分けて、悪い事は遠慮なく排斥しなくてはならん」

俺れは馬鹿運が強い

俺れは、世間が「馬鹿な！」といふやうな事を一向無頓着にやつたが、自然敵の方から避けるので、其の馬鹿が通つた。

「馬鹿運が強いのでやらう、愚は我が安宅なりぢや」

敵を倒して其處に安全を求むる

平岡など、四人連れで易者に行つた時の事、私の事を、

「此中で、あなたは一番危険を好まれます」といふ。

私は危険を好むのではないが、する仕事がいづも危険になる。安全を求めるのぢやが、私の求め方が他と異なるのぢやな。敵地に入り、敵を踏み倒して其處に安全を求めるから、自然危険を好む形に見えるのぢやらう。

富相破りの貧乏生活ぢや

佐々(友房)が、或る人相見の處へ行けといふ、「百發百中ぢや、ま、行つて御覽なさい」といふから、廣瀬千磨など一緒に出かけた事がある。

モウ七十餘の老人で、目が能く見えんらしい。さぐり見をして、それでも、わかると見えて、

「あなたは、千圓の月給は見向きもしない方ですね」といふ。

其頃は、大臣でも八百圓の月給ぢやつた。それから又、

「あなたには大した富相があります。何かの大きな株が出来て居ます。山とか何かで金がモウ出来て居ませう」といふのぢや。炭坑が其時賣れたのぢや。

その富相を自分で破つて一生貧乏したのぢや。それでも、大井憲太郎などよりはよい方ぢや。

此の相者は、やがて盲目になつて、今度は、聲で判断したのが、矢張り能く當つたそうぢや。人相見の中でも聞えたえらい奴ぢやつた。人間の聲といふのは、其人を好く現はして居るものぢやらう。

猿真似をすると不具になる

猿が八疋居つて、七疋までは鼻くえぢやつた。そこで彼奴等は、一疋の鼻の無事な奴を、「貴様は不具ぢや」といふた。

何方を見ても皆な鼻が無いので、此の一疋の猿は、「なるほど、おれは不具かな！」と思ふたといふ。此ごろ世間は、西洋流の鼻くえ猿を真物と思つて、日本の良い處を不具と思つてゐるやうぢや。

外國の憲法論で日本を論ずる間違

來客「立法院の行政府のと言ひますが、モ一ツ日本では、國政監視府といふものが入用です。政黨が二ツで、責任のなすり合ひ、あらさがし、つまり目糞と鼻糞の喧嘩で國民は馬鹿を見るのです」翁「然うぢや。私は一生、其の監視をやつたのぢや。時には、直接にも政府の者へ警告もした、間接には、何時も監視をやつて居る、今度も、海軍の縮少問題で、若槻はじめ、各國の全權に當て日本

の立場から是れでなければならぬといふ處を私の名で電報も打たせたのぢや。日本といふ國體を知らんで、外國の例ばかりいふ奴は臍抜けぢや。外國の憲法論で日本を論ずるのは間違ひぢや」

(編者申す。本文中頭山翁が御自分の事を私、我輩、俺れなどと、言つて居るが之は、其時の氣分、又は話題に依つて、自ら然うなつたもので、編者が、亂雑に書き綴つたものでなく、寧ろ十分注意をしたのである事をお断りする。)

最近頭山翁に對する諸家の感想

左に録するは、前掲、頭山翁の直話記録を掲載した「人の噂」誌上に寄せられた諸家の翁に對する感想文である。(到着順に列す)

× × × × × × ×

卓然雲表に峙つ大山峻嶺の姿

「人の噂」主幹 細 井 肇

人格の高秀なる者は、大山峻嶺の如く、掩はんとして掩ひ能はぬ。わが頭山立雲先生は、明治、大正、昭和の三代を通觀しても、群小起伏の凡山凡岳をふまへて、卓然雲表に峙つ、大山峻嶺である。大西郷以來、人格において隨一人者といふも溢美ではない。先生は、荒尾精を評して人材は五百年に

一人、その一人こそ荒尾精であつたと云つておられる。然らば先生は千年にして一人を産する大人物であらねばならぬ。同郷の杉山茂丸氏は、その著、百魔傳において左の如く説かれてゐる。

頭山氏のことは總て反對に解釋すれば大抵間違は無い。氏は無學のやうで學識があり、寡言のやうで能辯であり、卑近なやうで深遠の理を究め、そつけないやうで親切であり、恬淡なやうで濃厚であり、忘れたやうで強記であり、放漫なやうで謹嚴であり、冷酷なやうで慈悲無量であり、無勘定のやうで締括りがあり、物を容るゝ事大海の如くにして、生を愛する事は昆蟲も犯さず、功名富貴を見る事塵埃の如く、特に父母兄長に厚うして勤王の志深き事は、庵主の常に畏服する所である。

作爲の跡なくして此の境に到り得たる頭山先生の人格は、眞に千年にして一人の天下の大材と云はねばならぬ。ひとり明治以來の大人格たるばかりではない。日本史中殆ど比類を求め得られぬ。或は世界未曾有の特異の風格と氣節であるかも知れぬ。われ等はたゞその半面を見、一角を望んで裳裾にまつはりつゝその折々の片鱗を相し得るに過ぎぬのではあるまいか。

七月十一日、朝鮮で相識以來、訂交二十餘年の薄田斬雲君から、「頭山翁の直話記録」を送られた。恰當、同夜は東京會館に開かれた朝鮮協會の會合から歸つて、もう十時に間近かつたが、思はず私

は深更一時まで釘付になつて読み耽つてしまつた。薄田君は、この稀代の人傑にあくがるゝの餘り、一ヶ年半、毎日頭山邸に日參して、立雲先生が坐客との應酬の間、興に乗じて思ひ出語りをされた身の上に関する話柄だけを、牡蠣の中から克明に眞珠を拾ふやうに、選擇し、壓搾して三百枚の稿紙につづめた。全篇金玉の結晶である。當世流に引き伸ばせば、五六千枚にならうとは、薄田君の言である。殊に、從來、いろ／＼の名を冠して出版された立雲先生の傳は、みな又聞きだと云はれるが、本稿のみは、濱池八郎、眞藤義丸、柴田徳太郎諸氏から、翁の閱歷の眞傳を書きたいと申し込み、頭山夫人並びに令息立助氏の承諾と共助をも得て、前記の如く、一ヶ年半を忍耐した薄田君の努力の資である。薄田君は東北の産、辛抱強い東北人の特性を有したればこそ始めて成つた大作である。「翁に問ひを發すると、ウームと云つたまゝ、返事までに一二分間かゝる時がザラにあつた」とは、薄田君の述懐である。勿論、翁の偉大な人格に惹き付けられた爲めではあるが、薄田君の爲めには、畢生の心血を濺いだ永久に記念さるべき仕事である。

私は、だいぶ疲れてもゐたが、讀んで行くうちに、感激に躍る心を抑え兼ねた。坐り直して讀んだ。肅然襟を正して讀み耽つた。十一時を過ぎ、十二時を過ぎ、一時に間近く、始めて卒つた。名狀し難い大きなものを見たアトのやうに、息づまるほどの感激に打たれ、喜び極まつた。スグその感想をそ

のまゝ薄田君に書いて翌朝速達で送つた。二時頃床に入つたが、どうしても眠れなかつた。前半は、週刊朝日に掲載され後半が即ち本稿である。この傑作を本誌の讀者諸君に提供し得ることは、眞に無上の欣びである。本誌創刊以來かつて覚えざる感激である。

(編者斬雲申す。細井君は最もよく私の心情と勞力を察して、此稿の一半を、其の主宰する「人の噂」誌上に掲載する事を快諾したのであるから、諸家感想文の初めに同君の一文を置く)

全體翁のドコが偉いか

内田良平

頭山翁は、西郷以來の大人物であるが、さて翁のどこがえらい、こゝがえらいと云ふ事は云へぬ。勿論大人物と云つても、神様でない人間の事だからいろ／＼の缺點もあらう。むしろ或る場合には、大人物ほど大きな缺點を持つてゐるものとされてゐる。たゞ、常人においては兎角缺點のみ目立つて見えるものだが、大人物になれば、己れの持つてゐる缺點は長所が完全に之を償ひ、特に長所のみ光つて見える様になる。

翁の風格をうかゞふに足るべき逸話はいろ／＼有る――。

若かりし頃の翁は、仲々道樂をやつた。或る時、或る人が、翁の道樂の激しさを心配して、少し慎まれたがいゝだらうと忠告すると、「わしは今まで自分の全精力を盡して勉強をしたと云ふ事は何一つなかつたから、せめてこれ位は全力を傾注してやつて見たい」と答へた相だが、智は以つて諫を防ぐに足ると云ふべきだ。

翁は別段擊劍と云つて習つた事もなかつたが、持つて生れた腕力の強さと、直ちに身を以つて磨ると云つた氣魄で、立派な劍士も翁に立ち向つては實に辟易したらしい。

一體智とか、勇とかに秀れたものは、とかくそれを使ひ過ぎるために失敗する。翁は、實に智勇兼ね備へて居りながら、敢てそれを使はうとしない。そこに翁の偉大性がある。

翁の大成は素よりその生れながらの天分にも依らうが、また自ら工夫して贏ち得られた、謂はゞ努力の結晶である。翁は、始め鎮西八郎が好きであつたから、彼にあやかり度いたために、八郎と稱してゐたが、後ち菅原道眞の方が偉らい人物と知るや道眞に私淑するに至り、天満宮の満を取つて名とした。

この改名の時、友人の僧が、満は損を招く、餘り名前がよすぎると名前負けがすると、しきりに留めたが、翁は「名前に負ける様なら死んで了つたがよい」とばかり一向に取り合はず、件の僧をして

「なんと、小面憎く奴ぢや」と憤慨させたと言ふ。

それは兎に角、鎮西八郎から菅原道真への心境の推移は、深く思ふべきだ。

私の伯父平岡浩太郎は頭山翁とは水魚もたゞならぬ交はりであつたが、曾つて頭山翁を評して、

「頭山ほど仕方のない奴はない。彼奴は總理大臣より外には巡查もつとまらぬ男だ」と云つたが、私は頭山翁の批評で、此の言葉ほどよく其の人を評し得た言葉は聞かない。西郷南洲もそんな人で無かつたかと私は思ふ。一體に昔はさう云つた型の人間が多かつた様に思ふ。平野國臣にしてもさうであつた。その他境遇や、時の關係で世間的に名前を出さずに終つた人の中にも、偉大な人物が居た様に考へられる。

頭山翁についてさて何處が偉らいかと質ねられると、始めに云つた様にどこが偉らいか、こゝが偉らいか云ふ事は出来ぬ。強ひて云へば、どこが偉らいか、こゝが偉らいたと云へぬ所こそ、翁の偉大さを物語るものではなからうか。たゞ翁は平生何事も知らぬ様でゐて、話して見ると何も彼も承知されてゐるには驚ろかされる。

翁の活躍されたのは、随分早かつた。明治九年、前原一誠の亂がたしか翁の活躍の始めかと思ふが、その亂で翁は投獄された。然し投獄されてゐたために、翌十年の西南戦争には加はらなかつた。でなくば或は西郷南洲と命を同じくして居り、今日の翁はなかつたかも知れぬ。人生の不可思議なる契機想ふべしだ。

翁と荒尾東方齋先生

井上 雅二

福陵の地に玄洋社のあることは少年時代に聞いて居つた所で、私が海軍兵學校在學中、夏休に武者修業を試みて、同社に進藤社長に謁したのは十七歳の時のことで、其時始めて立雲翁の雷名を耳にしたのである。翌年當時洛東鹿ヶ谷に靜居せられて居つた東方齋荒尾先生を訪ひ、改めて翁と先生との親交あることを承知した。先生は興亞學院を興し、志を興亞に抱くの青年を集むるの計畫を以て、翁並に佐々克堂、高橋自恃の諸友に相談中なるにより、私に其儘滯京する様にと勧められたが爲に、私は東上研學の目的を延期して先生と寢食を共にすることゝなつたのである。

爾來先生より屢々翁のことを興り聞き、其後間もなく、臺灣を経て支那に遊び、歸つて先生の紹介に依り翁に始めて相見えたのである。明治廿九年の十月に、先生は臺灣に於て疫に罹りて俄かに歿せられ、其遺柩を靈南坂に迎え、葬儀を営むに當つてや、翁は其間に斜旋せられたことは、私の記憶

に猶ほ新なる所であつて、嘗て刎頸の交を締せられた佐々荒尾の二先生と打連れて某師に就き試に三人の觀相を爲さしめられたるに佐々は日本の豪傑にして、荒尾は東洋の豪傑、又、自分は支那の豪傑の相ありと答へた杯と云ふ笑話も貽つてゐる。而して翁は最も荒尾先生に傾倒し、先生を以て大英雄となし、大英雄は五百年に一人位しか出ないものであるが、荒尾は其者では無いかとさへ思ふた位であつた、と云はれてゐた。昨年の秋、霞山會館に於て先生の三十三周忌追悼會を催せし際には司會者の指名により、二三氏より追懷談を試みられたが、平素無口にして演說等をされたことの絶へて稀なる翁が、突如として立つて力ある熱に燃ゆる聲を以て、追悼の詞を述べられたるには、一同深く感動したのである。翁を知ること卅幾年、青年時代には時々謁を請ふて教を受けたのであるが、近年身邊多忙の爲めに態々趨拜するの機會も乏しく、偶に會合の席等に於て寒暄を叙する位に過ぎないのであるが、大正天皇御崩御の後、翁は民間功勞者として特に召されて殯宮に侍せられたことがある。私も衆議院總代の一人として、參殿したのであるが、列席の文武百官孰れも大禮服に滿艦飾を施して光彩陸離たる間に、翁は珍しく何等裝飾なき瀟洒たる燕尾服に身を固め、端然として衆人混雜の間に佇立して居られた。傍の方々は之を見て座席を翁に請ぜられたとのことであつた。斯かる匆々の間にも翁が衆人より敬意を拂はるゝの一端が窺はれるのであつた。翁の眞面目は描かれて紙上に明かであるから、私は只だ翁と荒尾先生の因縁に就てのみ一言を費し其の責を塞ぐのである。

明治維新と大陸的帝國主義

白柳 秀湖

頭山翁が明治の政界にのこされた足跡を辿つて行くと、僕には何うしても、日本の國家的統一、即ち明治維新と大陸との關係が眼に映じて來ます。フランスの國家的統一が、普墺を中心とする歐洲の神聖同盟に妨げられ、獨逸の國家的統一がナポレオン三世の大陸的野心によつて妨げられ、同じやうに伊太利の三國統一も佛蘭西の大陸的帝國主義によつて妨げられて居たやうに、日本の明治維新も、支那及び支那の手先である朝鮮によつて有形無形の妨害を受けて居ました。西郷の征韓論は版藉奉還、廢藩置縣によつて職を失つた四十萬の士族の處置に關係のあつたことは勿論であるが、同時に日本の大陸的發展は日本の國家的統一を完成する上に絶対必要の條件であつたことはいふまでもない。たゞ征韓を先にして、國家的新制度の樹立を後にするか、國家的新制度の樹立を先にして征韓を後にするか、問題であつたゞけである。

頭山翁は西郷隆盛の後継者であつた。西郷の背後に四十萬の失業士族があつて、その大陸的帝國主義を支持したやうに、頭山翁の背後には筑豊の炭田があつて、その大陸的帝國主義を支持して居る。イギリスの歴史でも、日本の歴史でも帝國主義は石炭に大關係がある。殊に筑豊の野は、刀夷の入寇以來、大陸の侵襲を受けること一再にして止まらず、筑豊人の血管には、他の内地人の想像することの出來ぬ對大陸的感情が潜んで居ることを忘れてはなりません。が、そんな理窟は一切ヌキにして考へても、頭山翁のあの押出しは確に極東大陸を壓して見事に國家的統一を完成した新興日本の象徴であると思はれます。人間を見れば直に善玉か悪玉か、愛國者か、非愛國者か、ブルカプロかに分類しなければ納まらぬ現代人の範疇を以てしては到底律することの出來ぬ存在であると思ひます。

頭山先生の風手

滿川 龜太郎

私は二十年前から頭山先生の風手に接する機會を有つてゐるが、特に親しく嚙咳に接したのは、大正五年日支國民協會の同人となつてからであつた。當時今は故人となつた寺尾亨博士や、宮崎滔天

龜井陸良諸氏、現存の人としては水野梅曉、萱野長知、今井嘉幸、柳田國り、中野正剛、阿部眞言諸氏と屢々會合したが、この時先生は何時でも黙々として餅菓子を頬張つて居られた。そして何かの用事で退出されるときには、何時でも必ず次の間に下り、一同に對して鄭重なる挨拶をされるのに、却て恐縮したものだ。未だ先生を知らなかつたとき、定めし所謂東洋式豪傑であらうと豫想したことが根本から覆されたのである。

ユニークな存在

島 中 雄 三

その名を聞くことは實に久しい。しかし私は頭山滿といふ人物が、果してどういふ人物であるかを能くは知らない。

たゞ世間傳ふるところによつて、一種エタイの知れぬ偉大な怪物を想像するのみである。曾て或る人が、元龜天正時代に生まるべくして過つて泰平の時代に生れたのが頭山である、と言つた。評し得て頗る妙である。たゞ何が故に妙であるかの理由に至つては、依然として、私には分らぬ。明治、大正、昭和を通じて、政治界にも實業界にも軍人の中にも、幾多の人物は輩出してゐる。し

かし偉人といふも英雄といふも畢竟は時代が生んだ産物に過ぎない。たゞ一人頭山に至つては、斷然時代を超越して而も時代をリードする底の、一時は大きな影を投げた。そこに此の人の面目がある。何にしても日本に於ける一種偉大な、そしてユニークな存在であることは疑ひない。それ以上の事は知らぬ。

現代の第一人者

小久保喜七

余は常に青年諸氏に向て「諸氏の多くは慕ふべき人を外に求むるが、それは心得違である。斷じて之を内に求むるが好い」と諭すのである。何となれば一點私心を胸に存せず、至誠天地と融合すると云ふが如き典型的偉人は他民族に見出し難く大和民族にのみ存するからである。楠正成、徳川光圀、熊澤蕃山、山鹿素行、藤田東湖、西郷隆盛、勝海舟、山岡鐵舟、眞木和泉、乃木希典の如き則ち是れである。現代に於て此品流に屬する大人物は獨り我頭山滿翁に於て之れを見るのみである。余の頭山翁と相識を得たのは實に明治二十二年大隈外相の企てたる條約改正に反對した時である。爾來四十年少くも毎年五六回は會談の機を得るが、其度毎に此感を深ふし、此人一人の存在が如何に

當世の風教に裨益すること多大なるかを思はぬことはない。余は愈々翁が自愛加餐、百年の壽を保ち、長く中流の砥柱たらんことを希望して止まぬ。從て今回貴社の盛舉を聞き、手の舞ひ足の踏む處を知らず、囑に應じて微言を寄する次第である。

その黙せる大風貌

喜多壯一郎

わたしは、人間を英雄だとか凡人、天才だとか凡才、神仙的英雄だとか蓋世の偉人だとかの標準を附すことをなんとなく好まない氣傾があります。だが、偉い人だ、よく物のわかる人だ、活動家だ、懶けものだ、虚榮家だとある種の基準をつけずとも、その人となりは大體感ぜられます。斯様の標準や基準を無視して、ある人に接してみても、わたしのもつ氣癖のある點にずんとぶつかつてくるひとつのインスピレインを時に感じます。

そして、そのインスピレインが二つに區別されます。ひとつは大能力をもつといふ感覺と、ひとつは大風貌をもつといふ靈感であります。大能力家だと感ずる時が俗にいふ英雄でせうか。大風貌だと感得する時が、その人は偉人とでもいふのでせうか。

わたしが頭山先生にほんとに親しく接した——といふよりも親しくその馨咳に接し得たのは、たつた一度でした。それは、數年前に先輩中野正剛氏のところにゐた友人直木君が死んだ時に、その告別式の時でした。大連の金子雲齋先生と頭山先生とが青山の齋場で雪ふる日に、友人直木君について、告別せられるその時でした。いろ／＼の人々がいろ／＼の談話をした。そのなかにわが頭山先生は、ついに一言も發せず黙々としておられたのだが、その黙々は、ついに大風貌の黙々でした。わたしの個人的氣癖からいへばこの黙々はまさに大風貌。偉人とは斯くてあるべきか、と今でもあの時のことを想ひ出します。

貫通三世對皇天

紫安新九郎

予は未だ頭山翁と一面識もなし、従つて翁に就て知る所なきも、翁が何等の表て立つたる地位なくして、その名聲の久しく世に喧傳せらるゝ所より觀察すれば翁は或は横井小楠の所謂、貫通三世對皇天と云ふが如き、信念と抱負ある長者かと思はれる。

宗風舉揚の巨宗

田子一民

私は神仙的英雄と稱せらるゝ頭山先生を知らない。が、その潜在勢力、その國民的憧憬をよく知つて居る。たゞ、御會ひした事も、御話した事もない。知るべき機会はない。けれども何となしに引きつけられるあるものをもたされて居る。

私は毎年友人に招かれて相撲觀覽に行つた。友人の觀覽席は偶然にも頭山先生の觀覽席の次の後ろの席であつた。

先生は沈黙の裡に悠々たる素朴さを見せて、何とも言ひ得ない、重みと親しみとを見せて居られた。私には、修養の上にも參禪入室の様な氣分を與へて呉れられた。一語、一楫の事もなく、先生と知らない私にも、何ものか知つた様な氣分を與へられた。知ると知らざるとは、形の問題であつて、先生は私をも含んだすべてに知られて居る。近來、多忙なと一日の生活の不規則な爲めこの境地も見出されない。

私の門を叩いた青年の口から先生の噂はよく傳へられたものである。先生は、すべてを愛し、すべ

てをはぐむ慈眼の存在の様に思はれる。師家にでもなられたなら、宗風を擧揚して世道人心を一段と作興されたものと思はせられた。

蓋し、先生は政界、精神界の大師家であり、大禪師であらう。

無邊の偉大

菅原傳

拜復 頭山翁に對する感想如何との御申越に候得共、自分は翁と親交なく、従つて特別の考察も無之候。

唯翁の立雲なる號を聞く毎に面白く感じ候次第に御座候。

雲は掴む事殆んど不可能なり、蓋し翁の無邊の偉大なる人物を、表徴するものかと存候。匆々、

高潔なる隱者の命

推命家 清水愛山

近代の巨人頭山先生の人格に對しては只管尊敬するの外はないが我輩は推命學上より見たる立雲先

生を述べて見たいと思ふ。翁は安政乙卯年辛巳月甲辰日の誕生であるが、之れを推命上から見ると先天的の天命が立雲先生の今日あらしめたものと思ふ。翁には些の私心なく又功名心もない實に名利に恬淡たる翁の如きは近代其比を見られぬのである。其國家的觀念と道義心の熾烈なること、其金鐵の如き意志と觀世音の如き慈愛は共に人心を收攬する力多く、權威に屈せざる剛氣は義侠に強く、然かも大事に動ぜざる偉風は、世人より信仰せらるゝ徳望が、自ら備つて居るのである。翁は終生野の人で我輩は翁を評するに高潔偉大なる隱者の命と云ひたいのである。

翁は又世間から推舉せられる様な事は最も不本意とせらるゝのである。翁の部下知人等の内には随分翁に物質的にも又道徳的にも不尠迷惑を掛けた人が多しと思ふが、翁の仁心は殆ど念頭に止めて居られぬことであらう。

今や昭和の聖代に於て國運は隆々たるものがあるが、只輕佻浮薄なる現下の風潮は慥かに思想國難に直面して居ると思ふ。此秋、翁の如き超凡なる偉人の獅子吼に依つて天下を警醒し、國士の本領を益々徹底されんことを深く期待するものである。

現代比なき人物

松岡正男

頭山氏は人によつて好き嫌ひは免れざるべしと思へど、日本の現代において、他にその比を見ざる人物なるは、何人も肯定する所と信ず。

まぢり氣のない人間

風見章

私は二十才頃から頭山先生によつて大いに教へられてゐる一人だ。たゞ先生の前に坐つてゐるだけでも先生からは何ものかを教へられる。先生みづからの工夫によつてきたえあげた人格が、つねに、例へば焔のやうに先生の五體から逆り出るからである。先生は作られた豪傑でない生れたる豪傑だとも思ふのだが、しかし又、先生それ自からの修養工夫のあと、凡夫の容易にうかゞひ知るあたはざる所であるにせよ、以て範とし、以て典とするにおいて、先生の精神を見失はないかぎり、あやまちなき道の人となり得るだらうと思ふのだ。まことによく鍛えあげられた「人間」として頭山先生を見

出し「人間」としての典型をもとめ、私は頭山先生の如き、第一に指を屈すべきだと信じてゐる。先生の行動は、總てが第一義的で、名利といつたやうな第二義的なものゝあとは、ちつとも無い。「オレは正眞正銘ちつともまじり氣のない人間だぞ」と、威張つて、天地にはぢずに生きてあるける境地にあるものを求めて、私は頭山先生だと、思つてゐる一人だ。人間指導者の最もすぐれたるものとして私は頭山先生を望見してゐる一人である。

仁俠・正義・豪放の權化

鏑木忠正

年代の相違とでも申しませうか、私は未だ一度も親しく翁の聲咳に接した事がありません。従つて翁に關する批評も觀察も出來ないので、この感想は或は正鵠を失して居るかも知れませんが、此點は御容赦を願ひます。

其當時翁の率ゐて居た玄洋社には随分多くの志士が雲集して盛に國事に活躍し、然も正義の爲には身命を賭してかかつたものださうですから、浪人組とは言ひ乍ら翁の政界に於ける隱然たる勢力は實に侮り難いものだつたでせう。

時の藩閥代表や政黨首領から臺閣に列する様との再三の懇請を常に固辭して表面に立つ事を欲しなかつた相です。又すつと以前福岡から立候補する様勧められた時も「九州一圓から一人の代表者なら立つてもよいが」と言はれたさうです。蓋し翁の行き方は名よりも實であると思ひます。今日の如き俗悪なる政界に往々見るが如き、何等の抱負經綸もなく單に代議士と云ふ虚名に満足して居る虚榮政治家、或は自己が窮境に陥るや忽にして節を賣り、多年の敵黨に平氣で降伏する様な小柄口な政治家や、或は昨日は東、今日は西と殆ど水藻の如く利權漁りに浮身をやつすが如き政治家達は、翁の此態度に對し以て如何となすと言ひ度くなりませう。

僅か四萬圓で買つた夕張炭山が七拾何萬圓かで賣れた時は、それ迄の負債を全部償却し、その残餘は全部恩義を受けた者や又は乾兒に分ち與へ殆んど壹錢も残さなかつたさうですが、之等も中々普通の人には出來難い事と思ひます。賣動疑獄、鐵道疑獄、何々疑獄等而起して迄も物質欲を逞しうせんとする、天人共に容し難き破廉恥漢の簇出する當今、翁の此行爲を思出すさへ萬斛の涼味を感じるのであります。

朝鮮事件前後に於ける金玉均氏に對する血あり涙ある處遇はよく翁の眞面目を躍如たらしめます。漂浪の旅にある弱き志士は如何に翁の仁俠に感泣した事でありませう。續いて支那亡命志士等に對す

る心よりの援助も、全くその仁俠の連鎖であります。「身を殺して仁を爲す」、「義を見てせざるは勇なきなり」の古き教へは翁の行ひに於て克く知る事が出來ます。

全く翁は仁俠、正義、豪放等の權化と言へませう。官權、金權萬能の時代に於て、清貧に處し浪人組の頭領として萬人畏敬の的となれる又故なきに非ずと思ひます。

作意なき生活

簡牛凡夫

傳記などといふものは、普通其人物の眞價以上に誇張され、美化されて居るものであるが、頭山先生に關しては、これまで幾多の傳記、逸話集、直話集などが刊行されて居るけれども、何れを見てもあの偉大さの眞髓に觸れたものがない。

私は此等の書物を見る毎に、先生の人格は如何に誇大なる形容詞も、巧みなる文字も、之れを傳へ得るものでない。先生は、筆舌のよく寫し得ざる程の偉大さを有つて居らるゝのだ、と考へて居る。極く失禮な觀察の仕方の様にも思ふけれども、先生には、所謂資産といふものがない、而して又何等世間的な活動もしてゐられない。

毎日只だ、凡百の衆俗の願ひや、訴へを聞いて、人生の行路に迷へる者、道を求むる青年等に夫れ夫れ功德を施しつゝ、一意、皇國の安泰を祈つて居らるゝ。先生の生活には、作意といふものがない。現代に生ける者は、産の有るものも無いものも、殆んど自己の俗な世渡りに没頭してしまつて居るが、先生に於ては、家も身も、全く大自然の中に擲げ出してしまつて、只だ茫洋として大道を歩いて居らるゝ。日々の生活の糧も、衆俗に施與せらるる莫大な黄白も、悉く隠れたる信者や、求道者の寄進に因るもので、其間何等の作意もない。此の點のみより考ふるも、先生は實に人格を超越して、神格を具現さるゝものである。

翁 よ!! 翁 よ!!

安 藤 盛

私は翁を見たのは、一三年前、自動車の中にあつたのを、ちらりと見ただけなので、翁それ自身に對する印象はないが、誌上に現はれた翁には一種の親しみを覺える。十五六の少年時代、あの頃あつた冒険世界といふ雑誌に、翁のユーモラスな一面が記載されたのをよんだのが、今尙かつきり胸にある。

それに私は、翁の出生地に接した大分縣なので、地理的にも一種の親しみが有り、更に二十二三の頃から、支那、南洋を旅行し初めたが、その度に、支那に於ける翁の大きな足跡を見て、このせまい日本には、ちと大きすぎる怪物といふことを知つた。現代人から見ると、一種の明治時代の遺物とでも云はれる翁をすきなものは、あの黙々として、何ごとも語らぬ風格に、私はぐひぐひとひきつけられてならない。

翁のやうな怪物? それの存在は思想的國難に逢着した現代日本には要石とも見る可き偉人で、くだらない政治家や教育者たちの、千萬言を費して思想善導を叫ぶ聲を聞くよりも、無言の翁の日本にあるといふこと、それ一つでも私たちの心を強くするものがある。

陸海軍の元帥や、元老といふ妙な變型人には、大した敬意も拂ふ氣持ちはない私も、翁にだけは、一面識もないが「人」としてのなつかしさを、常に胸に持つのである。人爵など枯葉ほどにも有難いことに思はぬが、人としての翁、翁の人としての風格は、國寶と斷言して憚らないのである。

究め難き大人格

竹内大三位

翁おきなを知りそめてより二十何年なんねん、いまだに翁おきなの人物じんぶつがわからず、どうも奥底おくそこの知れない人ひとである。登のぼれない茶蔞しゆゆの果實くだものは子供等こどもらが各自かくじの身みの丈だけだけ摘み取るやうに、翁おきなに對する者ものは、各自かくじその智慮ちりよに相あ應おこするだけ翁おきなを知り得えて、それそれの解釋かいしやくをするらしい。その點てんは大西郷だいさいがうに似た所ところが有ある。偉大人物ゐだいにんぶつと言いへる。

從したがつて翁おきなの人物じんぶつは、棺くわんを蔽おほふに至いたらねば批評ひひやうらしい事ことは言いへない。イヤ翁おきなの死し後ごもなほ、私わたしにはわかないかも知れぬ。

今日こんにちの歴史家れきしか達は確たしかに大西郷だいさいがうを、少すこし買かひかぶつてゐると思おもふが、私わたしは決して頭山翁とうやまおきなに岡惚をかぼれて居をるものでない事ことを確信かくしんし言明げんめいする。それは私わたしは翁おきなに世話せわになつた事ことも無なければ又適度またてきどに翁おきなから離はなれて居をるからである。茲こゝに遠慮えんりよなく言いふ、翁おきなの如ごときは子こ子こ者しや流りゆうに満みち満みてる現代げんだい日本にほんに於おいては國寶こくほうとして數かふべきものなることを。

富士山と翁

猪野毛利榮

頭山先生とうやませんせいは威ゐも恩おんも兼ね備かねそなはる巨人きよじんである。人ひとの力ちからやなどで出來ぬものが日本にほんに二つある。富士山ふじさんと頭山とうやま満みだ。二つ共とも、神かみが日本にほんに下くださつた國寶こくほうだ。

尊たふとむべし、誇ほこるべしだ。

若もし日本にほんに富士山ふじさんと、頭山先生とうやませんせいが無なかつたなら、日本人にほんじんは如何いか程ほど浮調子うきぢょうしで、淺薄せんはくで、小粒こつぶであつたかわからぬ。我等われらは常つねに二者にしやに感謝かんしゃして居ゐる。

頭山も男が廢つた

今村螺炎生

日露戦争にちろせんそう前ぜんの事ことであるが、時ときの宰相さいしやう松方まつかた伯はくは、國是こくぜとして是非軍備ぜひぐんびを擴張くわくちやうせねばならぬ。財源ざいげんは、地租増徴ちそぞうちやうの他ほかに途みちが無い。

しかし、農民代表者のうみんたいはうしやの時ときの野黨やたうが、一致いち、反對はんたいは必然ひつぜんであり、當時たうじ最も勢力せいりよくのあつた三多摩壯士たまたまさうしを

帝都に召集し、其の威力を發揮せしめ、案の通過を極力妨害せしむるに極まつて居る。といふので、總理は獨り心を悩まして居た。と、夫れは頭山先生に頼んで、三多摩壯士の制馭策を講ずるに限ると、進言した者がある。そこで双方の會見となり、總理から極東の情勢より軍備擴張の止むを得ざる所以を説き、國家の爲めに一臂の力を借さん事を、乞ふた。黙々として、此れを聽いて居た立雲翁は、力ある口調で、「宜しい、國家の爲とあるなら、屹度受合ひ申した」と唯一言、快よく布諾を與へて、辭し去つた。程もなく議會に地租増徴案が提出せられたが、翁は新橋驛前の旅亭津の國屋に本據を構へ、玄洋社の末流たる、筑紫の血性兒數十名を呼び集めて、酒にひたらせて居た。

腕を扼して、虹霓の氣を吐いて居る、西國健兒の意氣には、流石に三多摩壯士も、壓倒され氣味であつた。やがて、地租増徴案は、僅かの差で、議會を通過した。ある日松方總理は、側近の者に、頭山さんへの御禮はどうしたものであらう二萬圓位でどうであらうと相談したが、夫れは本人に會ふて聞いて見た方が一番よからうと云ふ事となり、迎への人を遣はして、一夕晚餐を共にした。總理から食事の前に「今度は多大の御盡力により國家の經綸が立ち申した、深く感謝しますが、就ては甚だ失禮であるが、御禮は如何にしたものであらう、そこを遠慮なく申出が願ひタイ」と切り出した。翁は、ジツト胸に腕組をして深く考ふるが如きこなしあつて後ち、「此の頭山も男がすたつた」と獨り言とも

付かぬ、返事とも付かぬ。セリフもどきの一言を洩らしたのみであつた。其の一動作は、恰も名優團十郎が扮した幡隨院長兵衛の腹藝を想はせるものがあつた。其意中を解し得無い總理は、稍暫くして談再び其事に涉つた時、矢張り「此の頭山も男がすたつた」夫れつ切りである。食事が済んだ後、總理から三度び、其事を話した時、翁は前よりは一層姿勢を緊張させて、且つ語調を強めて、「此頭山も男がすたつた！ タツタ！ 十萬圓！」と言ふや否や、サツト席を立つて、後をも見ずに歸つて仕舞つた。

跡には松方總理が、狐につままれた様な、鹽をなめた様な、頗ぶる變な表情をして居た。翌日、總理秘書官が、金十萬圓也の現ナマを携帶して、津の國屋に遣はされた。秘書官が、金のフクサ包を出した時、翁は夫れを見向きもせず、手にも觸れず、隣室に屯ろして居た壯士の方へ、役が出さしめた。友禪の紅い艶めかしい肌ジュバンを浴衣代りに着し、腰に白緬縮のヘコ帯を締めた翁の姿は、宿屋の床を枕として、横になつて居た儘だつたといふ。但しこれは直話にあらず、傳へ聞くがまゝを――

翁の存在を高調せよ

福田 有造

時代の流れに超越して、斷然立てる吾が頭山立雲翁のあるは、非常に心強い感想を持たせる。世は滔々として、世界の思想界は混亂に亂舞して、吾が日本もその渦中に投ぜられて、あへぎ苦しんでゐる。大衆は街頭に出でて東せんか、西せんか、迷路で思ひ悩みつゝある。是れに對して指導すべきはない、饒舌家は多いけれども、ソレは現在の日本の社會状態に對しては、何等の反應もないではないか。何が現在の日本を如斯状態へまで導いて來たか、深甚の考慮を要すると思ふ。

コ、に隱然として偉大なる存在、立雲翁あるを僕は歡喜し度い。人情に篤い、恩愛に濃かなる人を世は熱望してゐる。コノ涙ぐましい人の出現は世を救ふものである。立雲翁の人情味の豊なる、豪邁なる胸奥、その融合して出來たる全人格を敬慕し度い。翁が現在まで、無言の行を續けつゝ、國民へ何を教へて來たか、ソレを心ゆくまで玩味したい。翁の事績に就きては、僕が今更ら云はずと周知の事實である。亦、月旦社に於て、舊知の士が稿を起して翁を傳ふ、時宜を得たものとして推奨し度い。今一度僕をして云はしめよ。

我が日本の持てる無言の指導者立雲翁コレが偉大なる存在でなくて何とする。

國産愛用を唱道しつゝある時に、事更ら外國の人を偉い者とせず、自國の人物の生きたる傳統的の聲を聞く、國産愛用と共に僕は高唱し度い。

仁者としての立雲翁

小松 霞南

孔子は博く愛する之を仁と謂ふと教へた。基督は神は愛なりと教へた。人間に愛なくば世の中は闇になる。愛は世間を明るくする光である。おのれを愛し、錢を愛し、他人の疾苦を顧みない者があるそれは愛の賊だ。卑しむべき、惡むべき愛だ。昔し守錢奴が火事に遭ひ、平生蓄積した金錢の上に腹ばかりになつて焼死んだといふ話がある。それは話だけであらう。安田善次郎が朝日某に殺されたのも錢を惜んだからだ。錢を抱いて焼死んだ守錢奴と五十歩百歩だ。

尊い愛、神聖な愛は、身を殺して仁を成すの愛であり、錢を棄てゝ人を救ふ愛である。筆者はかゝる愛の持主を立雲翁に於て發見する。

一世に傑出した立雲翁の美點長所は、他の多くの人々が既に推稱してゐる。筆者は自分の感じた一

二の實例を擧げるに止める。

日韓併合の殊勳者李容九が重病に悩んでゐた時の事で、翁は支那からの歸途、偶然同船した宋秉峻に托して、所持金全部を見舞金として贈つた。宋は李が左まで窮乏してゐない事情を語り、東京までの旅費を控除せんことを勧めた。立雲翁は、わしは今健全な體を持つてゐる、これが百萬兩の身代だ、人の病苦を幾分でも和げることができれば、あるだけの物を遣つても惜しくないといつて、平氣でゐた。この話をした宋秉峻の眼には涙が流れてゐた。

立雲翁が昔、濱の家で豪遊を極め込んだ事は、世間周知の談柄である。當時成金連は、幾ら出すから、おれの言ふことを聞けなどと威張つたものだが、一向にもてなかつた。立雲翁先生（翁といふ時代ではなかつた）は、無愛相な顔をして何もいはないで、紙入から兩手で札束をつかみ出して、それを女の袂の中に押し込んで、無言の儘、濟してゐた。それが忽にして千言萬語の口説よりも幾倍かの效驗を現はし來るのである。勿論幾百幾千といふ數量の利目ではなく、その氣前に含まれた思ひ切つた愛情に感動するのであると、當の女性が述懐した事がある。

立雲翁は金持から金を出させて、それをドシドシ貧乏壯士に分配する。それに感動して誰も彼も悉く乾分になる。大言壯語ばかりでは人は動かない。金錢ばかりでも勿論人は動かない。博愛の精

神が籠つた金錢が物を言ふのである。今日の富豪達に、立雲翁の爪の垢でもせんじて飲したら、どの位世の中が明るくなり、穩かになり、快くなるか知れない。

一諾千金の人

荒川 五郎

世間には、その約諾を實行し得るか否かも考へずして、やす受合ひをする人が多い。やす受合ひをして之を實行しないのは、一の罪惡であるが、私は自分にとつてやす受合ひをする人は、やすつぽい人で、自ら自分をやすく即ち低劣にする者であると思ひ、常に決してやす受合ひをしてはならぬと心がけて居ます。

この點に於て立雲先生は謂はゆる一諾千金の概があることは、私が二三度先生に接したときに感じたことである。

先生が古武士的で東洋豪傑流の人であるとは誰人も認める所であらうが、私は私が常に心がけて居る此點に於て先生の行動用意に最も深く敬服して居ます。

今や古武士の概ある人が甚だ乏しい。それだけ世相の墮落を物語るものか、先生の如き國士志士の

二六八
典型として青年を感化し、將來第二第三第百第千の立雲を世に出し、此の氣慨！ 東洋豪傑の人格を永久に生かしたいものと常に切望して止みません。

頭山翁の言葉

平山周

頭山翁の直話は近來の快文字である、明治政史を穿つ不朽の文献であると云ふ評もあるが、全くその通りであると思ふ。しかし、薄田斬雲君としては随分大骨折りであつたらう、薄田君の苦心は我々多年翁に親近した者でなければ、鳥渡分らぬで有らう。

頭山翁は多くの場合、黙々として居られるが、一度口をきくと、その一言一句にも、多くの深い意味が含まれて居て、其處に非常な教訓がある、然かも翁の言葉が平々淡淡である場合、普通人はそれを何んの氣もなく聞き流したり、或はその意味が分からなかつたり、或はその意味を反對に考へたりする場合がある、それは我々なども何んの氣もなく翁の言葉を聞き、一三日後に初めてその意味が分かる云ふ場合も往々にあるのである。

親友の末永狼嘯月君が、曾つて翁に随伴して何處かの神社に参詣した事があつた、それで宿に戻つ

て來た處が、間もなく神主から供物が届いて來た。それを末永君は何んの氣もなしに、女中にその供物を彼方へ持つて行けと命じた。

それを見て居られた頭山翁は暫くして、

「末永、君のお父サンは神主ではなかつたかネ」と言はれた、一言漢々たるものであつた。

何んでも末永君の父君は福岡の住吉神社の神主であり、歌人としても福岡では有名の人であつた様である。

それで頭山翁の末永君に云はれた言葉は、要するに神前に供へた供物は、少々なりとも参詣者間に分配して大切にして持ち歸るものである、然るに神主を父とする者が、その大切な供物を粗末に取り扱ふとは何う云ふ量見であるかと云ふ意味であつたのである。

頭山翁は如何なる場合に於ても他人の失策なり失敗なりに對して、決して正面から叱責せられると云ふ事はない、翁は此の點は非常に遠慮深い程で、決して當人に對して直接小言も云はれたと云ふ事は一度もないのである。

それで我々が若し末永君に對して、「オイ末永、君のお父サンは神主ではなかつたかネ」と云つた處で、末永君は無頓着に聞き流したで有らう、翁に恚う云はれた時は、實は末永君も未だ何んの氣もつ

かなかつた、シカシ翁の言葉であるから多少は考へた、それで翌日になつて初めて翁の言葉がハツキリと分つた、それで流石の末永君も此の時は非常に閉口して、狼嘯月一代の失敗であつたと云つて、その當座、此の事を我々に語つたものである。

末永君は苦笑するで有らうが、一例を云へば翁の言葉は此の様なものであつて、その一言一句に深い意味を含んで居るのであるから、餘程頭の好い人間か、餘程考へて見た後でなければ、翁の言葉の意味が充分に分らぬ場合が多いのである。

頭山翁の直話を鳥渡讀んで見ると、何んの苦勞もなしにスラ／＼と書いた様に思はるゝのであるが、しかし薄田君の努力は、恐らく尋常一様のものでは無かつたらう。それで此の大文字に精進された薄田君に對して、私はその成功を祝福すると同時に、その苦心に同情を表するものである。

富貴權勢雲の如き翁

石田 秀人

「青年が世の中の流行を氣にするやうぢやつたらん。若い者は世の風汐に逆行する勇氣が必要ぢや。魚でも激流に逆らひ、怒濤と闘つたやつは、骨が堅くて本當の味がする。世の中の改革も、激流怒濤

に鍛錬された、骨ツ節の硬い青年でなけりや、大事を斷行することが出来ぬ。俺は若い時力が強くて、薪割りをしても、米搗きをやつても、二人前の仕事をしつたから、行く／＼は米搗にでもなつて、喰つて行かうかと思つてゐた位ぢや。それで喰ふ事など一向考へたこともなかつた。これは俺ばかりぢやなかつた。その時分の若い奴は皆んなさうぢやつた。西郷・南洲の言葉に、「命も要らぬ、名も要らぬ、金も要らぬ——人間は始末に困る、がこの始末に困る、人間でなけりや、國家の大事は共に語れん」といつたが、こんな考への奴が今時何人あるぢやらふかね。南洲も死んでからもう五十年——世の中も變つたもんぢや」。

頭山立雲翁は少年時代から、普通の仲間とはその性行を異にし、最初は手におへぬ亂暴者だつたさうである。しかし何に感じたか、十四五歳の頃から俄かに日常の態度が變り、別して兩親に仕へて教養を盡したさうである。「俺は二十四歳の時、獄中に在つて母の死に逢ふた」と言ふ時には、何となくシンミリさせられる。それが鬼をもひしぎさうな翁山翁だけに、一入他を感動させるものがある。

その翁の生ひ立ちを見た福岡市西新町の屋敷の一隅に、今も尙ほ二本の大楠が聳えてゐる。翁は

少年の時自らその若木を手植えて、さながら生ける人に物いふが如くに「汝楠よ、靈あらば聴け、若し我が前途大いに爲すあらば汝も亦榮えよ、汝が天空に其の枝を擴げ、大地に其根を張つて、他日大樹となるの日はあらば、我が運命も亦汝と共に榮えん。我が爲に汝の生命を愛護せよ——」としかもこの楠樹今や六十年の風霜を閱し、大空に向つてその雄大なる軀幹を伸ばし、シン／＼と枝を繁茂せしめてゐる。そして翁の福岡に歸省するや、先づこの大樹の下に至つて感慨無量、暫し老樹を愛撫した後、初めて父母の墓を展ずるといふことだ。現に今年初夏も、翁の福岡に歸省するや、その大楠の下で記念撮影をして居られる。

忠臣は孝子の門に出づるといふが、家庭に於ける頭山翁は實に孝子である。翁の長兄筒井龜喜翁は今も猶ほ生存してゐるが、翁の筒井翁に對する態度の慇懃にして親切なる、他の見る目も羨ましいといふことである。蓋し頭山翁は其長兄に對する時、往年の楠の木を手植ゑした當時の少年の心に歸するであらう。

翁と死んだ野田大塊翁とは、その經路こそ全然異なれ、同郷の誼みを以て多年の交情があつた。曾

て兩翁が東京に出づるや、當時一日相會ふて戯れに語つて曰く「將來金力と腕力とは何れが天下を取るか？」と。大塊先づ一考して曰く「金力の世の中ぢやよ」と。次で立雲翁曰く「いや、昔から腕力の強い奴が天下を取つとる、やつぱし腕力の強い奴ぢやネ」と。互に相譲らずして遂に他日を約す矣。——この語亦以て兩翁の片影を偲ぶに足るものあらん乎。

學識、技藝、才能、手腕、若くは勳等、爵位、財力、黨閥、さうしたものが現代に於ける人物測定の尺度となつてゐる。然らば翁は其何れに依つて重きをなしてゐるかといへばその何れでもない。即ち純然たる天下の浪人ではないか!?

しかもこの桁外れの翁が、一體何に依つて彼ほど迄に人心を惹き付けるのであらうか。譬へば無言の大樹、無心の巨石も、人の心を惹き付ける偉大なる力を有してゐるものである。

翁に對する人心の働きは、或はさうした種類のものではなからう乎。しかしそれだけではまだ此問題には解決されない。何故に大樹巨石が人心を惹き付けるのか、そして頭山翁の何處にさうした偉大さがあるのか。そこまで立入つて考へて見る必要がある。實に翁の存在こそは餘りに智巧に馳する現代人に對する偉大なる謎であり、深刻なる諷刺であるが、私はその謎を解くに、翁が名利を求めざる「一

切無私の人」に歸りたい。

たしか一昨年の初夏、世田ヶ谷の國士館に於て催された翁の七十三回 誕辰祝賀會には、朝野各方面の人士が千人以上も集つた。洵に驚くべきことゝいはなければならぬ。これは果して何が爲であつたらうか？ 翁が國事に奔走した真相を知つてゐる者は、其内何人あるか知れない。従つて多くの人々に取つては翁の何處がエライのかさへ判らないであらう。しかし唯何となくエライといふ漠然たる人氣——崇拜心が、翁の周圍をして斯くあらしめるのである。

◇
「群峰を威壓して立つとる富士山を見ると、外の山はまるで子供ぢや。何といつても、あの山は日本一の靈山ぢやね」と嘯くその言葉の中にも、翁の人格と一種の教訓とが含まれてゐるやうだ。
「立雲」といふ雅號は雲の上に立つといふことださうな。世の富貴權勢を浮雲の如くに考へ、超然として其上に立つ處、是れ立雲頭山滿翁の眞面目である。

鬼想遠大、臨機直斷

石 鎮 衡

私は朝鮮の隅に居る一微人にして、立雲先生に對する見聞が極めて狭いのであります。併し私は一回程先生に御目に掛つたことがあります。一回は明治二十八年頃であつて、今一回は昭和三年の秋であります。私が故寺尾博士の御宅に書生をして居りました時、恩師故寺尾博士の御使をして立雲先生の御宅に御手紙を持つて往つたと思ひますが、其の時に立雲先生は朝鮮の書生たる私の耳に残つてゐる一言を申されました。「寺尾は近頃何をしとるか」と云ふ御言葉でありました。其の時私たる朝鮮書生の感想としては頭山様如何にえらいとて其の家から來た書生に對し、其の師たる寺尾先生に餘りに敬意を拂はぬと云ふ考を持つたことがあります、其れからはずつと御逢ひする機會がなかつたのであります。

今一回は 今上陛下御即位式の際、京都に參ります時、東郷元帥と頭山立雲先生の御顔を拜し度、心竊に喜んで往つたのであります。東郷元帥には曾て一面識もなく、立雲先生には明治二十八年頃、恩師寺尾博士の御使ひをして一度御目に掛りましたが、これは遠の昔のことであつて初度同様である

ことは勿論であります。併し此御二方共に本望を遂げられて、御顔を拜し得たのは感謝に堪えません。其の時立雲先生に御目に掛つたのは、他ではない、立雲先生が他の有志と御計ひになつて、故王仁神社を大阪府下の墓地に建立せらるゝことを天下に公表せられたことがあるので、其のことに付いて御目に掛つたことがあります。御目に掛つて王仁神社建立精神の結構なることを申述べたら「其れは今になつて遅いのであります」と申されました。小なる私の立雲先生に對する感想は一言にして之れを蔽へば剛直無飾、鬼想遠大、臨機直斷、頑強如石。

闇夜の 一燈

荒井金造

拜復、頭山先生の人格に就いて、今更ら私共末輩が兎や角と、申す筋合でありませぬが、現今の如く、不まじめで熱誠に乏しい、不安な社會相に鑑み、先生の如き大偉人の居常に於ける真相を、貴誌に連載せらるゝことは、最も時宜に適し、謂ゆる闇夜の 一燈で、之に依りて誨へらるゝこと多かるべしと信じます。

實は今以て私は、先生の音容に接する機會を得ないのを、深く残念に思つて居りますが、世の中に

は、同様の人々も、澤山あるだらうと思ひます此等の渴仰者は、此の御計劃に依り、間接に宿望が達せられたことゝもなりません。茲に拜答旁々御計劃に與る諸賢に對し、感謝並に敬意を表します。

頭山滿翁の人格

犬養毅

頭山滿翁は私の最も親愛且つ畏敬する數十年來の友人である。翁は我國民中卓越傑出せる士である。而も氏は無位無官で隱然一勢力を成し、國家の危急の大事に直面せる時は必ず身を挺して奔走して來たのである。

頭山翁は一言にして盡せば熱心なる勤王家であり熱烈なる愛國者である事は毎朝必ず明治神宮に參拜する行動に徴しても明かである。彼の隱然たる勢力は其精神的感化及或る危機に臨んで國家に奉ぜんとする決斷心に依るのである。頭山翁の偉大さは人の容易に爲し得ぬ事を爲し遂げるその力に在る。翁は獅子の口にも鐵拳を突つ込みかねない熱血漢である。何か大問題の爲めには水火も敢へて辭せぬ彼である。正義の爲には假令不可能な事でも其の要請を引受ける翁である。我國に亡命せる印度の愛國者ボース氏の生命を擁護する爲に取つた態度は翁の人間味を遺憾なく發揮したものと云ふことが

出来る。あの當時翁を指いて他にボース氏の生命を救助し得た人はなかつたであらう。ボース氏を庇護せんと決心した時頭山翁は自分は最早老齡故此の仕事遂行する爲に喜んで死すると獨語したのである。

翁は其門下と圖り八年の間官權の追究からボース氏を庇護することに成功した。更に顯著な好例としては支那革命の爲め我國に亡命した孫逸仙氏との關係に就て見れば最も明かである。孫氏は頭山氏を訪れ翁の救助を求めた。當時山本内閣は支那官憲の捕縛せんと懸命になつてゐる此の大亡命者の處置に關して去就に迷つて居たのである。

翁は同志と共に神戸に赴き孫氏を上陸せしむるに付ては實に死を以て之に當つたのである。

正義の爲めに常に身命を賭す覺悟があればこそ此の難事に成功したのである。翁は全く公平無私で殊に金錢等は翁の目からは何物でもない。此物質に恬淡な點に於ては西郷翁に酷似して居る。頭山翁にして薩摩にあつたならば西郷翁と同じく郷黨人士の尊敬を受けたことであらう、翁は誠に吾國の國寶である。

修養の人頭山滿翁

安達謙藏

頭山滿翁は私は青年時代より能く知つて居る。私の師事して居つた佐々友房先生とは親友の間柄であつた。私は佐々友房先生を通して知つたのである。吾々の先輩の佐々先生は、熊本に於て國權黨を作り、頭山翁は福岡に於て玄洋社を組織し、意氣を尊び青年を養成し、以て他日雄飛の素地を作つた。私は先輩として翁を最も敬慕して居る。翁は人と成り頗る沈黙寡言であるが、能く對話の内に論語にある言葉を引用せらるゝ事がある。其處に私は翁の修養に心を致す處、修養の基本此處にありと思ふ。論語に對して造詣深く、論語を引用して人に訓誡する人の内には、先頃永眠せられた澁澤翁とこの頭山翁の二人を見出すであらう。此點に關しては、特に敬意を表して居る。皇室中心主義と國權擴張と二つの點は、翁の腦天に流れて居つたのである。故に明治廿年前後に於ける大隈、井上の條約改正時の如きは、翁は敢然と立つて同志を糾合し、條約改正に反對した。此時翁の門弟の來島恒喜は大隈氏に爆彈を投じた。翁は支那の革命運動に同情し、孫文には特に親交があつた。今の支那の大立物蔣介石は、日本に來朝の際、態々翁の宅に泊まらされた程である。中華民國の人々は翁を非常に崇拜し

て居る。翁も又中華民國の人を能く理解して居る。

要するに、翁は皇室中心主義、國權擴張の權化とも云ふべき大なる代表者である。色々政局が變化して、吾々の先輩同志が死亡凋落して、一人翁が生存して居らるゝと云ふ事は、群生雜木の間に、尊者と一人天に聳えて居るかの感がある。

先憂後樂の人

田中義一

天下の憂に先つて憂へ、天下の樂に後れて樂む。古への仁人君子には則ち其の人に乏しからず。而かも其れを今の世に求むるに、寥々として曉天の星に似たり。

我頭山滿翁の如きは斯の絶えて無くして罕に有るの人たるを知る。

翁の國を思ひ世を憂ふるの至情と、其の人に許すに意氣を以てし、一諾常に千金より重き情誼とに至つては、數十年一日の如く未だ曾て渝はらず。獨り海内擧げて景仰せざるなきのみならず、隣邦支那の知友亦夙に敬慕せざるなし。

翁の薰陶を受けたる及門の士に至つては、萬を以て算すべしと聞く、豈盛ならずや。人或は筑の南

洲を以て翁に擬するもの、固とに其れ宜なりと謂ふ可し。

翁今や齡古稀を踰ゆること正に三歲、矍鑠として健かなること壯者を凌ぎ、風姿卓然として神仙の如く、而かも國に報ゆるの丹心、人に許すの意氣老いて愈々旺盛なり。是れ寡に人中の寶、國士の鑑たり。其益々延年長壽の慶を重ね、八十を経て百歲に至り、永く邦家人の砥柱たるを祈るは、豈啻に私情に於てのみならむや。洵に天下の公に於て切に之を祈らずむばあらず。

方今、古へ仁人君子の遺風漸く其の傳を失ふ。翁其れ自重自愛せられよ。

國家の重寶を私する勿れ

江口定條

私は、永年の間、幼少の時から頭山先生の事は知つてゐるので御座います。私の尊敬してゐた杉浦寺尾兩先生から、數々先生の事を聞きまして、深く敬慕の念を抱いて居りました。それで何うにかして先生に拜顔を得たいものと念じて居つたので御座います。此の願が叶ひまして、今日では先生の御出席になる會合には、私も其席に連りまして、先生の御高風に接するのを無上の光榮と存じて居る様な次第で御座います。

學は其の人に近づきより便なるはないと、申しますので、私は頭山先生の様な偉大なる人格者に親灸して其の感化を受くる事程効果のある學問は他にないと考へて居ります。唯だ私の恐懼に堪へざる事は、已れ獨り頭山先生の徳澤に霑はんとするの念に驅られて、却て先生に累を及ぼす様な事があつては眞に相濟まぬ次第と、自ら慎み且つ戒めてゐるので御座います。之れ宛も國家の重寶を私して已れ獨り傲ぶり且つ誇らんとするが如き一種の冒瀆行爲でありまして、我々共に心すべき事と考へます。狂れ親まんとして却つて其の人を傷くるが如き事あつては、甚だ申譯がないので御座います。頭山翁の徳を慕ふ者は此點を能く考へて、決して翁に煩累をお掛けする事なく、翁をして十分の御靜養を取り、益々御健勝にして、此國家多難の際に大いに其志を展べしめん事を心がけなければなりません。

天下の債權者頭山翁

望月圭介

私は今日人に對して何を求むるかと言ふならば、それは頼み甲斐ある、信用ある人たる事を望むのであります。我が頭山先生は、恰度此の二つを兼ね備へられて居るのであります。次に先生の偉い事

は、取るべき物を取らずにおられると言ふ事でありまして。それは、若し先生が天下を取らうとせらるれば決して取れない事はないのであります。

然るに先生は之れを取らうとせられないのであります。その他多く學ぶ處はありますが、其の中でも學ぶべきは、先生が御自分の恩を賣られない事でありまして。何となれば先生は天下の債權者であります。我が國家の幾多の危機に際して、時の宰相が先生に負ふ處は多々あると思ひます。と云ふのは先生は常に天下多事の時は、進んで御自分の命を投げ出されたのであります。それにも拘はらず、先生は其の債權の取り立てをなさらないのであります。此の行爲こそは、眞に男子の行動ではないかと思ふのであります。現今思想上又は世相上憂ふべき事が多々あるけれども、其の一方に嚴として先生の如き偉人が生存されて居る事は、誠に心丈夫と言ひ度いのであります。此の意味に於て私は先生の百歳の誕辰祝賀會も迎へたいと願ふ者であります。實に先生が百歳までも生存されると云ふ事は、即ち國家の爲めであり國民全體の爲めであつて、決して頭山先生一個人の爲でないのであります。私は日本の爲に斯の如き國寶の長壽を切に祈つて止まない次第であります。

金も名も命も要らぬ人

床次竹二郎

私は、御覽の通り相當の年輩でありまして、よく先生の御經歷なり、御人格なりを承知して居るべきであります。不幸にして、過去に於て先生に御目にかゝる機會少く、僅かに最近數年間に於て御目にかゝる事を得たのであります。先生にお目にかゝる毎に私は「金も名譽も命も要らぬ人程抜ひにくいものはない」と言ふ言葉を思ひ出すのであります。成程先生は何等の官を持たれぬ。先生は金を持たれぬ。然し食ふには困られぬ。先生は命は要られぬのである。然るにその命の要られぬ先生に、命を獻げると云ふ人が數多あるのであります。之れ實に先生の偉大な點であります。先生の如き他人の意の儘にならぬ人があつて、始めて天下に私意横暴を許さぬ大磐石の基礎が強固となるのであります。現今我が國の有様を見るに、「これでは……」と思はれる事は日々に吾等の耳目に觸れるのであります。此の時に當つて、他の私意を容赦せぬ人が一人でも居ると云ふ事は、我國の爲めに最上の悦びであります。頭山先生は實に此の扱ひにくい人でありまして、かゝる人の居られる事は、我々としてのみならず、我日本帝國の爲めに大いに慶賀す可き事でありまして、先生が健在して居られる事は、私一

個に取つてのみならず、我國に取つて幸福な事で御座います。何うか先生の仁壽この上にも長かれかしと衷心より祈つて止まぬ次第あります。

空に聳ゆる老松

徳富猪一郎

私が頭山先生を目前に見て、御聲咳に接したのは随分古い事で、私が十八九歳、先生が二十二三歳の時で御座いました。それ以來今日に至る、實に一夢の如き感さへあるのであります。然し乍ら其の間幾多の變遷があつて、私が変わり得ぬのみならず、先生と私の働く方面を異にして來たのであります。その爲めに私は、まさか頭山先生其の人から、鐵拳を頂戴する事はないにしても、其の部下から撲られる位の危険は有つたかも知れませぬ。然し幸ひに撲られた事はなかつたのであります。それが私がかく年をとるやうになりました、始めて先生と御會ひする事を得たのであります。そうしてお互に吾々の考へる事に就いて御話をする事になつたのであります。然し先生は無口でお出でになる。今迄餘り口を開かれた事はない。所謂先生のは沈黙の雄辯でありました。然し私には先生が如何に黙して居られても今何を思ひ、考へて居られるかと云ふ事は、何時もよく承知出來たので御座います。而

して先生がかく御壯健で國家の至寶として存在せらるゝ事を日本國民全體の爲めに幸とする次第で御座います。私は今日改めて先生に就いて特に申述ぶる要はないので御座います。天下公認の先生の評價は、確乎として動きがないので御座います。先生は實に我國に於て極めて類の少ない人で御座います。世に一藝一能の士を言へば、先生以上の人が居られる。然し先生は諸君の有する凡てのものを持つて居られる。之れは日本の爲に誇る可き事でありませう。老子は樸、雖小天下莫敢臣と言ふてゐるが、此れは恰も我が先生の爲めに書かれた様なものであります。世の中には、學者、金持、文章家等數多くあります。然し乍ら其れ等の人々は其等を以て世の爲に盡して居られる。然し先生は樸である。先生は常にヂツとして居られ、人と競争をされる様な事はない。従つて天下も又先生に向つて競争する者がないのであります。誠に先生は天上天下獨立獨歩の人であります。私共にとつて、先生こそは日本固有の精神を見る事の出来る處の生ける典型であります。皆様が先生のお話を特別に聞く必要はないのであります。若し皆様が先生の心を以て心とすれば、之れ即ち先生が皆さんに與へられる教訓であります。私は此の際多言を要しない。敢て先生の爲のみと云はない、唯だ吾等後輩の爲めに、先生は百歳の命を保たれ、以て上は皇室を守り、下は吾等を導いて戴き度いのであります。かの庭園を見ますと其處には、泉水、石燈籠、庭木など凡てのものが必要であります。然し、かゝる庭園に一もと

の老松が高く中空に聳へて居るのを見れば、これこそ庭の庭たる所以を爲す處の根本であると言ふ事が明かに表象されるのであります。斯く述べてきますれば先生は實に老いたる松の樹で御座います。何うぞ、此の老松が今後千年萬年の後迄も依然として聳へて朽ちざらん事を希ふ次第であります。

(編者申す。右内田良平氏より、荒井金造氏に至る感想に就ては細井肇氏を煩はし、又、犬養毅氏より徳富蘇峰氏に至る感想に就ては、ジャパントイムス社の山本清太郎氏を煩はす事多かつたので、茲に兩氏に謝意を表す)

雙柿舎から常盤松へ

(逍遙翁から立雲翁へ)

薄田 斬雲

錦繪から名刀へ

坪内逍遙翁の書齋に、錦繪、人形、假面などの不思議な夢の世界の姿を久しく見馴れた私は、近來、頭山立雲翁の床の間に、兼定作、長藩桂小五郎佩用の三尺一寸五分の大業物以下、大小長短それぞれ、光鋳夏寒き名刀の數々を抜いて見る機會を得た。

名刀と錦繪。之れが、兩翁の趣味と其の活動方面の對照になるのである。一方は「劍難もぐり」と稱せられ、一方は「芝居が生命」と言はるゝ。一方は極端にきつい人、力の人。一方は極端に濶厚な人、文藝の人。逍遙翁が良寛の書を床の間に掛けて居るに對して、立雲翁は「雲從龍」の南洲の額を掲げて居る。此の南洲は、眞物かと誰れしも首をひねるのであるが、立雲翁微笑して、

「何時か、野田が、之を南洲かなと頻りと眺め居つた。頭山が贗物の南洲を掲げてはいかんと心配して呉れたのぢやらう。私はそんな事は構はん、唯だ南洲といふあの字があればよいのぢや」
南洲が頭の上に居るといふ事が翁の満足なのである。

曲線と直線と

其の立雲翁は、灘谷の常盤松に住まはれ、逍遙翁は此頃はすつと熱海水口村の双柿舎に居らるゝ。柿と松、私の頭脳の中では、是れが兩翁の表象となつて居る。双柿舎の庭には、幾百年かたつた柿の木が二本、仁王のやうにはどかつて居る。其間から遙かに熱海の見下ろすのである。常盤松の頭山翁の寓には、近く垣根の外に松林がある。草茫々たる空地の一隅に、人手のかゝらぬ松であるが、あれがあゝの儘成長して、三四百年も経つたら、亭々として天を摩する威風は、頭山翁の姿を表象したものであるであらう。頭山翁は、野生の松と見立てられてふさはしいやうに思ふ。花は櫻木、葉は松で、松は日本を代表した木である事は、之を世界の風景比較から考へて間違ひないのである。其の松の木に、日本國士を代表した頭山翁を配する事も當を得て居るやうに思ふ。細かく曲がりくねつて、巧致を極めた柿の枝ぶりの柔かい感じ、其の天鷲絨のやうな、丸みのある

滑らかな、つや／＼しい葉。そこには曲線美の軟かさが行き亘つて居る。之と對照して、松の樹の剛い幹、荒らくれた枝、針のやうな鋭い葉、すべてが、直線的な、硬いものである。此の硬軟兩面の差はやがて、立雲、逍遙兩翁の差である。私が多少でも、兩翁に親近した氣持から言へば、兩翁は現代に於て、極端に相反した絶好對照の存在でありながら、而かも人として見る多くの點が兩翁に共通で、其處に同じ心靈の兩面を見る氣がするのである。

未見の知己?

いつか、逍遙翁訪問の折り、頭山翁の事を「いかさま元龜天正時代に現はれたら大きな仕事を残す人であつたらう」といふ意味の事を逍遙翁が語られた事がある。家康、秀吉、義時、實朝、且元などを主人公にした劇作のある逍遙翁に、當代の怪物と評せられて、宰相を叱り付けるといふ英傑頭山翁の人物が、胸裏に往來しない筈はないのである。大隈侯とも一度會見して、對支、對歐米の經綸を語り、支那に關して、頭山翁の意見を容れて、大いにやると口約し、「次ぎの會見には、一夕これをやらう」と、大隈侯が手で碁石を取る形をして哄笑して別れたと言はるゝ頭山翁、かくして大隈侯も其の何億といふ金を、戦争に棄てたと思つて平時の外交費に使用すべき頭山翁のけた違ひに大きい忠言に

は一寸度膽を抜かれて、其儘になつたと言はるゝ頭山翁に對して、逍遙翁とても其の心事を推測して見た事はなかつたとは言へまいと思ふ。つまり逍遙翁は、英雄豪傑の心事を忖度もし、其心胸に同化する人である。唯だ、此點、頭山翁の方に、逍遙翁の細密な文藝觀が通じて居ない憾みがあるかとも思はれる。由來文藝といふ事は、哲學若くは宗教よりも解しにくひデリケートの問題であつて、稀有の豪傑であり、實行家であり、謀反骨のある頭山翁には、此の細かい問題が、解し得られないとして、それは更に無理のない事であらうと思ふ。と言つて、頭山翁が、無骨にして、不粹であるといふのではない。待合濱の家に二年も居つたといふ事は、女の道にかけて恐らく日本一であらう——といふ意味は、大名や富豪が、吉原を買切つた話と異つて、一文なしの浪人が一流の待合に二年居つたといふ奇蹟を考へて見ると解る。大通人、寧ろ大達人でなくては、逆も出来る藝でない。故に、頭山翁に文藝家としての坪内逍遙翁が能く解せられないとしても、それは、經濟問題が好く解せられない、法律、醫學が能く解せられないと同じ意味で、之は其の専門の學問をしなかつた結果である。

相通する趣味の一點

併し、立雲翁とても、自分とは正反對の舞臺に立つて居る處の逍遙翁が、其方面に於ける現今第一

位の人であるといふ事は、十分に理解されて居る事と思ふ。大局に通じ、達人の眼識を具へ居る立雲翁に夫れ位の理解がない筈はないのである。唯だ翁は自分の修得しなかつた文藝上の事を物語らない丈で、趣味として江戸藝術の一端たる、端唄、都々逸、義太夫、常盤津などの文句は、濱の家遊藝學校見學二年間に耳にたこのよる程聽いて、自ら口吟みも立派に出来るのである。此點、兩翁の間には相通する趣味の一點があるので、若し兩翁一座に會合したとしたり、話はそんな方面から解ぐれて豫想外な面白い場面が展開されるかとも思はれるのである。

兩翁何れが人情通であるかは、一寸團扇を揚げるに苦しむ。逍遙翁は萬卷の書に依つて鍛へられた人情通であり、立雲翁は、多くの體驗に依つて化せられた人情通である。此の體驗は天の賜であつて、逍遙翁とても是れ程の天恵を缺いて居る。立雲翁が、好く他の死力を得て居るのは、此の體驗から來た事であつて、之は當代日本人中誰人も寄り付けられない、えらい點である。己れを無きものにして人を助け救ふといふ此の意氣の報酬である。

「石塔が口利いて物を食ひよると俺れは思つて居る」と立雲翁は吐き棄てる語調で語つた。

「人相見が、私の事を『劍難もぐり』と言つた」とも語つた。

「俺れなんか、能くも斯うして生きて居る、不思議な位ぢや。モウ行詰ると思ふと、又開ける、疾く

に餓死でもして居るべき筈ぢやつた」と述懐される。

迎も眞似らるべき人ではない。萬巻の書を読んで、漢籍から、草双紙類、西洋の小説文學迄あさり盡くして逍遙翁の如き通人達人になる事は、是亦、大なる天分がなくては出来る事でないのであるが、併し、習ふべき學ぶべき筋道丈けは見えて居る。無一文で、今から、何處ぞの待合へ二年も寝轉んで居やうたつて筋の明く話でない。此の意味に於て、一は學んで大成せる人、一は生れながらに吞舟の魚といふ比較も出来る。

私は最近に、博文館物活版本の白縫物語を読んだ。之は、幼少の折り、郷里で、母から白縫姫がどうした斯うした、又瀧夜叉姫が山中で仙人に逢つてどうした斯うしたなど、斷片的に聞かされた事が、今も、神秘不可思議な印象として残つて居るので、先日、早稻田の演劇博文館内の書庫で、繪入六十冊かの白縫物語といふ草双紙をちらと見たのが、急になつかしい子供心になつて、博文館物で讀んで見たのである。處が、此本は、大冊であるばかりでなく、話の筋が四ツも五ツも有つて、中心把持力の稀薄な事、迎も興味を繋いで呉れない。私は我慢して、やがては飛び／＼に、約三分の一ばかり讀んだ時、根氣が盡きて投げ出して了つたのである。數日後、逍遙翁に面談の折り、其事を言ひ出すと、逍遙翁は、

「私は、白縫を通して六遍讀んだ」と語られた。

恐れ入るべき根氣の好い事で、私も中學時代なら、讀めたのかとも思ふて見たが、漢楚、三國誌、八犬傳など、やつと飛び／＼に一通讀した位に過ぎない私に、此の散漫極まる白縫が二遍とは讀める事でなかつたらう。何んでも、逍遙翁の郷里名古屋には大政とかいふ日本有數の大きな貸本屋があつて、逍遙翁は、東京に出る前に、其店の小説、草双紙類を大抵讀んで居たといふ事で、大學に來てから、御自分の讀んだ小説類の目錄を半紙十枚ばかりに書き付けたのを市島春城翁に示した事があると言ふ。讀みも讀んだり、白縫六遍なら、八丈傳は十遍と來るでもあらう、あれ程の名文美文を綴る素養としては、此の多讀も當然であらう。

共に筆を取る人

之と比して、立雲翁は、少時、多少漢籍は讀まれた事は確からしいが、何れかと言へば、決して讀書の人ではない、著述の人でもない。併し筆を執るに忙殺される人である事は奇とすべきで、其筆は大きな毛筆竹筆で、墨痕淋漓と忽ちにして額物、軸物か雲烟を飛ばし龍蛇を走らすのである。

「來るわ／＼後々と、叶はん」と翁は苦笑しつゝ、次ぎはお代りはと催促して毎朝、七十の手習ひ怠

る事が出来ない様に、唐紙持参の客が立て込むのである。勿論只で書いて貰うのだから、紹介を求めて毎日々々青年老年押かけるのであるが、一方に、書いてやりたくて困る人も澤山居るのであらうが、翁の方は、書きたくなくて困つて居るのである。

斯うなると、意味は違ふが、立雲翁、逍遙翁共に昨今は筆の人として生きて居る形では亦一奇と言はざるを得ない。唯だ記憶力の好い事は、立雲翁敢て逍遙翁に劣らぬらしい。

同じ様に毎日筆を揮ふのであるが、一は活版になつて書冊となる、他は額になる幅になる。一は皆んなに讀まれて藏せられ、他は一部の人に珍藏される。前者は一字直ちに千金の値を生ずるが、後者は、直接一厘にもならぬ。其代り、いざ事ある時は立雲翁の書は、崇拜者の熱血と意氣とに化して、彼等は、翁の爲に身を抛つ事を辭しないと叫ぶ。前者は智の廣布となり、後者は力の根原となる。立雲翁の書幅をかけて其の力強い膽氣豪風に化せられる。人格を具體にし其風骨を再現した翁の書は懦夫を起たしむる。

訪客からの耳學問

己に逍遙翁は古今東西萬卷の書を讀破して居るのに、立雲翁は、殆んど書を讀まない。早起きの翁

は五時前には臥床を拂ふのであるが、訪問客は六時半頃から押かける、未だ朝飯前である。後々と訪問客で、

「新聞も讀ませない」と翁は苦笑して居る。

當路顯要の地位に在る人が門前市を爲すの射利者に應接室を埋めらるゝは有り勝ちの事であるが、一介の野人、無位無官、借金外には何物もないと自稱して居る翁の處へこんな多くの客が見えるといふ事は眞に異數とすべきもので、是等の客は、何れも、各自の特殊な知見を翁の前に披露して翁をして居ながらに萬卷の書を讀むの智識を得せしむるのである。翁は、黙つて毎日幾十人の新來再來の客の談を聞いて、或る意味では讀書以上の學問をして居るのである。夫れで、際から際迄、表から裏迄有らゆる事を知るのである。横着、悪徳、非倫、奸佞等の如き材料の談話とても、翁をして彼れを知り己れを知るの明察眼を養はしむるのである。其處には、政界、外交界、實業界の内密談があり、又は、法律もぐり談、戦争談、支那談、歐米談ありとあらゆる話題があらうといふもので、天下、浪人の話題程多岐に亘るものはないのである。新聞雜誌にも現はれない新聞が、盡く立雲翁の耳に入るのである。大隈侯、能く客を迎へて談話學問をしたと似て居る。立雲翁には大隈侯に譲らぬ記憶と、明察と、取捨選擇とあり、又、一を聞いて十を知るの能力がある。深い専門の科學はないとしても、

應用學問の方面、即ち實行の人として、力の人として必要な學問は、立雲翁には決して不足しないのである。思想の人、藝術の人、趣味の人としての逍遙翁の讀書と、此點に、優劣はないのである。是は力の人、彼は才の人、是は勇者、彼は智者として、兩々獨歩の地を占めるのである。

「俺れは無精者ぢや」と立雲翁自白して居る。
「人に話をしてやるのも面倒だから、俺れの事を書くのは、皆な又聞きぢやらう。手紙が來ても返事も書かんのぢや」と言ふ。

返事を書かんで済む様になる迄には、大した度胸と辛抱の時代が経過した事であらう。然もなかつたら、今頃は、手紙の返事丈で日が終へる事であらう。

出來ぬ相談に乗つて呉れる人

こんなに迄他から寄り付かれる立雲翁は何んの徳があるか。それは力の人だからである。何れの時代にも、力の人程頼りになるものはない。多少の無理が利かない様では誰れも來て呉れない。

「出來ぬ相談に乗つて呉れる人」是位難有い人はないのである、生佛様生神様とは之れである。印度人ボース氏を救ふたあの無理押し力、之れが一番好く誰れにでも見える「力の人頭山立雲」の突角

である。力の人、世俗の道理を超越する、百尺竿頭一步を進むる。無機飛行の術に通じた人、翼なくして飛ぶ人、味方につけて難有くあり、敵につけては怖ろしい。其の獅子吼の聲に松方總理は、椅子から飛び上つたといふからには、自ら飛ぶばかりでなく、人を飛ばす事も出来る偉大なる力を有するのである。

文壇の總元締

「こんな力は逍遙翁になからう」と斯う言はれると、なる程、そんな直接な、陽に現はれる力はないが、併し逍遙翁の力は陰性である。辛抱根氣の力は敢て何人にも譲らない事であらう。其の道による力は翁に在つて他の追隨を許さぬ偉大なるものである。第一に逍遙翁は文壇に於ける評論創作兩刀使ひである、そして多く讀み、多く書き、讀み書き共に速い事は大なる力の發顯である。蝕ばんだ果物の様な偏した天才は珍らしくもないが、翁の如き、博く、深く、細かく密なる才は少ない。之れこそは、眞の大才である。此の大才に依つて、翁は文壇の總元締めたる地位に立つて居る。殊にも其の劇壇に對する作家としての優越な立場は、全然類を絶つて居る。

立雲翁の机上

等しく、立雲翁は、在野志士の總元締めである。日本にのみ存する浪人道の本尊である。今日、右傾派に屬すと見なされる、顔觸れにして常盤松の立雲翁の床の間に横へられ、或は立てかけられて居る。数口の刀劍に憧れの目を注がぬ者はなからう。翁は、二階八疊の座敷に、凡ての訪客を迎へて、公平に、平等に坐蒲團と一杯のお茶を供して喜怒哀樂色に現はれざる顔を客に示して居る。翁の直前には久留米竹細工の大机が据へられて、其上には、書冊、雑誌、新聞、來信書、印刷物など、亂雑に堆高く積まれ、其間に、翁の眼鏡が三種混在して、兎もすれば、

「あちらの眼鏡はどうした、モーツの方が何處かにないか」と、婢をして眼鏡探しに困ぜしむるのである。此の室は、所謂應接室ではなくして、頭山家の本座敷であるので、此室に入つて、坐に着く者は、先づ此の机上の雜然たる積重ねに度膽を抜かれるのである。併し二度三度、四度五度十度二十度と此室に迎へらるゝ客は、やがて物臭さな、自ら稱して「俺れは無精者ぢや」と言つて居る立雲翁が何うして此の机上を整理してよいかを知らずに、其の亂雑さに困り抜いて居る事を看取するであらう。其處には、何かの依頼者が置いて行つた印刷物があり、一寸目を通して置きたいと思ふパンフレット

があり、何か記念の小品があり、或は念の爲めの書付けやうのものがあり、來訪者の名刺があり、偶には返信を認めねばならぬ種類の書状があり、寫真があり、之を何う始末して順序が宜しいか、全く當惑せざるを得ないのである。只だ一回の訪客は、之を態とらしい散亂と見るであらう、天下の宰相級以上の大豪傑と目せらるゝ巨人が、之しきの物を整理するには、一言秘書役に命じたら始末が付くとも思ふであらうが、稅務吏に對して、

「俺れは、借金で生活して居る」と答へたと言はるゝ翁には、そんな二六時中、身の廻りを世話する秘書などはないのである。一日く溜つた机上は、十日二十日の後には、何處からも整理の手の付けやうがなく、其儘そつとして置く以外に、机上雜居物の所在を翁の記憶に残して置く方法が立たないものらしく見える。

整頓と無頓着と

翻つて之を逍遙翁の住宅、居室に見ると、第一に、今度熱海の双柿舎庭園に建てられた、逍遙書屋の一糸亂れぬ整頓ぶりは、翁自らの藝術趣味を建造物といふ形に現はしたもので、之は全部翁自らの意匠になり、唯だ、翁の意志を受けた建築技師の手を借りたに過ぎないのである。

此の逍遙書屋は、逍遙翁一個の圖書室で、一寸した調べは、東京へ出て來なくとも、其處で間に合ふ丈けの書籍を備へたものであるが、同時に、其内に三疊の書齋を設けてあり、窓の附け具合、棚の取りやう、凡て巧妙を極めたもので、外觀は二重の塔である。贅を盡くした阿呆室の例は他に見らるゝでもあらうが、こんな斷崖の上の僅かの地を利用して、小じんまりと氣持よく造られた書庫兼書齋は、類のないもので、建築物としての國寶と見るべきものであらう。かりにも苟くもしいといふ翁の心胸が其處にも現はれて居るのである。此點は、立雲翁と正反對で、立雲翁は、衣食住の事などは念頭にないらしい。自分が生きて凍えず飢えずに居る事が、大なる仕合せで、何を食はうが、何んな家に住まうが、どんな衣服を着せられやうが、そんな事は、問題にもならないらしい。氣儘にして居られさへすれば夫れで宜しいといふ、誠に苦情の少ない氣樂な氣質である。一向無頓着——私が前の方に無遠慮と書いたのは、他から見ての事で、翁自らにしては、それは無頓着といふ事になるものと思ふ——此の無頓着は、大膽で細心で行き届く翁の反面に横はる大なる安息境であつて、此の無頓着な心境こそは、翁をして大成せしめた所以であらうと思ふ。其處からして、翁の寛大、ゆとりが生じ、天空海潤の廣い天地に人を遊ばせて呉れる大度が生ずるのである。副島蒼海伯が、借金で首が廻はらぬ苦勞をして居ると聞いて、一ツ伯の膽を伸ばしてやらうと言つて出かけて、途方もない事ばかり

り言つて、蒼海伯をして、茫洋たる大海に浮んで我を忘るゝの思あらしめたといふのも、此の圖拔けた無頓着の結果であらう。此點を考へると、古今の英豪、翁に比すべきぬらう氣質を有つた者に漢の沛公がある。

沛公色を好んで、まんじに人を侮ると漢楚軍談に書いて居るが、此のまんじは我儘自慢の意味でなく漫然として無頓着で、誰人をも眼中に置かず、人を輕蔑し侮辱するといふよりは、誰人をも屈托なくからかつて、悪意なしにひやかしかけて見るといふ面白味があつた事であらう、終日毒のある惡口ばかり言つて居ては、人心を収めて天下を取る事は出來る筈がないのである。宰相を「貴様が」と呼び、大臣を「其方が」と呼ぶ度膽と無頓着が立雲翁の身上である。

「のう」と立上つて、男客 女客 大勢の來訪者の前で、前を捲くつて、長襦袢のまくれ込んだのをしよつきり直す位の無造作は、失儀と見えずに、却て無邪氣な少兒の如き行動として、悪感を買はずに天真を見るといふ愛嬌になるのである。

御自分が、そんなに無造作無頓着であるから、どんなひどい服装をした者も、其の服装の爲めに、直ちに玄關拂ひを食ふといふ事は滅多に無さそうで、嘗て玄關に汚ない足駄が直されて居た。單にきたないといふよりは、呆れるばかり指形が黒く附いた、能く見る、一高寄宿舎で見る式の、又世田ヶ

谷國士館の寄宿舎で見る式の、一ト月雑巾を當てた事のないと見ゆるそれである。此の足駄の主は、中學を卒業した學生で、浪人の身で翁に書を求めて、之を金に替へる必要に迫られて來たのである。彼れは、大勢の來訪者と同席に、翁に引見されて、寧ろ上手の座を與へられて、おそろしく、ぶつきら棒な語調で自分の同郷の大先輩を罵倒して居た。黙々として聞いて居た立雲翁は、やがて底力のある、低音で、

「獨りで淋しくない者になれ」と教へたのである。

此の學生が辭し去つて翁は徐ろに語つた。

「棒の様な奴ぢや、今時には見ん奴ぢや。あんなに、正しい標準で他の人間を測つたら一人だつて満足な者は居らん事になる」

斯うして他と苟合しない者は、皆んなから嫌やがられて、一人ぼちになる。獨りで淋しくない人間になる丈けの修養が必要なのである。實に此の青年に取つて難有い訓戒を與へたのである。獅子獨往伴侶を求めず、眞直ぐな棒で打つかつて行く時、彼れは孤獨な人となる他はないのである。それを忍び耐へる修養の中に彼れは偉大を來すべき運命にあるのである。こんな處にも、翁の透徹した人間學の微光が閃めいて居る。

放膽と神經質と

モ一ツ考へて見ると、立雲翁の行狀は、生れた儘の人といふ事になるらしい、其の度胸も氣魂も――つまり其の豪傑たる事は學んで得たものたるよりは、生れながらの素質であるらしい。翁の令兄も、翁は生れながらの豪傑であつたと言つて居られた。元來翁の家系には、豪傑肌の人はないといふので、生れながらにして翁は人を呑むの猛氣を有つて居たのである。そこが、翁の或る方面から怪物と呼ばれる、所以で、之は千百年に一人しか出ない非凡人でなければならぬ。

久しく翁に親炙した美和作次郎氏は語る、「頭山翁は、怪物、ばけものさ。何時か、安川敬一郎氏が男爵になつた祝賀會を藩主黒田侯の邸で開いた時、頭山翁の音頭で萬歳を唱へるといふ事になつた。すると、翁は立つて、安川と小さい聲で言ひ、男爵ばかりを大聲に呼んで、萬歳も小さい聲でやつた。離れて居る者には、男爵ばかりが耳立つて聞える。實に皮肉な事になつた。すると、安川敬一郎氏、黙つて居ない。今度は自分が立つて、「靈南坂のばけもの萬歳」と、そのばけもの丈けを、特に大聲に呼んだ。歸途には、此の兩翁、互に抗議を挿込んで大笑して別れた」

どんな鐵鎖でも繋ぎ切れない怪物たる事は幾多の事實が之を證明して居る。

高田半峰翁は其昔、仲町で壯士に襲はれた時、立雲翁は、法廷に喚ばれた「再三警察の奴が来て、どうか一度出廷して呉れといふから行つた。裁判所では、高田を斬り付けた壯士は、私の家に居つた者だといふ事で、私にそれを知らんかといふ。私は知らんと答へても又幾度も同じ事を訊くから、私は、能く彼方へ聞えんのぢやらうと思つて、知らん！と大きな聲で言つた。それで、私は歸つて来た」とは、翁の實談である。當時、玄洋社の壯士が四五十人、翁の番町の家に住たのであるが、翁は濱の家に泊つて、番町の方は、知らなかつた。「誰れが斬つたかそんな事は私は本當に知らなかつた。其の番町の家といふのは、化け物屋敷で、大きな室が、十餘もあつて、其中一ツは何か出るといふので、寝る者が無い、私が寝て見たら、何にも出なかつた」と、翁は眉一ツ動かさず語つた。

福岡へ来た井上馨を來島が斬つて了ふと言つたのを、翁は有めて「ま、生かして置け」と言つた爲に、一刻者の來島は止めたといふ位で、沉んや、斯く大度の翁が、壯士を使喚して、當時、己に讀賣新聞に出入して居ない高田半峰居士を斬らせやうなどいふ吝な考を抱く筈がない。半峰氏自らも當出來なかつたのである。

果ては、來島の大隈爆撃の際とても「來島なる者を知らぬか」といふ警察の訊問に答へて翁は「知つとる處ぢやない、兄弟の様な奴ぢや」と名乗つて、併し、大隈をやつつける事は、私は知らんと、又大喝したのである。警察は、朝から夕方迄翁を抑留したが、繋ぎ通すべき信念を失つて其晩に解放したのである。

更に、印度亡命客事件に至つては、生きて人間が、靈南坂の翁の邸内から消えて了つたといふ怪談で、警察の鐵鎖も之を繋ぎ得なかつたといふに至つて、翁自らをして言はしむれば、國家の體面にかけてやつた事で、政府の力で英國に抗し得なければ、俺には俺のやり方があつた。「あんな好い氣持の事はなかつた」と、翁は今でも快心の笑みを洩らして居らるゝ。

此の怪物は、警察の力を以てして繋ぎ得ないのである。

共に浪人の一生

此の如き大威力は何處から生ずる。

それは、頭山立雲翁は、浪人黨の頭目であるといふ事である。翁自らにしては、何にもそんな頭目を希ひ、頭目を以て任じて居るではなからうが、世間で然ういふやうに仕向けて了つたのである。一生の浪人で、何等かの形に身を定めた例は一度もないのである。世間でいふ處の名譽の地位などいふものには、十分の實力ありながら一度もそれに就かなかつたのである。最初は玄洋社の社長に推薦せられ、次ぎに、國會議員に推薦せられ、次には、政府要路の地位に推薦せられて、皆な之を辭して了つた。斯うして名利を求めず、野心なきの猛者は何時の間にか天下浪人黨の旗頭に立てられて了つたのである。伊太利に於ける浪人黨の旗頭ムツソリニの閱歴や風骨は立雲翁に似た處がある。有り餘る實力を有つて居ながら、取つて宜しいものを取らずに居る丈けに、其の陰然たる勢力は、倍加されるのである。

此點は、逍遙翁にしても似た處がある。あれ丈けの天才を以て早稻田の貧乏學校に一生の心血を注いで、官學の名譽ある地位を見向きもしなかつた事は、其實力を自由に發揮し其の言論文章に何等の羈束を受けずに、怒號する事が出来たのである。お庇で、考證詮索に没頭しなければならぬ様な羽目にも落ちず、從正何位にもならず、心身を藝に遊ばせて高く神仙の境地に入る事が出来たのである。英雄頭を回らせば即ち神仙、立雲翁も逍遙翁も、活動の方面こそ變つて居るが、其心境は略同じ浪人の一生である様に思ふ。帝國大學の文科學長にならずして、却て、世界の大文學者、坪内逍遙博士となつたのである。内閣總理大臣とならずして、却て世界の英雄頭山立雲居士となつたのである。平岡浩太郎氏頭山翁を評して「總理大臣か、巡查以外には勤まらぬ男である」と語つたといふ。器局の大なる點は、南洲以後第一人者であらう。明治の政府を代表した伊藤井上兩氏の如きは、翁の眼中、鼠輩内閣、廟堂に非ずして猫堂に住む者と見られたのである。無官布衣の一野人、大手を振つて、大臣宰相を叱り飛ばして天下を横行した威風は眞に痛快を極めた一生である。

世界の無冠王

同じ事に、逍遙翁とても、其文筆思想の上に於て、天下を横行して他の一指を染めしめなかつた點は、巨人の足跡を見るの思ひあらしむる。先づ小説神髓を世に示して國人未踏の新たなる文運を起し之に乗じて當世書生氣質を著はして、以て理論の後に、具體の見本を示して、天下をして憧若たらし

めたのである。次ぎには、演劇改革の言議を唱へて而して、桐一葉其他の劇作を示し、次ぎに新舞踊論を叫んで後に、浦島、かぐや姫以下の新曲を示し、情育を説いて後、兒童劇を發表し、國民情藻の向上を説いて、上品な遊びを談じて後、熱海ベーズントを發表して居る。又久しく、沙翁論、沒理想論を掲げて後沙翁全集の翻譯あり、其の老練の筆に成る「役の行者」は、歐洲劇壇の中心地に於て外人の手に實演せらるゝに至つて、翁は、布衣の野人、一躍して世界の無冠王となるのである。

立雲翁の活動と逍遙翁の筆戦

立雲翁の氣魄の雄に、精力の強なる事は、誰人も其風采を一見して夫れと察するのであるが、逍遙翁とても、其の讀むと書く上に、雄にして強なる事は驚嘆に値するのである。立雲翁は青年時代に、米を搗く、薪を取る、畑を打つの勞働をしたし、又全國無錢旅行を試みて、着のみ着のまゝ野に伏し山に寝ねる位の事は平氣でやつたのである。嘗て、土佐へ赴く途中一橋の上へ寝たが、袷一枚きりで寒くて眠れなかつた、朝見ると髪へ霜が付いて居つた。草へ寝る、戸板へ寝るといふのは能くやる事ぢや、一番寒いのは梯子へ寝る事ぢや」といふて、翁は笑つて語つた。

逍遙翁の筆の上の活動とても、中々荒つぽいもので、私のお粗末な書き放し原稿を、何千枚といふ

もの、一々筆を入れて眞赤になる迄修正して呉れたものであるが、こんな事は、私ばかりでない、門下と言はるゝ——特に私共と同時代からモ少し後迄の頃の、早稲田出身の連中は、大抵此の驚嘆すべき事實を自分の身に實驗して居る事と思ふ。私共は自分で書いた原稿を自分で讀み返す事すらも面倒で根氣を失ふのに、齒痒くて見て居られぬ様な他の原稿へ逐次目を通して、御自身の氣に入る様に赤インキで直さるゝ逍遙翁の根氣は驚嘆すべきもので、況んや、御自身の原稿などは書き直し、書き加への膏藥貼り、手入れの矢の方向から、框がけなど、能くも斯う迄手が廻るものと感心させられるのである。時には、一日に三百頁の校正をしたとも聞かし、又讀む方にかけても、其の英文藏書の何れも、一讀した證據が、隨所に、鉛筆で注意の書き入れがしてあるし、ほんの氣まぐれに讀むべき雜著とても、其の内容の大體を説明せらるゝ處を以て見れば、買ひ道樂沙汰でなく、買つた英書は必ず一通り目を通して居ると見らるゝので、其の讀む事の迅速なるは一寸企及しがたいのである。私が嘗て早稲田から出版された世界歴史の参考書を知る爲に、或る専門家を訪問した事がある。すると、希臘はグロートを皆な讀まなくてはならず、羅馬はギボンを讀まなくてはならず、英國はヒュームを讀まなくてはならずと言はれて、あんな大冊を皆な讀まう爲には、讀むばかりで一生涯かゝる、之は逆も叶はんと尻込みしたのである。處が、先輩の一人、曰く「そんな説法をする人に逐一讀んで居る者は

ない。目次位を見て、處々、拾ひ讀みで誤魔化しさ」と言つて居た。多く讀破したやうな話も大抵そんな程度であらうか。併し、逍遙翁の場合は、そんな無茶な事はない、参考書と指定さるゝのは大抵自身一讀されたものである。

文學的良心

斯ういふ四通八達の人であるだけに逍遙翁の他に對する注文の難かしい事は驚くべきもので、何等か著述の折りなど、先づ翁の注文注意の諸項を聞いては、恐れ入つて其儘引下る外ない様な氣がするのである。併し、一旦出來た原稿に對しては、滅多に苦情を言はず、多くの場合、自身筆を加へて之を生かすといふ勞を取らるゝのである。私共に取つて、此點は甚だ難有い事で、最初に大ざつばな注文をして、出來た原稿に幾度も、文句を付け、書き直しを命ずる人もあるものだが、是位迷惑な事は、注意と注文は最初に丁寧綿密にして、出來た物へは目を瞑る、そして自身に修正するといふのは、逍遙翁の行き方の様である。私は、之を翁から直接受けた「美德の印象」中一番大きいものと見て居る。

兩翁の愛國慷慨

倫理と道徳と、國民教化とを考慮し、皇室を宗とする神州日本を榮えしめんが爲に盡す頭山翁の誠意は九重の天聽に達して國家の大典に翁が参加すべきの光榮ある御沙汰を蒙つた事は、異例であると言はるゝ。世間では、思想家學者は物知りとなる程、皇室に對する尊崇の觀念が薄らぐものゝ様にいふ。併し虎の門事件の際、逍遙翁が、眞實憂慮慷慨されて、今の青年は、日本國家の發生化育今日に及べる眞髓を攫み得ず、一飛びに外國の型を凡て日本にはめやうとするのは困つたものであると語り、國家皇室存在の意義を彼等に知らしめ、益々此の皇室を中心として大家族的日本國の成長を計る爲には、日本の眞の歴史を彼等に會得せしめなくてはならぬといふ意味からして、學校に於て年代記と、考證を教へる丈けではいかぬ、理窟の說法でなく、之を信念として感得せしむる方法を取らなくてはならぬ、それには、別工夫の、一つの日本の歴史を編み出さなくてはならぬといふのであつた。惜しいかな、其後間もなく翁は熱海で大患にかゝられ、此の歴史編著の計劃が頓挫して今日に及んだのである。之は、兒童劇や、ページントの様に翁一個の勝手な試みとして、見本を提供して宜しいといふ様に輕々しい問題ではないので、どんな形に實現されてよいか、然う簡單には、大要も説明し得

ないのであると言つて居られる。逍遙翁が、思想家であり、藝術家であるが故に、直ちに虚無主義者であり、世界渾一主義者であり、而して劇道に遊び、世を捨て、好むる所に阿るの學究であるが如く思ふは、之れ立雲翁を目前に、横紙破りの無法者にして國法を蔑視して我意を振舞ふのあはれ者となすと同じ様に誤りである。其初め、大學生時代、外人教師の政治學講義を嫌つて、小説に讀み耽り遂に卒業試験に落第したといふ逍遙翁——而して、漫罵縱横、觸るゝ物皆な斬るの機鋒當るべからざる鋭氣あり、只管に、其の好む處に馳せて、學業を怠り、薄想弱行殆んど濟度しがたしと、親友高田半峰居士をして嘆息せしめたと言はるゝ逍遙翁が、翻然志を立て、學業を修むるに至るや、其の生れながらの弱い意志を自ら鞭撻して、精勵、黽勉、夜日に繼ぐの大勇猛心を奮起したのである。私は双柿舎の年古りた柿の木を見ると、それは逍遙翁の身體と精神と二ツながらを現はしたものに思はれる。本來、丈夫に出来て居ない翁の身心は翁の節制と忍耐と奮勵とに依つて、持堪へて遂に能く今日の大成を見、同時に其心境の澄明透徹、一種の悟道に達して居る事は、大隈講堂に於ける役の行者朗讀の一喝が、田中智學氏をして、之れ「何人も模し得ない、一種超人的のもので、博士の仙氣を帯び、梵音に近い一喝に接した時、不思議な聲だと感心すると同時に、雅邦の臨濟一喝の名畫を思ひ出した。……之くとして可ならざるなき博士の創意とはいへ、全く細致洗練の結果、この貴き眞藝術を生んだものであらう」と讚嘆せしめたに見ても其の一端を推せられるのである。

巨人の相貌

「福岡玄洋社の頭山滿」と斯う呼ばるゝと一般世人は、先づ恐ろしい人といふ事を考へる。併し、翁に親炙した人は、成程、翁には底知れぬ處があるが、所謂狂暴とか無法とかいふやうな恐ろしさの影もない事を認むるであらう。此方の心術さへ正しければ、何を言つても差支えない、悪意でない限り、多少の過失は許されるといふ信念を得るであらう。翁に無限の寛大さがある。義によつては、人の爲に一命を失ふの危険をも冒す慈悲がある。此の寛容と慈悲とは、翁が、長年月の經驗と努力に依つて修養し得たもので、此處に達する迄には非常な忍耐と熟慮を積んだものと思ふ。

だが、翁の風貌は一見甚だおそろしい。併し、それは百獸の王と言はるゝ獅子の威風にも似たもので、測りがたき偉大の相である。にやけたやうな、柔和の相は毛頭ないのであるが、と言つて暴戻の相は微塵もないのである。釋迦は三十二相を備へた顔であつたといふ。併し後代の畫圖に残る釋迦の顔は之を單なる慈悲心の本尊として畫いた想像畫であつて、三十二相必ずしも釋迦の型ばかりとは限らない。其表情は異るとしても、頭山翁 亦人間相を具備した一種の型であると言へるのである。そ

れが、本質上、勇者の型として、不退轉の勇猛心の本尊として、想像畫ならぬ現實相として存在するのである。故に釋迦の三十二相といふ、あの類型的な所謂佛様面は想像の偽物であつて、頭山翁の風貌は現實の眞物であるとも言へる。

私は、造化の神秘を看破し得ると標榜する處の人相觀者でないから、科學的理由を附けて、人相判斷をする事は出来ないが、併し、直覺力に依て人間の相貌を考へる點に於ては餘り間違はないつもりで居る。一體、凛として正面に顔を擧げた女は一層の美人になるが、げらく笑つた時の女の顔は數段の不美人に墮する。笑ふといふ事は、相を崩すもので、崇高の美を失ふのである。頭山翁の相貌が、恐ろしいと見えるのは、むしろ崇高の相なのである。今朝野の名士を一堂に會しても頭山翁程威風のある顔貌は他にないのである。それは、翁は人間相を具備して、何等か一つでも、缺けた處、抜けた處がないからである。支那では、神と祭らるゝ關羽、劉玄德、諸葛孔明、我國では、八幡太郎、坂上田村麿、武田信玄、竹中半兵衛、近くは、常陸山、荒岩、何れも申分のない立派な顔で、釋迦と並んで立つてもひげを取らないのである。若くは畫人の理想として作り上げた不動明王、摩利支天、毘沙門天と比較しても、何れ劣らぬ立派な相貌である。此間に伍して頭山翁の相貌は決して次位に落ちるものでないので、從來此の世に實在した世界の偉大なる人物の寫眞と對照して、一種特有の型と

して、最上位の一つに居るのである。恐らく現代の世界名士と言はるゝ人々と一堂に會して第一位の威風を示す事であらうと思ふ。ムツツリニー、ケマルパシヤ、マグドナルド、クレマンソー、ヒンデンブルグ、フーバーと數へて來ても、頭山翁の牙え切つた、澄んだ中に、烈火の熱と、鋼鐵の堅牢を藏した相には遠く及ばないのである。又は近く我が明治維新以來の、幾多の偉人と言はるゝ人々と比較しても、南洲、甲東、松菊、星亨、原敬と數へて來て、逆も頭山翁程の威風は見られないのである。兎に角「恐ろしい顔だ」と、何れも氣を吞まれて、後へに撞着たらんばかり、一點非を打つ餘隙を與へない處は、百獸の王たる獅子に對して、誰人も、非を打つ處はなく、唯だ立派な相であると感心すると同じ事である。

人間の相貌は心の光りである。頭山立雲翁の誠忠至孝の精神は有らゆる方面に瀰漫して、今や一世を曠ふするの大威力を醸成したのである。希臘で、歴山大王を呆然たらしめたデオゲネス、それにも増して百代の後迄も威風を遺したソクラテス、支那では顔回、それに、我が頭山翁の如き、相將の位に上らざるも、人間としての大なる價値を呼び、其の世道人心を作興する力は絶大である。

相通する兩翁の心境

頭山翁のあのおそろしい顔から、定めし落雷の様な響聲が發せらるゝかと思つて、豈圖らん それ
は、やさしい、女にしてもやさし過ぎる様な小さい聲で、靜かに物を言はれる。之に對しては、
繊細な婦子供も安心して對話する氣になる。と言つて、一言一句薄氣味悪い様な鋭い機鋒を藏したも
のかといふに、決して然うではない。其の語調は、好々爺の自然味あり、其の語る事磊落落竹を割つた
様な明快さがある、絶へて齒に衣着せる陰影がない。何んでも明らさまに底を割るから、硝子張りの
形で、翁に接する事が、餘り多くなくとも、其の爲人を一通り、見廻つたといふ氣がする。私が、學
校時代以來今日迄、逍遙翁に接して、翁を解し得た位には、近く十年、特に最近兩三年の親炙に依
て頭山翁を解し得る様に思ふのである。そして、正反對の型を示して居ると見らるゝ兩翁の間に、不
思議にも酷似した點が多い事を思ふのである。或は、人間も至極境に達すると、一樣に同じ心境に安住
するものであるかとも思ふ。頭山翁語つて「妓共は、私の事を、聞いて恐ろし、見て怖はらしい、添
ふてうれしい頭山さん、と言ひ居つた」と微笑して居られた。斯うして、眞底何にも恐ろしくない頭
山翁といふ事になる。

精神的劍難もぐり

逍遙翁とても、清癯鶴の如く、風骨仙に、侵しがたい風格を備へて居る、逆も氣むづかしい、一言
粗忽があつたら、それこそは、役の行者の朗讀時の一喝を食ふかと初對面者はびく／＼するのである
が、之は、翁が長い間の修養忍耐が、凝つて玉成したので、翁の辛抱強い事と、刻苦精勵とは、精神
の培養となり、其處に自らなる光りが現はれたのである。逍遙翁は、立雲翁の如く、自ら身を勞し
て幾度か危地を踏んでは、觀相者をして「劍難もぐり」と稱せしめ、國家の難局を濟はんとして時に
獄中の人となり、或は、勝てば官軍、負ければ賊の肚を定めて大久保暗殺後政府顛覆の謀反旗を擧げ
やうと圖るなどいふ荒つばい、陽性の行動を取つた例はないのであるが、併し、精神的に一生の牢獄
内の人である。天縱の才を恵まれた以外には、家庭的には殆んど悉くを奪はれた。それこそは、野
末に迷ふ小羊である。涙の一生である。之を忍んで、遂に藝術に生きるの一生を仕上げたといふ事は
非常な努力であつて、之は、精神的劍難もぐりであらう。

逍遙翁は未歳の生れで、生れながらにして柔和な羊である。「小羊である、即ち逍遙である、壺中に
逍遙する事は、三千世界の大宇宙に悠游する事である。即ち坪内逍遙である。讀む書くの一生、即ち

紙を食ふて生きた小羊である」と、翁自ら言つて居られる。羊は獅子と同じ體力を有つて居ない。羊の一生は、忍辱以て常道を歩むの辛抱である。印度に於ける釋迦の再來を期待される山羊髯のガンヂ、是亦羊型の英雄の一例である。其處には無理がなく、素直に、遅々と常道を進んで大成するのである。

南陽草廬の圖

聞いても、見ても恐ろしくも怖はらしくもない逍遙翁も、其代りに、清高、深遠、攀ちがたく及びがたく、侵しがたき、相がある。直情、徑行、生一本に明哲を以て向つて來らるゝ時、對者は、自分の汚染を思ひ、不淨を思ひ、明鏡に對して、敢て自らの陋態を仰ぎ見る能はざるの思ひがするのである。正さに之れ嶺上の花、天上の月である。併しながら其の濶情、親切、行き届くといふ點に至つては、私の今の氣分では、頭山翁と全然同じ人の様に思はれる。逍遙翁は、病中も來訪者ある時は、家人之を告げずに歸す事は出來ないと言はるゝ。事を苟くもせず、整然として、純白な小羊として、熱海の山の手の双柿舎の茅屋内に端坐する處は、仙士隱棲の形、北齋が好んで描いた、南陽の草廬の圖とも見たい。

七世文章を作るの苦心

其の逍遙翁から、私が直接教はつた處は、文章道である。文學一般の事は其の數々の著述を讀んで間接に教はつたのであるが、細かい、痒ゆい處へ手の届く様な章句のつかいこなしは、私が何か書いた物の上に就いて、いろ／＼の注意を與へられたのである。句讀の切り方、送り假名、江戸ツ子式の口語體、文章體と口語體との根本相違、敬語の使用法などいふ細かい點迄、具體的に綿密な注意を與へられるのである。但し、私の粗雑な頭腦は之を體得するに至らずして、後から／＼と抜かして了つたのであるが、一ツの概念として、そんな注意要項を臆ろげに記憶して居るのである。紅葉は七世文章を作らんと言つて死んだといふ。文章道又難いかなと言はざるを得ない。

天下横行術

己に逍遙翁から、文章道を教はつたとすれば、私が立雲翁から學んだ處は、横行濶歩法である。但し、翁は人を人とも思はんなどいふ無法者ではない。凡ての人格を尊重し、人に對して慇懃親切なのである。翁と同席する人は、淋しからず、騒がしからず、忙中に閑を思ひ、信頼の念を起し、落着い

て安心して、大船へ乗つた氣で居られる。うるさい行儀作法を積極的に氣にする要はない。惡意あつて、若くは故意に甚だしい失儀に亘らざる限り、どんな事でも話して差支ないといふ心安さを感じしむる。

そんなら、立雲翁は、好人物で、容易に人にかつがれるかといふに、それは迎もかつぐ事は出來ない。翁は多年の經驗に依つて物の表裏共に知悉する眼力を以て居る。法を以てすれば欺くべし。利を以てしてかつぐべからずである。而かも、翁の客に對するや、殊更らしいお世辭らしいものは丸きり無いのであり、多く言はぬのであるが、一言發すると、それが、いかにも自然で、客をして夫れを否む事なく、好い氣持に其の通りにならしむるのである。蟬りのない、からつとした翁の氣質が客をして、窳窟を感じしめないものである。今日、立雲翁には一敵もなからう。所謂ニコボン主義で立つ人でなく、あれ程ぶつきら棒で押通して、一敵ないは稀しい事であらう。

立雲翁は、智仁勇を逆に、勇仁智と進んだ人と見える。君子器ならずで、翁には、器用な新代の學問知識は缺くとも、人生の根底に徹した大精神がある。此の一心以て、他の萬能を壓倒するのである。今日翁に對する世間の評は「解らない人」といふ事である。餘りに大きいものは普通の尺度で測る事が出來ないのである。

立雲翁の音曲趣味

輕妙酒脱、多藝多能と思はるゝ文學者たる逍遙翁が、何んの藝もない、どちらかと言へば謹嚴の人で、剛毅朴訥何んの藝もない人と思はるゝ立雲翁が、却て美い聲で巧みに歌ふと聞いては、呆氣に取られる事であらうが、酒一滴飲まぬ、立雲翁の歌ふ事は、親近者の皆な知る處である。不思議でもない、翁は音曲を好む事甚だしく、少年時代には、福岡で、筑前琵琶を擔いで町を歩いたと言つて、其の琵琶が、今も翁の宅に保存され、翁自らは、彈奏し得ないが、其代り總領嬢さんに、餘り好まぬのを強制的に、習はせたといふのである。初代橘旭翁が、初めて東京へ出て來た折には、當分牛込納戸町の翁の邸内に寄寓させられて、頭山翁夫人も、手解き練習をしたと言はれ、何時か、其話が出た時、翁は、夫人及び今は縁付いて數多の子女の母たる、嬢さんを、殆んど、命令的に二階に呼ばれて、秘曲十二段を彈奏させたのである。思ひ立つたら即刻何んでもやつて見るといふ翁の無造作が此の場合には特に顯著であつたのである。然ういふ點から考へると、橘宗家の翁に負ふ處至大であり翁は眞に、橘流琵琶なるものゝ後援者である。従つて、相當の琵琶師は、争ふて、翁の邸に押かけて一曲を聽いて貰ふ事を無上の光榮として居るのである。翁が一番其の妙技を賞讃するのは、盲人富永

旭昇であるが、旭昇、夫程の腕を以て、當今唯一の名人と折紙を附けられながら、不遇にして、陋巷に窮居するさまは、宰相大臣を膝下に拜跪させる威力ある頭山翁が、やつと、中流處の家に入つて借金又借金で日夜苦んで居るにも似て居る。

之を逍遙翁の太い富ますと雖も、衣食住に事を缺かぬ生活に比して、大なる差がある。逍遙翁は生來の弱者として、勤勉力行常道を踏んで自活の道を立てたのであつて、之には何んの不思議もないのであるが、併し、立雲翁は、二三十年以前、北海道の炭鑛を賣つて七十萬の金を手にしたのを僅に一年足らずに、凡て散じて了つたのである。今日では五六倍の價格であらう大金を少しも惜む色なく散じたといふに至つて、到底常人の及ぶべからざる怪物である。決して常道を踏んで安んずる人ではないので、翁は此の金を以て他の血を買つたのである。いざといふ場合、翁の爲に、金を出し、果ては生命を出して辭せないといふ人のあるのは、其の爲であらう。金の番人をして悪口を言はれるよりは此方が、宜しいのであるが、併し、夫は翁にして始めて出来る權道である、權道を往くは力の人のみ之を能くする。

東湖の再來

酒一杯飲まぬ下戸の頭山翁の室に在つて、人は酒席に寛ろぐが如く、心の紐を解いて、酔ふた時のやうな豪快を感じる。座談に巧みなる翁は、御自分の經歷を面白く語つて、どつと容を笑はせる。其の明け放しな態度、思ひ切つた自白は、聽者を撞着たらしめるのである。其の屈托のない、無頓着な態度は羨望すべきものである。神經質に、臆病に振舞つて、戦々兢兢として、小心翼翼として、息詰る思ひをして生きて居る自分が、頭山翁の前に出ると、輻射が大河に放たれたといふ思ひがする。自分もあんなに、磊落に存分に振舞ふ事が出来たら、何んなに快い氣持だらうと思ふ。私は頭山翁に接して、近く二十年餘り、人間としての修養の一面を全然怠つて居た事に氣が付いた。由來文學界の人は、薄志弱行が其の特典でもあるが如く考へて、力とか意志の修練とかいふ事は一切要がないと言ふ風に考へるのである。だらしのない、自墮落な生活をしなければ、文士らしくないと言つた氣風がある。私が、郷里の中學時代に、泣きの涙で勉強した豪傑學も、東京へ出て文士の仲間入りをして以來、何んの用もないものと考へて居たのが、今、頭山翁の前に出ると、一座の客は、何れも錚々たる名を取つた天下の豪傑で、世に文士なる者の存在すらも知らないと言つた顔ばかりであるやうに思へる。「強くなれ」力の人となれ「些とは無理が利かなくては、世の中も面白くない、生き甲斐がない」と言つた聲が、がん／＼耳元で響く氣がする。博浪の一推を試みる張子房の如き、若くは、暴秦の宮

殿に突つ立つて始皇の暴戾を責むる蘭相始の如き、強い力を養はなくてはならぬといふ。眼前の急務が、犇と迫つて来るの感に堪へないのである。中學時代の我々の守本尊「藤田東湖の再来、頭山立雲翁」と叫ばざるを得ないのである。實際、立雲翁は、東湖に私淑したらしくも見える。其話題が能く東湖に及ぶ「東湖は食咽喉を下らず、僅かに二三椀に過ぎずと言つて居るから、大いに下つたら數十椀にも及ぶのだらう」と、立雲翁は大笑されたといふが、翁も大いに咽喉下らずの方では東湖の亞流で「食はぬ時は一日二日は食はんでもよい。其代り一度に二十杯も食へた」と自ら語つて居られた。他の圍碁を見物しながら「汝嘗て受く豊公の憐み、一勝一を加へて百目千、千瓢向ふ處勁微なし」などと小さい透通る様な聲で微吟して居らるゝ事もある。人を壓倒するの氣魄、獅子奮迅に初志貫徹に向つて突進するあたりの猛氣は立雲翁頗る東湖に似た處がある様にも思ふ。私は、自分丈け然うと決めて、東湖の面影を其處に彷彿し得る事を樂みにして居る。

人間は、動物電氣だか、心靈交感だか、に依つて聲も貫へる、力も貫へる以上、猛氣膽氣も貫へる筈、始終其人に咫尺親炙して居る中には、其の強い力を幾分なりと自分にも受け得られそうに思ふ。「困つた時、行詰つた時、手も足も出ない時には鼻唄でも歌つて居れ」といふ、立雲翁の態度には學ぶべき點が多いのである。之は圖書館を探がしても、ブリタニカを引いても出て來ない。唯だ、翁の

言葉と態度の間から直覺的に看取る外ないのである。何れにせよ、翁の如き、現存の標本があると
いふ事は、力の人たらんと努力する者に取つて幸便の至りである。

猫の頸に鈴を附ける人

力の人、實行し斷行する。或は立雲翁に經綸がないから駄目であると説く。併し、薩長政府者の經綸が、支那と露西亞に對して何んの役に立つたであらう。幣原外交を無經綸と罵つた、田中内閣の對支外交は、何んの役に立つたであらう。百の經綸らしい小細工も、のつそりと竿頭一步を進める頭山翁の威力の前には、霧と消えるのであらう。支那を膺懲し、露西亞を屈服せしめたものは、頭山翁の力ではないか。世界智識なるものと、所謂經綸なるものとは、鼠の小田原評定である。猫の頸に鈴を附け得るの力を有つて居る者のみが、國家を濟ふのである。

天下取りの上乗なるもの

世に、政治家は、えらいものとして、第一位の人傑と見らるゝ。併しながら、匹夫にして一代の師となり、一言にして百世の法となると言はるゝ人物は、政治家以上の人豪である。文豪として、思想

界の先達としての逍遙翁に於てそれは言はる。又其身一度も臺閣に列せずして、而かも其の一言、時の政府を震懼せしむる立雲翁の如きも、經綸を口にして却て黨人の利を先きにすると言はる、政治家を遙かに抜いて居るのである。兩翁共に無慾にして、一は努力の人、常道の人として、正當なる勞力の報酬を取るのみ。一は人の窮乏を見ては、鉅萬の財をも惜しむ處なく與へて、自らは恒産と見るべきものすらも残して居ないのである。共に之れ人の師たるべき人である。立雲翁の、執着なく恬淡なる事は日常の些事にも能く現はれるので、嘗て、行き詰つた際には、一物を要せず、唯だ碁盤一ツあれば足ると言つた話もある。又今夏、支那に赴く際、折角好物の大角力を見終らずに出發せらるゝは、思ひ残りである事だらうと問ふと、翁は「角力を見んでもよいのぢや。私はそんな執着はない」と言はれた。妓にしても然うで「振る奴には振らせて置け」といふ。「私は、用はないと思つたら、傍に臥て居る妓に對しても石と同じ事ぢや。地方へ行つた時など、若いきれいな妓を見立て、呉れるのぢやが、私はそんな氣はなかつた。然うと思ひ切ると、石が居ると同じぢや。私は五十歳過ぎでは、輸出は止めたのぢや」と語つて居られた。

兩翁を一丸となさば？

逍遙翁にしても、最初から文壇の總元締め格で、文壇に名を成さんとする者の多くは其門を叩き、其推舉周旋を希つたのであるから、翁には、ゴシップ種は、かなり澤山に有る筈であるが、翁は、殆んど、之を口外された事はないのである。人を傷け、人を赤面させる様な種は、一切打明けないのである。翁があれ程の能辯を以てして、材料豊富でありながら、其の座談の、講義、朗讀、講演に比して却つて振はないのは、雑談、樂屋ばなし、噂は、得て禍の門である事を警戒される爲であらうと思ふ。思慮が深く、大慈悲心がある爲めである。私が、一昨年の初夏双柿舎を訪ふた際に翁は豫め、電話で、病中故、十分ばかりといふ事であつたが、話が面白くなつて、明治初期の文學會の事から、特色を有つた、當時の文學社會の人達の身ぶり、假聲迄示されて、一時間半にも及び、あれ程、高潮に達した翁の坐談、而かも、他に相容もなかつたのに、他の話を引き出す事の拙劣な私にしては、異様な感があったのである。あんなにも、座談の巧い人が、日常座談に、牙えを見せないといふのは、ゴシップの禍を思ふての謹慎緘黙でもあらう。明哲身を持するに、踏氷、臨淵の誠意を以てする事、磨き成せる智に於て、立雲翁の勇と、正さに國寶双璧であらう。彼の政治家なる者に於ては、之を頼朝に見れば、同胞と功臣を屠つて却て自家の滅亡を早やめ、家康は兒戯に等しい、鐘銘の托言を以て豊公の遺子を滅ぼすの卑怯な行動を取るなど、經營の才は賞すべきも、其の執着、強慾、何んでも、

天下を我が物にせでは止まぬといふ陋態は、決して立派なものでない。政治家覇業を立つるは、天下取りの下なるものである、モツと上等の天下取りは之を現在我が兩翁に見るのである。天下皆兩翁の心を以て心とせば、世は無爲にして化するのである。若し夫れ、兩翁の勇と智とを併せて、天下を治めたならば、歐洲文化の基と言はるゝペリクレスの治世が開かるゝ事であらう。ペリクレスが古今第一の政治家であるとされるのは自家の覇業を思はずして人類文化の開發の爲に努力したからである。三十年間、天下の大權を握つて、一厘も自家の財を殖さなかつたといふペリクレスは、政治家に取つての模範であらう。

後進に對する謙虛

日本始まつて以來、頭山翁程に氣儘に振舞つて、それで終りを完ふした人は他に例がなからう。大御所だの元老だのといふと天下意の如くなる様に聞えるが、そんな地位に立つ程、責任が重く、世間の誇りも多く、終生重荷を負ふて居るのである。頭山翁に至つては、無一物の浪人であつて何んの責任もない。雲去風來身は軽く、それで居て一たび手を舉げ、足を投ずれば、風雲を喚ぶ事が出来るのである。取るべきものを取らざる清廉堅忍が、翁をして斯くの如き威力を生ぜしめたとも言へる。

頭山翁こそは、眞の大親分である。天満興力頭の平八郎の如き執着がないから、自ら大親分たる權力を握るの野心がない。野心がないから躓きがないのである。命も、名も、利も、要らなそうなに見える。一切を脱却した人である。金を脱却し女を脱却し、權勢を脱却した、浪人の巨頭である。天下立雲翁の門下、自分を以て任ずる者多いが、翁自らは、所謂子分と言はるべき者を一人も有つて居るとは思つて居なからう。頭ごなしに、あごで人を使つて、子分の多きを誇る様な事はないやうに思ふ。此點は、逍遙翁とても同じ事である。私が、逍遙翁の紹介状には、何時も校友と書かれて居る。或は私が翁に關した事を書いた中に、翁が正誤訂正をされる場合にも、少しも、私の面目を損ずる事がなく、却て、私を一層に引立てゝ呉られる、愛嬌の字句が加はつて居る、頭ごなしの、市井の親方氣質などいふ事は毛頭ないのである。下に對して横暴、上に對して諂佞といふのが、今日羽ぶりの好いと言はるゝ人の通弊であるが、立雲逍遙の二大親分には、そんな處は更らにない。

以上私は立雲、逍遙兩翁に就いて、取留めもなく、私の感じた事を書き綴つて見た。何んの爲にこんな事を書く氣になつたか、自分にもはつきりわからない。唯だ、書きたいといふ念が湧いたのであ

る。兩翁に對して精確な評論をしやうなどと考へたのでなく、趣味的に面白い、柔剛兩極の對照が頭腦に浮んだのである。兩翁は、私が心底から敬服し居る、兩極の第一位の人で、誰にでも、あらをさがして悪口が言つて見たいといふ頑童癖の多分にある私にも、此の兩大關には非の打つ處を見出さないものである。書きたい事は山々だが、幾ら書いて見ても、同じ高さの處を廻つて居るに過ぎないので、唯だ、汚ない足形を山腹の雪に餘計に付けて居るやうで氣がひける。

最初、此稿を作つた時、私は其旨を逍遙翁に申して、一閱を乞ふた。後で、道具外れを打つて居ると詰られるのが苦痛だからである。すると翁は「一體、比較にもならぬ兩人をどんな風に書くつもりか一遍見やう」と言はれて、扱て、御自身の事に就て綿密に朱筆を加へられた。其中には、随分思ひ切つた點もあつて「見す轉一匹買つた事もない自分が云々」などいふ、すば抜けた磊落な文句迄あり私のやり放しな書き足らぬ文章が、しつかり引締まつて、立派になつたので、私は大變儲けものをしたと思ふた。

然る處、悲しいかな、其の原稿は失はれた。といふのは私が本書を平凡社から出版の約束が出来、版に組むかりにして、原稿一束を持つて行く途中、松住町で電車内へ置き忘れて紛失して了つたのである。「ビールへ阿片を交ぜたのを飲まされて歸宅したら、手の舞ひ足の踏む處を知らざる快感を得

た」といふ或る雑誌記事を讀んで、私自身も此の阿片に酔はされ、電車の内へ原稿一束を遺失したのである。探索の手續を盡くしたが、其の原稿は出て來ない。全く困つた。

併し、頭山翁直話の分は、一度雑誌に掲載したもので、いろ／＼面倒をして、原物を再びまとめる事が出来たのである。此の「双柿舎から常盤松へ」の稿も、逍遙翁一閱の際、更らに一通修正し、淨書して持つて行つたので、最初の一通だけは手元に有つた。併し、折角翁が加筆された方が、遺失したので、残念至極である。モ一度加筆を願ふ事も餘り不慮慮でもあり、且つ同じ仕事を二度勤むる事は、文章道の上では、誰れしも嫌やでならぬ事でもあるから、私も、觀念して其儘にしたのである。

尙ほ、印度亡命の、ボース氏に對しても、同じく寛恕を乞はざるを得ない。本書に載せた「ボース氏の談を綜合して」は、ボース氏が實際、語つた程度に詳しくなつて居ない。一旦原稿が失はれて、下書もないのであるから、實に困つた事であつたが、實は或る雑誌に、私が最初書いて置いた、ボース氏談を貸してやつて、雑誌社内で夫れを布衍したものを別に作つて掲載したものがあつた。私は夫れを頼りに、私の記憶を呼び起して新規に作つたのが、本書一五二頁以下のそれである。折角ボース氏が、私の求めに應じ溜池の葛生能久氏の宅で、五六時も身上話を聞かして呉れ、私が夫を書いたのへ

訂正加筆迄して、略ぼ完璧となつて居たのを電車内で紛失したので、ボース氏に對しても濟まない事であり、私自らにしては折角骨折つて書いたものが無くなつて、残念至極である。但し、大體の経過と、要めの點丈は減多に書き落さなかつたつもりで、間違ひも餘りない事と思ふ。

三三四

頭山滿翁の眞面目終

昭和七年六月十三日 印刷
昭和七年六月廿一日 發行

頭山滿翁の眞面目
(定價金壹圓五拾錢)



編者	薄田 斬雲
發行者	下中 彌三郎 東京市日本橋區吳服橋三ノ五
印刷者	關口 一男 東京市日本橋區吳服橋三ノ五

發行所

東京市日本橋區吳服橋三ノ五
振替東京二九六三九番 株式會社

平凡社
電話日本橋 二二三 一五五 九八七 番番番

河田製本

協營社組版・共立社印刷

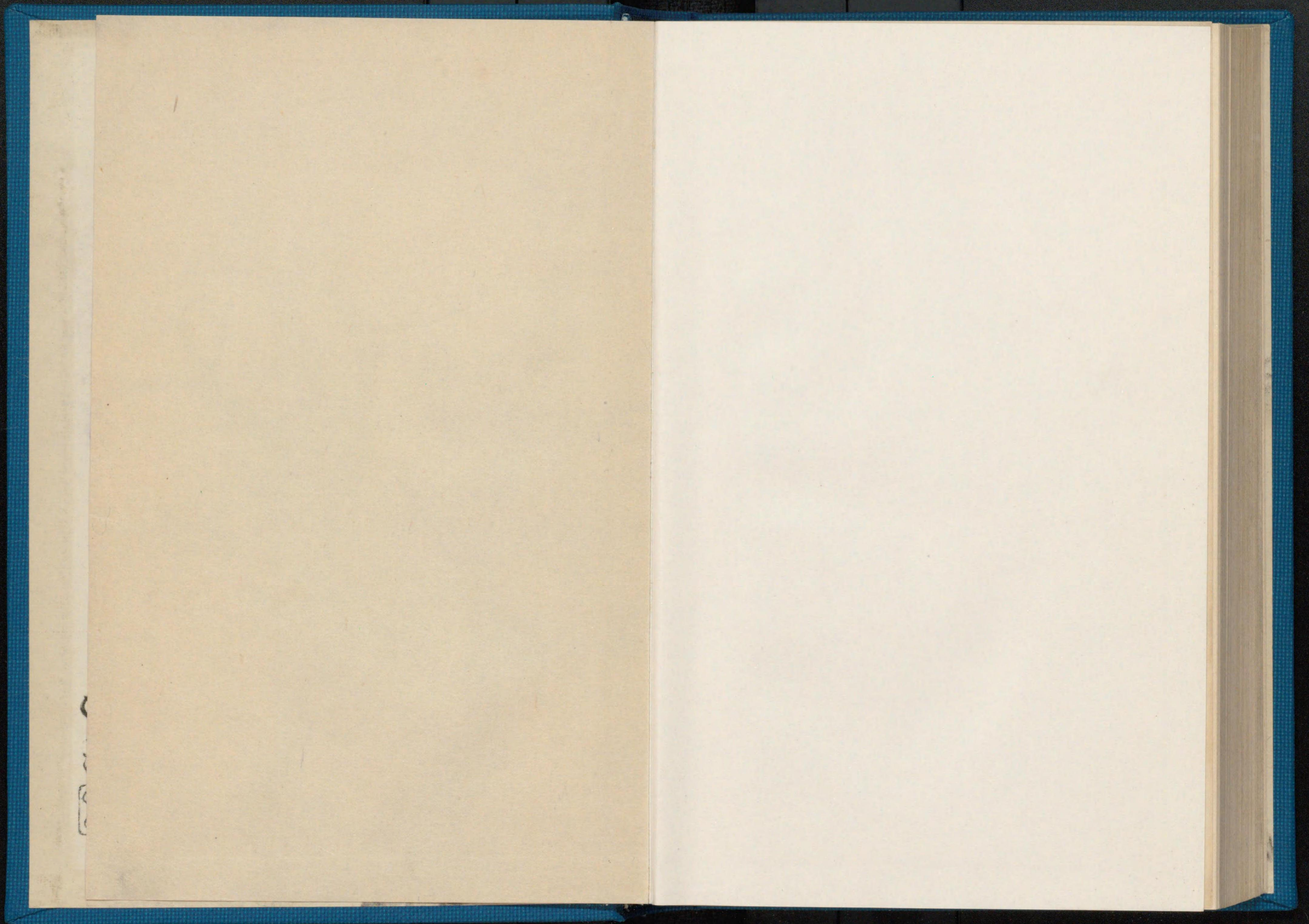
Vertical text on the left edge of the left page, possibly a page number or index marker.

Blank page on the left side of the notebook.

<p>Vertical text in the top-left cell of the table.</p>	<p>Vertical text in the top-right cell of the table.</p>
<p>Vertical text in the bottom-left cell of the table.</p>	<p>Vertical text in the bottom-right cell of the table.</p>

Vertical text on the right edge of the right page, possibly a page number or index marker.

Blank page on the right side of the notebook, with some faint ghosting of text from the reverse side.

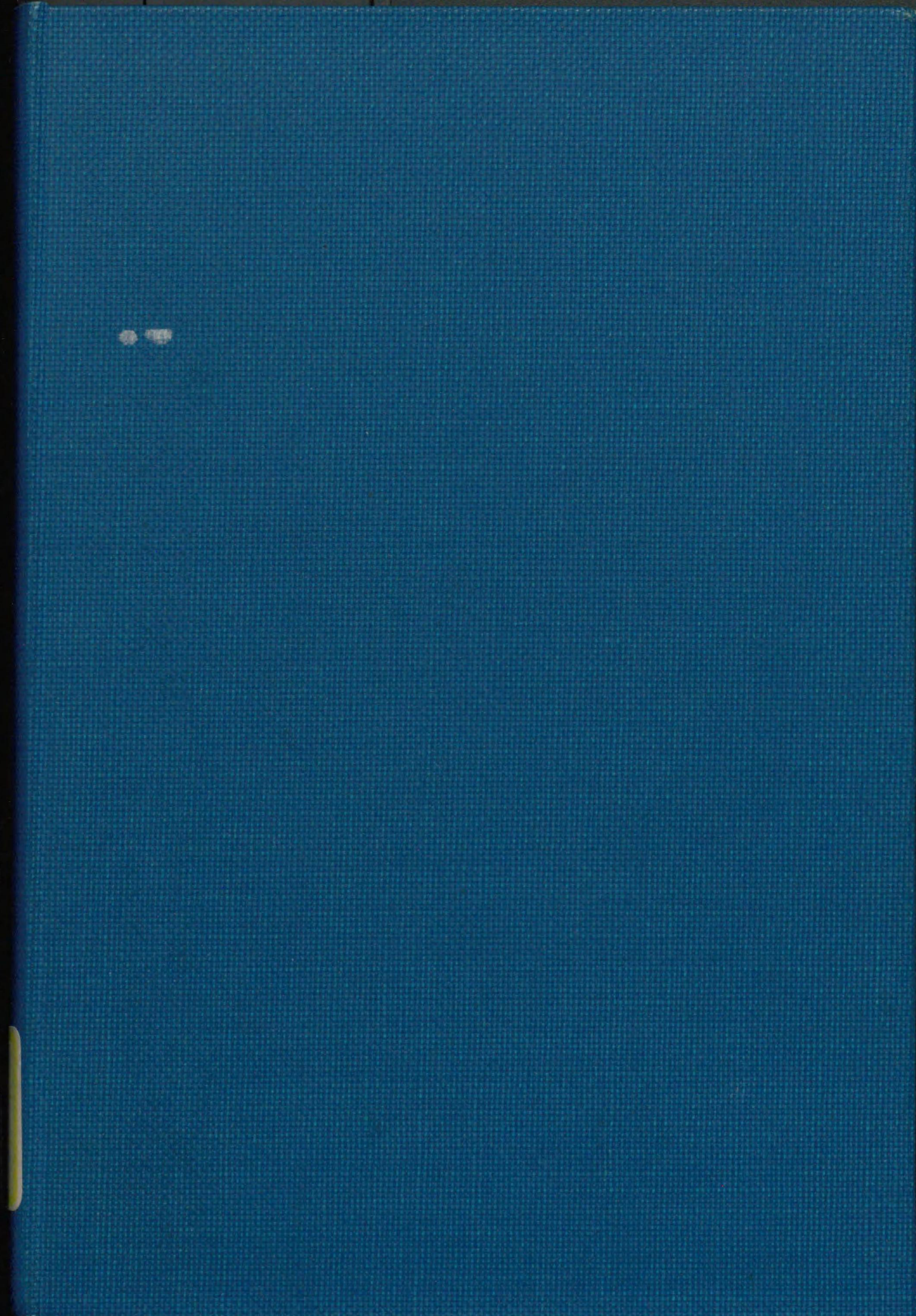


257



西洋
印



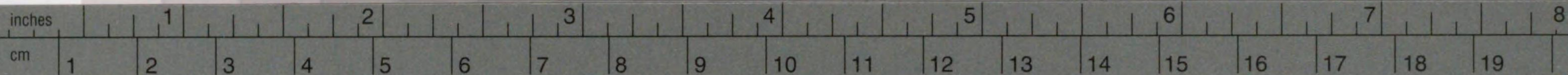


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

